

# 山岳時報

時 報

No. 3

1964年5月

京都大学学士山岳会

時報編集員印

## AACKの動き

去年8月に時報第2号が発行された。それ以後現在までにいたる会の活動を簡単に報告しておく。

遠征計画についていえば、サルトロ・カンリが終ってから、もういちどカラコラムに隊を送りたいという希望が強くなってきた。5月の総会に先立って開かれた理事会で、今年カラコラムのK12（第二候補はガッシュブルム第Ⅲ峯）に遠征登山隊を送ることが計画され、パキスタン政府に許可申請書を提出した。多田政忠隊長以下隊員は8人くらい、パキスタンとの合同はカラコラム・クラブとの話し合いがつけばしてもよいという、おおよその腹づもりであった。

例によって許可がくのかどうかなかなかわからない。帰国した在パキスタン日本大使館の牧内書記官、東京大学のバルトロ・カンリ遠征隊などから情報を集めて調べているうちに、年も押しつまった頃、不許可の内定があったことを知らされた。許可できぬ理由は明示されていないが、ドイツのババリア地方の山岳団体からK12に許可申請が出されていたから、あるいはそちらに許可したのかも知れない。K2、ガッシュブルムを含むバルトロ氷河北側の山域には、ここ二、三年隊を入れさせない方針ともいう。

今年の1月早々にK12計画はいちおうご破算にすることを決定した。同時に、去年から案の出ていたネパールのカンチェンジュン南峯または西峯を、来年のプレ・モンスーンにやる計画がかなり具体化し、3月7日の理事会で正式にカンチェンジュン計画をとりあげることが決定された。その後4月1日の理事会で隊の構成について討議が行なわれた。近く隊長が決まり次第、ネパール政府に許可申請書を提出することになるであろう。

一昨年来加藤泰安氏が在インドネシア日本大使館を通じて交渉中であった西イリアン計画は、その後京都大学生物誌研究会の手にひきつがれ、9月の現地予備接渉のあと、予備調査隊が派遣されることになった。加藤泰安、安江安宣、田附重夫の三会員が、京都大学山岳部、探検部の学生とともにスカルノ峯（旧カルステンツ・トップ、5,030m）登山を中心とする予備調査に従事した。3月1日インドネシア側隊員とともに登頂に成功、現地残留の二人を残して他の隊員は3月末に帰国した。

サルトロ・カンリ遠征隊の報告書「サルトロ・カンリ」は、今年の1月朝日新聞社から刊行された。「チョゴリザ」、「ノジャック登頂」とあわせて、カラコラム・ヒンズークシ登頂記三部作が完成したわけである。

外国登山関係者との交流としては、去年4月イタリアの登山家フォスコ・マライーニ氏、今年2月9日インドのエヴェレスト登頂者テンジン・ノルゲイ氏、3月15日ネパール日本文化協会のプラチャンド・マン・シン、ゴバル・ダス・スレスタ両氏をむかえ、在京の会員有志が懇談の機会をもった。

## 目次

AACKの動き	(1)
座談会 サルトロ・カンリ遠征をめぐって	(2)
AACKの30年——その2——	平井 一正 (16)
インドラサン遠征について	酒井 敏明 (21)
木曜講座 ——その3——	
カラコラムに残された問題	
K-12	上尾庄一郎 (27)
バルトロ氷河地域	羽根田博正 (29)
コンウェイ・サドル	安原 啓示 (30)
アメリカ大陸横断自動車旅行	中島 道郎 (32)
サルトロ・カンリ遠征学術報告	
繊維の高所劣化に関する報告	安田武・平井一正 (36)
サルトロ・カンリ遠征で撮影した	
心電図に関する報告	齊藤 惇生 (36)
ピッケルのシャフトの材料力学的強度に関する	
実験および考察 その1	富田幸次郎・西山孝 (43)
会員紹介	
工楽英司氏	本野 亨一 (49)
小野寺幸之進氏	四手井綱英 (49)

——この表紙の“AACK”の文字は、カスティラオによってイタリア語に訳され、セビリアにて1503年出版されたマルコポーロ著「東方見聞録」より採写したものである。京都大学図書館蔵——

座談会

サルトロ・カンリ遠征をめぐって

出席者	梅棹 忠夫	桑原 武夫	今西 錦司	斉藤 惇生
	加藤 泰安	中尾 佐助	岩坪 五郎	谷 泰
	高村 泰雄	北村 泰一	林 一彦	平井 一正
	上尾庄一郎	山口 克	多田 政忠	高野 昭吾 他

梅棹 チョゴリザの先例にならって、隊員、AA CK会員の有志、それに若い京大山岳部の部員の方にも集まっていたが、サルトロ・カンリ遠征をふりかえって反省討論会を開きます。

桑原 報告者は問題提起を簡潔に、討論に時間をかけられるように進めてください。

今西 各項目にわたることも結構ですが、とくにチョコリザやノジャックとの比較を考慮して、発言するようにしていただきたい。

過去の経験の集大成

梅棹 それでは斉藤君、問題提起をお願いします。

斉藤 1955年からAA CKはカラコラム、ヒンズークンと、日本の山岳界で独占的に手がけてまいり、58年のチョコリザ、60年のノジャック、そして今度のサルトロ・カンリと三つの山の初登攀に成功しました。今回のサルトロの成功はこれまでのAA CKの経験の集積の上に立たねばできなかったことで、また現在までの経験の総括という意味をもっていると思います。私は今度のはじめて遠征に参加したのですが、なにか全体的に余裕綽々という感じで、遠征にともすればともないがちなイチかバチかという場面や、精神的にキナキナするという感じが少なかったと思います。この点は全部の隊員に同感していただけたらと思う。

しかし実現するまでにはひじょうな苦勞があったことは、ご承知の通りです。カラコラム・クラブとの合同という形で許可が得られたが、長大なアプローチが困難視され、ピラフォンド・ラすら越せないのではないかとという声もあった。とりつき地点の氷の状態が悪いので、アタックはむつかしいだろうという、ジョン・ハントからのサゼッションもあって、隊員一同じゅうぶんの覚悟をしておったのです。途中クーリーのストライキもなく、峠越えもわりにスムーズにゆき、かえって隊員の高度順応に有利であ

ったと思われる。けれども、直接サルトロとあいまえたときには、かえって悲観的な見方があった。にもかかわらず、ルートワークも深い雪のラッセルに苦しめられながらスピーディに進み、ついにパキスタン側の隊員バンシル君も加えて登頂に成功したのであります。

遠征をふりかえって討論を進めるのに、次の二点、すなわち、ピラフォンド・ラを越えての輸送をいかに克服したか、もう一つは、ひじょうに困難視されたサルトロの山そのものの攻撃をいかにしたか、が中心になるだろう。この二つにつけ加えて、食糧・装備の進歩、隊員の編成と健康状態、それに心残りであった他地域の偵察ができなかったことなども、論じたらどうでしょうか。

梅棹 だいたい今度は余裕綽々であったというものは何によるものですか。山がやさしかったのか

加藤 まずお金の余裕があった。それからクーリーがチョコリザよりひじょうによかった。リエゾン・オフィサーが有能だった。現地へ着いた時期が早かった。こうなると小細工をやるより陣太鼓を鳴らして堂々と進むという方法をとった。トラヴェルの間はそうだった。

梅棹 トラヴェルの余裕が結局山にはいつてからの余裕を生んだと考えていいですね。

中尾 ぼくは余裕綽々だというのはもっともだと思う。それは隊員の選択がよかった。ぼくは今年OBと現役学生の混合編成隊でサブチーフに行っただけですが、サルトロの隊員がずらっと並んでいるときの顔を見て、これだったら楽だろうなとつくづく思った。

加藤 それは隊員の中に何回も行っているものが何人かいる。それから準備期間がひじょうに長かった間によく集って話をし、お互いの連携がよくとれている。それにポーッとほけたのがいて、トラヴェルの長いときにはひじょうにいいね。(笑)ベスト・メンバーだろうね。これは

若手のこと。年寄り連中は違いますよ。

隊員は青年将校ばかり

梅棹 隊員の構成の問題になりましたが。

岩坪 チョゴリザに比べますと、みんなだいぶん兵隊の位の高いやつばかりが来たような感じがします。前には上の二三人は働くけれども、あとはぼやっと見ているだけ、あるいはついて行くだけというのが多かったが、今度はちがう。ぼくより若い上尾や前小屋などが、チョコリザのときのぼくよりもはるかにしっかりしていた。全体が若手将校みたいで。

谷 しかしみな佐官級とか青年将校ばかりだというのは、ひじょうにいいけど、逆に歩が足りぬということ、つまり一兵卒がいないという不便はあると思うのです。

梅棹 ポーターがよかったというが、それを歩と考えることはできませんか。

谷 それはできますが。ただみんな同じ程度に能力があるものばかりだと、だれかがやってくれると思ってほっておいたら、みんなやっていたというところが起きたりします。

加藤 これは人ではないが、無電機が今度ひじょうによく働いた。隊が進むのにあんな便利なものはない。わしは機械はきらいですが。

高村 隊員の側からは、だれでもなんでもやれるようになってきたのでよかったという自己評価をやっているけど、留守番役の方からの意見はどうだったのでしょうか。

北村 ぼく個人の見方ですが、隊員のレベルが高かったのははじめから認めていた。それだけに案外と遠征の悪ずれをしていて気づかぬところで大きなミスがありはせぬかと心配していた。幸い大成功をおさめて帰ってきたので、さすがにやはりわれわれの仲間であった、という評価です。

梅棹 遠征にはじめてという人は、斉藤、谷、上尾、前小屋の4人、二へん目、三へん目が多いわけですね。これはたいへん大きいことやな。

団子の串ざしといわれて

加藤 たいへんほめられたが、これは結局若手が働いたので、

隊の構成からいえば、隊長・副隊長という団子の串ざしが上に乗っかるというのは、これはニスイ話だな。

梅棹 そのトップ・ヘビーであるという批判は、隊員が決まったときからずでに出ていた。そこにはやはりいい点もあるし、悪い点もある。

加藤 いい点ないですな。なんにもすることがな

いのだもの。実際やっている人に対しては、迷惑しごくな話だったろう。AA CKの変な宿命かもしれないけれど、おかしな話だ。

高村 加藤さんの立場としてそうおっしゃいますし、あまり多すぎるトップ・ヘビーはどうかと思いますけれども、ちょうどヨットの下のおもりみたいなもので、あのおもりがなかったら、ぼくらギリギリ舞いしてしまっただけかもしれない

梅棹 きょうは四手井隊長が来ておられないのでいちばんトップの意見を聞くことができないけれども。

林 私は団子の串ざしの三番目だったのですがこれはさっきいわれたように、たいへん迷惑ですね。しかしアンカー的な反面、ひじょうにぼくは楽をした。いざとなったらおっさんが悪いのだという。それは確かにあると思う。やはり大事なことじゃないかと思う。一概に団子の串ざしだからだめだという結論は、まだ早いんじゃないか。

それから、AA CKの中ではベスト・メンバーであるけれども、まだ隊に参加しなかった優秀な人はかなりいる。木曜会の連中が主体になったが、地方にいる人はたくさんいる。そういう人がなるべく参加できる体制をつくっていただきたい。

梅棹 トップ・ヘビーのよしあしの問題と別に、年輩者が何人か入ることにより若い優秀な人が出られなくなるという批判ははじめにあった。

林 それについては、準隊員というような枠をつくって、それを強引に押しあげた。いろいろ迷惑した人もあったと思いますね。

平井 トップ・ヘビーの問題もケース・バイ・ケースで、今度のようなスケールの大きな山登りになると、年輩者が行った方がいいんじゃないかと思ったのです。合同遠征になるといろいろ問題が起きてくる。われわれだけで解決できないこともある。

梅棹 トップ・ヘビーに対する批判的意見はトップの方からしか出ないですな。

谷 これからの隊は小パーティになるから、今度はひじょうにロスをしという気持がします。

梅棹 まあそういうわけだな。上の方の構成から見たら、二パーティ分はじゅうぶんにある。

一目散に引き揚げてきたが

中尾 ちょっと聞きたいのですが、登頂が終ったあと、みんなサラサラと尻に帆をかけて飛行機で帰ってきちゃったけれども、精神的に疲労しておったということですか。それとも……。

梅棹 この問題はそうとうに広くおこなわれている批判なんです、どうぞ、それぞれの立場から発言してください。

谷 金がない、あるいは精神的疲労、それは両方あったのです。その上で帰ってきたというわけなんです。ぼくはトップ・マネージメントの人にしたいのですが、すぐひっぱって帰るか、それとも残していてもいいとするのかの決定は、結局上層部でおこなわれなかった。帰るとすれば期日はどんどん迫ってくる。だから飛行機の切符も買ってしまったということではなかったかと思うのです。

梅棹 隊員の中では、残って各地を見たいという希望はあったのです。

谷 ありました。

梅棹 あったけれども、それが実現しなかった。ぼくはかなりあっちこちで聞くのだけれどもね。何たることぞ、AACKにしてああいう引き揚げ方を。腑甲斐ないという。

加藤 全員飛行機で帰すというのは四手井隊長の強い決心だった。今までみたいに長くかかって帰ってくるのは、大学の教室その他に迷惑をかけるし、将来出すのに工合が悪いから。もちろん、山は全部パキスタン側にシャット・アウトされたから行ってはいけない。ほかは行ってもよいということなんだ。それについての希望はあった。しかしみんな物見遊山にすぎない希望しかおれは聞いていない。谷は別だった。

もう一つは、カラコラムはもうええところですよ。もう次のことを早く考えなければいけない。それでは一目散に帰るべし。かなり新婚組もあったかもしれないけれども、(笑)だらしがないが、実際はそういうことです。

今西 物見遊山かもしれないけれども、希望者はどういふところだった、場所は。

加藤 フンザ、アフガニスタン、それからダーズリン。東パキスタンもあったな。

上尾 ぼくは意見があったのですけれども。酒井さんから手紙がきたときから、できれば、インドラサンの方にまわしてほしいという。

加藤 どうしても行こうという、強い要望はないと思った。

北村 個々に聞いたら、そういう若手の希望はいっぱいあったと思うのです。遠征がスポーツ化、事務化して、事後のあとかたづけのスムーズ化ということ、論功行賞的な考え、いろいろある年寄り連中は問題ないが、中層以下が、遠征の悪ずれがあると思うのです。

飛行機だったら十数万円、船でも十数万円くら

いという、金だけが頭にあるのです。われわれとしては、金はいいから、あっちこちつかめるだけのものをつかんで帰ってこいという気持ちです。

梅棹 そこはたいへん重大だと思う。飛行機で帰ることはちっともかまわない。ただ、ほかを見てこなかったということに対する留守部隊としての失望感みたいなものが、ひじょうに強くある。

### インドラサン 今西 まあ弟分がインドラサンへ行っているのだから、成功したサルトロ隊からだれか激励に——いっしょに登攀してこいというのではないですよ——情報をもたらし、激励に行くくらいの気持ちがほしいところやな。

林 酒井から来た手紙、それが極端にえば、お前らはちょっとも手伝ってもらいたくないけれども、高度計を持ってきてくれという要請なんですわ。いま今西さんがいわれたような気持ちを全然起こさぬ。

今西 カラコラムの帰りにインドのパンジャブにまわるくらいなんでもない。

中尾 いろいろいきさつはあるけれども、全体としてみると、だれもどこへも寄らずに帰ったということは、今度のエクスペディションの黒星だとぼくは思うな。

高村 自己弁護になりますが、いちばん強硬だった谷さんが諦めたのは、せいぜい一週間か二週間くらいの時間をもらえても、自分としては仕事になにもできない。それだったらぼくはまた来ますわという結論を出した。

インドラサンのことですが、行くことはやさしいと思いましたが、上尾がひじょうに行きたがっていたし、ぼくは行ってほしいと思った。しかし、インドラサンには一つのパーティがあるわけです。その際、酒井さんのパーティに上尾がはいると、ディスターブするのじゃないかと思った。

梅棹 手紙の文面をぼくは見えていないが、なにを小賢なことをぬかしやがってと、ニヤリと笑って行く手もあるわけや。ところが、このインドラサンの隊とサルトロの隊との間に、ぼくはそういう同じ仲間うちという気持ちがちょっと欠けていたような気がするな。

林 小さいエクスペディションを出しますね。そのコミュニケーションが悪いわけですよ。

梅棹 もしそういうことがあれば、よけいに絶好のチャンスなんです。なにかぼくは、聡明

な考慮がほしかったという印象はありますな。

加藤 ほんとうにそのとおりだよ。これは黒星といわれても認めざるを得ぬ。しかし、おれ自身は明らかにくたびれているのだ。早く帰りたい若手のどうしても行きたいという気持ちがほくのところへ伝わらなかったな。

梅棹 精神的疲労ということやな。

加藤 もうひとつ、さっきいった悪ずれだな。

斎藤 医者立場からいいますと、みな疲れてないといっても、かなり精神的な疲労があったんじゃないかと思えます。

よそへまわることを遠慮したのはやはり金の問題です。物見遊山だといわれたらうしろめたいですね。だから強硬にいいにくい。

梅棹 それはあるでしょう。物見遊山論をやってゆけば、インドを旅行する、あるいは谷のようにアフガニスタンへ旅行するというのも、それが山に対する果敢な斗争でないかぎり、全部物見遊山だという、アルピニスティック・リゴリズムだね。それに対する批判もまたあってよい

今西 学術調査をもうたっているのだから、知らない土地へとにかく行ってきたら、得るところは必ず大きい。物見遊山ということは悪いけれど、見学ということにしたら。(笑)

加藤 おれがいちばん精神的にも肉体的にもへばっていたのだからね。これはおれの責任だ。結局あまり強い抵抗がなかったことはなかったね

今西 やはりみな育ちがいいので、あまり氣勢をあげる若いものがおらぬということか。(笑)

梅棹 ぼくはケツまくりの態度もどこかで必要ではないかという気はするな。

上尾 もうひとついいますと、ぼく自身は準備の段階から事後の処理まで、できるだけ直接隊に参加した人間がやるべきだと考えています。それで写真の関係もあって、あまりはたらかしてよそへまわるということ強硬に言えなかった。

梅棹 いままでになかった空気で、ちょっと面白い問題が出ましたわ。

ところで、峠越えおよび山の攻撃のタクティクスについて、もう少し論じていただきましょうか。

### ビラフォンド・今西 今度のよう

にベース・キャンプからアドヴァンス・ベース・キャンプがひじょうに遠いというのは、オーソドックスなポーラ・メソッドにはない。たいへん面白いと思うのだけれども、加藤 だいたいスケジュールどおりにいったと思

いますね。一つキャンプはふえたけれど。

今西 マナスルのナイケ・コルにあたるのは？

加藤 C3です。アドヴァンス・ベースがC2にあたる。高村 峠越えの時期については、前からいろいろデータを集め、ディスカッションがあったのですが、今度の場合、ひじょうによい時期をあてたという気がします。

加藤 できればもう少し遅かった方がよかったかもしれない。まあまああんなものでしょうな。

梅棹 去年高村がかなり偵察しているでしょう。高村 峠の偵察そのものはちがうルートなので、あまり参考にならなかった。ガガル周辺の状況をあらかじめぼくが見ておいたことで、少しは気が楽かったです。

岩坪 高村がパキスタンにひじょうに慣れてきて、チョゴリザの今川さんの役割を果たした。ですから、ぼくたちはかえってサボって、悪かったかもわかりません。

梅棹 しかしよかったな。高村君がたいへん役に立った。殊勲甲である。これはまちがいないでしょう。

加藤 それはまちがいない。

高村 今度はじめて行った人でも、ひじょうに意欲的にウルドゥ語を学びとろうとしていた。それがクーリーを使って峠越えのトランスポートをするのに実に役立った。これは当然そうあるべきことなのですが、やはり少しははばってもいいことじゃないかと思えます。峠の上のキャンプの谷さんや、その下のキャンプで頑張っていた斎藤さん。物資の送り出しがひじょうに複雑なわけで、それを、ことあればストライキをやるろうと手ぐすねひいている人間を相手にやるのですから。この動脈がかちりできたことが、大きな要因じゃないかと思う。

谷 高村は人をおだてるのがひじょうにうまいので。それより重大な三つの要素があったと考えています。リエゾン・オフィサーが優秀だったこと。クーリーがよかった。それから輸送、トラベルに関して高村が大活躍した。

岩坪 隊員が輸送を上手にやったということではぼくの経験では今度がいちばんだった。ウルドゥ語に関しては、上三人を除きますと、(笑)ほとんどみな同じレベルに達していた。

高村 もう一つ、クーリーの中からサーダー役がつとまるものが出てきたこと、おかげでずいぶん楽だったように思います。

斎藤 行く前に平井からおどかされていて、クーリーたちに食糧を配給したりするのに、キ

リキリ舞いすると思っていたのですが、はじめだけこちらでやって教えると、あとはみなサーダーがやってくれる。クーリーの扱いがたいへんうまい。たいへん知恵のまわる奴だったですね。

加藤 アスコレみたいな悪漢はあまりいなかった。リエゾン・オフィサーが、なんでもいうことを聞くポケットとしたクーリーばかりセレクトした。また、ポーターがたいへん成長したわ。

梅棹 シェルパくらいいきますか。

加藤 まあいきませんね。いったいシェルパはサーヴァントだね。

中尾 シェルパは、われらはクーリーなんかと違うのだぞという気持をこのごろもってきて、使いにいくなってきたわ。

加藤 シェルパは山に登りたがる。むこうのハイ・ポーターは、これから先は旦那のことだ、ご勘弁を、というようなことです。

林 チョゴリザのポーターを半分やとった。連中は親近感があるから、それを媒介として、ほかのハイ・ポーターともうまくいったのじゃないかと思えます。

高村 村で出合うちょっと賢そうな子供に、お前は将来何になりたいかというと、ハイ・ポーターになりたい(笑)という。村へ帰るときにお仕着せの服を着ていきますが、一種凱旋將軍みたいな顔をして帰っていきます。

加藤 林の提案でお稚児さんみたいなのを三人やとったのです。いいやつと悪いやつとあったけれどね。おれについてきたやつは、いきなり I shall go with you. という。びっくり仰天した。これは英語できるとしたら、それしか知らない。(笑)

### 山にかかったら ラッシュ戦法

梅棹 峠越えの問題はそれくらいにして、アタックにかかったからの問題にはいりましょう。

平井 C3以上のルート工作は、ほとんど林、斉藤、谷、上尾だけでやり、高村、岩坪、平井はサミッター候補として温存されていたのです。高度順応がおくれるし、ルート工作もやりたいのに下でボーッとしているのは、あまりよくないと思うのですが。

加藤 それは、雪崩の危険の大きいところだからなるだけ小人数しかあげない。形としては温存になったが。ほかの連中の強さがまだわからなかったから。君たち3人は7,000mの経験があるから、第1回が失敗したら交替であがってもらう筈だった。

中尾 C3が19日で登頂が24日ですね。かなり早いということです。一種のラッシュをやったのだろうと思うのだけれども。

加藤 一種じゃない。完全なラッシュです。

中尾 とにかく、雪崩の危険のあるルートをどうしても選ばなければならぬということになったら、そこにおける人数と日数を減らすことが、結局最大のタクティクスだと思う。ポーラ・メソッドで一つづつ足場をかためていくのも、こうしたところでは、半面、危険をひじょうに大きくする。そのかね合いのよいサンプルを提供したなと思っています。

林 C4にキャンプを張りまして、頂上までの距離がひじょうに長すぎる。あらかじめC2から見ておいて、実はキャンプを一つふやさねばならぬかと思ったのです。それを加藤さんに提案したのですが、なるべくキャンプの数をふやさない方式をとろうということになった。またC5から上のエスティメーションも、はじめは一日で帰ってこられる予定をたてて、ビバークになってしまった。

今西 一日で帰れるか、ビバークになるかということは、どのくらいにかけておったか。

林 半々くらいに思っておりました。

加藤 ぼくはビバーク必至だと思った。

今西 ビバーク必至で、テントを張らずにラッシュで通したというところは、作戦として今度の中でいちばんみごとなところだと思うのやけれどもね。

中尾 ぼくもまったく同意見です。

加藤 欲を立てると、多すぎてかなわぬ。

今西 天気周期性を察して、確実に天気をつかんで、しかもビバークで行ったということは、実にすばらしい作戦だね。

中尾 これはオーソドックスなやり方ではないという批評をする人がきつと出てくると思うが、これがこれからのやり方のいちばんよい例だと思う。

林 キャンプ・シックスをつくるにもテントがなかったのです、ほんとうは。(笑)

加藤 盗まれておったのだ。(笑)

高村 第五キャンプ付近がハントの最後のキャンプなのですが、彼の分析では、もう一つのテントを上立てることができれば成功するだろうといっている。ハントの経験による助言を無視して行ったという見方もあると思うのですが、ぼくたちは逆の意味で、軽い気持でやろうじゃないかということになったのです。

斉藤 そうです。食糧もビバークのためでなく、

ふだん山をアタックする場合に必ず持つスベアという気持で準備したと思います。

### ビバークを成 功と考えるか

高村 具体的な準備は最低限で、見ようによってはちょっと危なかったかとも、あとになって反省しています。

今西 斉藤が何時になったらビバークせよという命令は受けていなかったらと思うのですが、まだ日の高いうちにビバークを決意して、暖いうちに寝たということは、わがAACKならではのきぬ芸当のような気がして、たいへんうれしかった。

梅棹 ひじょうにみごとで。

加藤 ひじょうにいい決心ですよ、あの時間に決心したということは。

中尾 しかし、それにはやはりノジャックの経験がものをいっているでしょうな。

高村 そうですね、やはりわれわれの仲間がやっているという。それにぼくが少々バテ気味で、スロー・テンポになっていたことが、斉藤ドクターの判断の一つのファクターになったかとも思うのです。

林 加藤さんは100パーセントビバークだとおっしゃったかもしれませんが、その意向がわれわれにじゅうぶん伝わらなかったのかもしれないけれど、ちょっと危なかったという高村の批判はある程度あたると思う。ぼくらは斉藤、高村をじゅうぶん信用していたことは事実ですけども、こまかい点についてまでの考慮がなかったことも事実じゃないかと思うのです。

また、C3とC4をしっかりと固めていたから、第一登攀隊の成功の可能性はある程度甘くみていた。失敗したら、第二、第三が続くということはあったけれども、ぼくはある程度懸念もっていた。

今西 これは実際登りにいったものも余裕があったのだけれども、やはり隊全体の余裕綽々たる実力がしからしめているので、聞いていても危げがない。

梅棹 やはりタクティクスの成功でしょうな。

中尾 とにかくポーラ・メソッド屋では、これはやらぬでしょうね。

山口 そういうことではなくて、ぼくは登頂隊員の性格とかこれまでの山への行き方といいますが、そういうものが途中で早くビバークしたことと関係があると考えのです。たとえば、登頂隊員が平井、藤平、林さんというのだったら、おそらく夕方でも頂上へ行っているだろう

とぼくは思う。(笑)

林 それともう一つつけ加えなければいかぬのはこの山はひじょうに雪が深かった。しかし稜線へ出たら、いちおう雪もしまって歩きやすくなるだろうという期待は、隊の中に強くあったのです。なんぼおれや藤平や平井でも、あれだけ雪があったら、やっぱりビバークしておらませ。(笑)

今西 サルトロを問題にするかぎり、日の暮れまで登ってビバークするという方法と、余力を残して早い目にビバークし、あくる日登るとのこと、どちらが賢明かという判断だったら、ぼくはやはり斉藤のとった方法がよいと思えます。

山口 それはそうです。

中尾 もう少しビバークの物質的な仕度をしておった方が、よかったのじゃないかと思うのですが。

岩坪 食糧係の大將が行くから、どんな素晴らしいものを持っていかかと思っていたら、バシールが持っておったミルクをわかしまして、隠匿物資みたいなものばかり食うてはったそうで……(笑)

林 C4で頂上攻撃のタクティクスを話し合ったとき、装備その他いっさい最少限にすると決めたのです。今までの調子でC3、C4と来てこれをやらなかったら、C5から上のトレースに相当難渋するだろう。荷物を減らすことが最大の問題だったのです。

今西 欲を言うたら、あれもこれも持って行きたいということになるが、ミニマムで行かんならんから、その限りにおいて不自由することもあるだろう。その限界は決めににくい。

加藤 それはやはりチョコリザとかノジャックの経験で、これはいけるという気持がみなにあった。

### ヒマラヤ登山技 術の再検討を

今西 これからのことも考えて、さらに軽

量の装備をもっと発達させることが必要だね。

加藤 それより登山技術をもういっぺん考えなおす必要があるのじゃないかな。テンポをもっと早くすることと、アンザイレンのこと。ブロード・ピークだって、みんな勝手にちゃらちゃら行って帰ってくる。そういうのが普通になってイタリ隊でもほとんどアンザイレンしていない。そのためにドイツ隊のように死ぬこともあるだろうけれども。彼らの装備にしても、軽いというより、いらぬものは気前よく棄てて置

いて行く。われわれはまだ、たいへん重装備だ  
と思う。

林 ハント時代から比べたら、時代も進んでお  
りますし、われわれの装備は問題なく軽量化し  
ている。

中尾 ハント隊が今の装備だったら、登ってしま  
ったのじゃないだろうか。

加藤 それはもう、ケンケンで登っておるだろ  
うな。(笑) 彼らはヒマラヤによく慣れていたと  
いうこと。その前によく歩いておりますよ。そ  
れにアルプスを持っているのといないのとで、  
違いはかなりあると思う。

梅棹 それがいまだに効いておりますか。

林 いま加藤さんが登山技術のことをおっしゃ  
ったですけれども、われわれの今の技術が悪い  
ということでは決まてないと思うのです。もっ  
と進めば、もっと違った方式ができるという意  
味じゃないかと思えます。

加藤 みんな技術は持っております。ヒマラヤへ行く  
とそれがあまり発揮されないのだな。

今西 もっと速く歩くということやな。

加藤 それは歩けませんぜ。(笑)

今西 それでは注文が無理だということになるじ  
ゃないか。

平井 サルトロがコンプリート登山といわれるの  
に、距離の測定の問題があると思います。チョコ  
ゴリザでは、ベース・キャンプから頂上までの  
ルートが見通せない。テントの位置がわからな  
かったのです。サルトロの場合奥行が全然ない  
ので、全部わかるわけです。それからアイス・  
フォールもなかったということ。

岩坪 ぼくらが第2キャンプから、第4キャンプ  
以上の偵察を見ていると、いつも5人がぞろ  
ぞろいっしょに行く。林さんか斎藤さんが孤軍  
奮闘して、みなを待たして頑張っている。あれ  
を2人と3人のパーティに分けて、偵察を交替  
でやったら、スピードアップになったのじゃな  
いですか。

林 実際の状況がわからなかったのでしょうか  
どその時点については交替する余裕がないのと  
スティーブなどところなんですわ。途中のラッセル  
とか確保とか、相当エネルギーを消耗してい  
るのだから、待っている時間が長かったという  
が、あれで過不足ない人数だったと思ってお  
るのですかね。

岩坪 それから、バニールのお守りというのがあ  
った。あれで最低2人はとられていたと思いま  
す。

梅棹 あと時間の余裕があまりないのですが、ほ

かに重要な問題がありますか。

## 隊員の選考 方法に疑問

北村 隊員の選考方法に  
ついての意見がまだ出  
ておりませんね。簡単  
に申しますと、当時の木曜会において、一応A  
ACKの全会員から公募するということになっ  
ておりました。ところが時間の関係その他もあ  
って、委員会でその必要を認めずということに  
なった。まあある程度の京都中央集権はやむを  
えぬにしても、また京都で最後に決まるのは、  
スムーズに行くことですけれども、やはりこれ  
は運営上まずいんじゃないか。事実、あとから  
かなり苦情が出て、京都にいなければ行けない  
のかという意見も出てきました。

林 その回答は、アウトラインだけは総会で申  
しあげたと思うのです。今後はそういうことの  
ないように、木曜会の連中は外に呼びかけ、外  
にいる人たちはまた京都の連中に呼びかけ、連  
絡と接触をよくするようにしてもらいたい、ぼ  
くはそう思っているのです。

公募の問題は会長からでも答弁してもらわ  
なければならぬ問題ですけれども、今までの経験  
から、公募してもそれを無視するような結果に  
なってしまう。そういう公募は、単に形式だけ  
のことに終わってしまい、かえって応募された方  
に気の毒でないか、そういう会長の話があった  
のです。今回の事情は、今まで3年も4年もサ  
ルトロを待っておって、頑張っていた連中が木  
曜会に相当おるわけです。それだけでじゅうぶ  
ん席を埋めてしまったというような感じで、今  
さら公募しても埋める空白はなかったという事  
情です。

今西 しかし原則として公募しなかったというの  
は手落ちですね。

梅棹 これはAACKとして大問題ですよ。

中尾 木曜会というものがAACKの何であるか  
ということ。

梅棹 それは大きな問題です。ぼくもそれはいつ  
たい何であるか知らぬ。

加藤 一味徒党や。(笑)

梅棹 みんな木曜会に連絡をとるべきであるとい  
うことになるわけだな。

林 とるべきじゃなくて、木曜会が今までサボ  
っておって、そういう役を果せなかったことを  
ぼくはいいたい。

今西 そうなってくると、木曜会というものがま  
すますわからなくなるけれども、AACKとし  
て公募すべきであるというのが、ぼくの意見で  
す。

林 会長あるいは今回の隊長が相談されて、そ  
ういうふうに決まった。

梅棹 名乗りをあげさせなければいかぬ。それは  
隊員を決めるとき最大の原則だと思うな。

今西 だから、会長や隊長がそういう方法をと  
るにしても、それではいけないという忠言をす  
る人間が必要だな。

加藤 AACKは、こわい、えらいおっさんがい  
て、若い連中はみなおとなしいですよ。

中尾 AACKには古だぬきがたくさんおるから  
若手がそんなことに関与しても無駄だからやら  
ないのだという、そんな空気があるのですか。  
(笑)

林 そんなことは聞きはじめですね。

北村 私がおたずねしたのは、理事の方がみんな  
公募の必要を認めないという意見だと思ってい  
たからです。

多田 隊員の選考というのは、なかなか始まらな  
んだのだ。とにかく12月、1月ごろになって、  
いよいよ行かなくちゃならぬような時期になっ  
てから、そういう問題が出たと思うね。だから  
そのときには、公募してやるのは、たしか遅か  
ったという気持をもったと思うのです。

林 しかし、ここに桑原先生や四手井先生がお  
られたら、「どうもすみませんでした」とあや  
まられるところだと思う。もうその辺で。……

今西 しかし、今後こんなことをしていたら、い  
けませんぞ。

加藤 その前に、もっとノスイことがたくさんあ  
るのや、この会は。(笑)

今西 それで頭にきていたのか。それではしよ  
うがないな。

多田 そのじぶん、まだ隊長問題がうるさか  
ただからね。

梅棹 まあいろいろ事情があるにせよ、しかし公  
募が第一原則であるということは、確認せん  
らん。

第二登頂  
を考えるか

加藤 それはそうだ。

梅棹 タクティックスの  
ことでまだありますか

高野 第一次の登頂が成功したとき、二次、三次  
を出す考えがあったかどうか、聞きたいので  
すが。

加藤 私はなかったです。こんな山に大ぜいかけ  
登って、そんな危険をおかす必要はない。また  
隊員の利害関係やメンツの問題から第二登頂を  
する例が多いが、われわれの隊には必要ないと  
思った。

林 ぼくはそれには反対で、全員登頂というこ

とを言ったのです。隊の態勢としても実にコン  
プリートで、余力はあったのです。天気も続き  
ましたし。

高野 余力はあったけれども、登らなかったとい  
うのは……。

今西 それはフォーミュラとして決めるべき問題  
ではないね。ケース・バイ・ケースで、その時  
の隊長や隊員の考えもあるだろうし、AACK  
は第一登だけで引きあげねばならぬということ  
には絶対ならぬ。

加藤 それはならぬ。

林 もうそろそろ全員登頂という問題を考えて  
いい時期じゃないかと思えます。

加藤 山によりますな。

今西 全員登頂か、第一登頂だけか、と決める必  
要はないと思う。その時その時によることで、  
わしだったら、第二登頂でも登りたいし、登れ  
たら登るかもしれない。(笑)

加藤 こわいおっさんやな。(笑)

林 余裕があったら、登ったらいと思う。ヒ  
マラヤもだんだん変わってきておって、もう少し  
個人的なプレイを楽しむ時期にだんだんなって  
きておると思う。マカルウも全員登頂してい  
てきたらという希望も持っておった。しかし  
山そのものもかなりシヴィアだし、第一登頂で  
みな気分をよくして、これで帰れぬこともない  
だろうという、ぼくおよび加藤さんの判断だ  
ったというわけです。

谷 ぼくはそれに天秤をかけておったのです。  
第二登頂もしたいけれども、それよりもほかに  
テラム・カンリなどの可能性があると思ってい  
た。食糧も残しておかばならぬと思い、第二  
登の意欲を押さえておってきたら、ジャット・  
アウトをくった。

加藤 どこが悪いといっても、雪崩のこわいこ  
ろですから、長いあいだそこに人をおいておく  
のは、どうしてもいやだと思った。

中尾 いくつもいくつも行ったら、そのうち何か  
にひっかかってしまう危険がある。

今西 だから、ぼくが第二登頂でもやるかもしれ  
ないと言ったのは、山によりけりです。

登山史上の  
位置づけ

梅棹 それでは次の話題  
に移ります。今までの  
エクベディションは、  
毎度毎度この次はどうする、この次はこの次は  
ということやってきたと思いますけれど、こ  
れからも又同じようにゆくのかということが問  
題になるわけで、谷君、ひとつ問題の提起を願  
います。

谷 戦後15年もちました、AACK又はその会員が戦前からずっと続けてきた遠征の中で、戦後の幾つかの遠征は一つのグループとしてまとめることができると思います。つまり簡単にいえば、ジャイアンツの登攀ということにまとめられます。ではそういう動きはAACK全体の歴史の中でどういう風に位置づけられるか。更に登山の文化史といった方面から考えてそれは登山史の上でどういう意味があったか。これを諸外国の動きと比較しながら論じて、今後ジャイアンツがだんだん登られて、少なくとも7500m以上の山がなくなるであろう近い将来、これからどういうエクスペディション、登山が世界で行なわれてくるか、そういう見通しをまず出してもらいたい。その次に、そういう流れの中でAACKはどのような行き方をしたらよいか、この問題を採り上げていただきたいと思ひます。こまかくいうと、どういふ地域にこれから行ったらよいか、行こうとするのか。あるいは、どういふパーティが組み得るか。これまではいつも大パーティで、メンバーも団子の串さしというようなこともいわれたけれど、いろいろな意味での経験の受け渡しということは、この大規模性と計画において可能であった今後もし小パーティになった場合には、その経験の受け渡しが非常に難かしくなるかも知れない。そういうパーティのあり方の違いによってAACK内にいろいろな問題が起こってくる。またパーティの組み方によって今後どういふふう資金を集めるかといった問題、そういう点をも含めて議論をしていったらと思ひます。

梅棹 深刻な問題をだいぶん含んでいるようですが、何からやりましょうか。今の問題を全部議論するわけにはゆかないので、ここでは問題を次の三つに限定しましょう。つまりAACKは今後どこへ行くのか。どういふパーティを組み得るか。資金は如何に獲得するか。

まず登山もAACKが今までやって来たような初登攀主義でゆく限り、やはり探検と非常に似た運命にあつて、いわば自らの首をしめるという結果が起きる。今それが起きつつある。行くところがだんだんなくなってきたということ。そこでAACKが今までやって来た一連の行為は、サルトルで一応ケリになるのかどうか。このへんからどうですやろ。

カラコラム 今西 問題を限定して先ずカラコラムから議論していったらどうか。

AACK とカラコラムの因縁は、1937年のK2計

画の頃から結びついているわけですね。それから1955年にはじめてカラコラム。これはAACKではないけれども、京大として入った。しかし結局55年ではカラコラム全域がとても歩ききれなくて、東の方と西の方が残ったけれど、それはその後梅棹が言った初登攀主義と探検があるところでオーバーラップして、西はヒンズークンからノジャックまで足がのびたし、東の方はシャチェンの方面が残っておったのが、今回で一応地図に赤線が入った。我々はビゴからカラコラム・パスまでをカラコラムと考えますけれども、シムシャール方面は現在の政治情勢では入れないのだからしかたがないとすると、そういう意味ではわれわれのカラコラム荒ごなしはできたわけです。あと問題をしぼってカラコラムに限って考えた場合、やるべきどういふ仕事があるかというふうにせばめていった方が、わかりやすいのと違うかな。

梅棹 そうですね。何か次の仕事のイメージがあると思ひます。

今西 サルトロには四年間もサルトル、サルトルといった執念があったわけだけれども、それはこれで解消したから、今何も執念がないといえればそれも正直な話。こんど行ってきて又執念をつけて来たというのなら、それも又一つここで発表してもらおうということだな。

梅棹 この前のノジャックのあとでは、非常に小さいヴィジョンではあるけれど、グル・マンダータというのが出てきたね。今度は何もヴィジョンは出せんか。

林 あっちからみておつたら、アスバラサスとかリモのあたりとか、ギャチュンカンとか、よだれのたれそうな山がいっぱいありますけれども、今西先生も言われたように恐らく入れぬだろうと思ひますし、将来そういうものが解決されたらあの辺をAACKで一べんやってもいいじゃないかと思ひますね。

今西 サセルはカラコラムの続きですから当然一応問題になる山ですけれども、現在のところまず実現せぬだろうね。あそこからチャンタンの方へ入って行くのはいいけれど。(笑)

梅棹 それはいいやろな。

中尾 一番問題になるのは、この次にやるとしたら、7,700mよりも高い山へ行くのか、低くてもいいのか、ということじゃないですか。

梅棹 そういうこととは違うな。何かやはり行動目標としてのヴィジョンを持てるかということだと思ひます。

加藤 カラコラムには、喰らいついてカッカする

ような山はありませんわ。

梅棹 ありまへんか。それはあっさりしている。今西 加藤君はそう思つても、若い人はどう思っているかわからぬ。

林 K2はぼくらしいちおう……。

加藤 あんな高いところかなわん。(笑)

岩坪 こんどAACKには7,000m以上の経験者がうんとふえたわけです。それがこれからすたつてゆくのはもったいないし、そういう経験者を主体に、ちょろちょろ小出しにしたら、パーティはわりあい簡単にできるように思ひます。

林 簡単にできるという話ではなくて、そういうことを実際にやるパッションがあるかどうかという問題だ。

梅棹 岩坪君の場合は、AACK全体の問題が一個人に集約的に現われたようなところがあると思ひだけれども、四回むこうへ行ってどう感じておるか。

岩坪 今ちょっとあきておりますけれども、また十年ほどたつたら。(笑)

梅棹 カラコラムか。(笑)

岩坪 ……………。

高村 ぼくらはチョゴリザのときから脇坂氏からネパールは、ネパールはという話をよく聞きますし、又他からもカラコラムしか知らぬのはかわいそうだという話もよく聞きます。そこで必ずしもネパールと限らなくても、ちょっと毛色の変った地域を歩いてみたいという気は大きにあります。しかしパキスタンに行くとき気がイライラする反面、心の安らぎを覚えるようなところもありますので、その意味では又一年程したらカラコラムあたりへ誰かゴソゴソ行くのじゃないか。ぼくでもまだ行きたいと思ひますけれど。

梅棹 オラガ山という気安さがあるな。

ヤルカンドの彼方は? 加藤 どこへ行つてもあの山は知っているというわけ

隣の横丁を歩いているようなものだ。ぼくは二回も行かしてもらったから、いい気になってそういうことを言うけれども、まだ6,000m 5,000mの山ならたくさんあるし、その経験をふまえてこれをゲレンデとして、小さいパーティがどンドン出てゆくことはよいと思ひけれども、おじいちゃんがカッカするような山はもうありません。わしはそう思つておるのだ。しかし、ひとつカラコラムが一番ねらいたいのは北の方だよ。ヤルカンド・リヴァーの方へは行きたいわ。(笑) そうするとパキスタンという

ような連中を相手にしてもらちがあかぬから、西の方のこわいおっさんの方から入る。そういうふうにやたらどうかな。ロシアとか中国とかへもっと力を入れてもらいたいと思ひな。共産党になるのは嫌いだが。

梅棹 社長だからな。(笑)

林 英国なんかスターリン峰へ行つておりますけれど、ああいう格好で将来日本もやれるのではないかと思ひますので。

加藤 やれるだろう。大阪外国語大学だつて、蒙古へ出す。これはつぶれたけれど、よそのところにあつたりとやられたら、腹が立ちますわ。

梅棹 要するにカラコラムは谷川岳のようになってしまつて、みんなよくわかつてしまつた。小さい山は別としてもう今までのようにカッカとするほどのものは、少くとも現在はもうない。こういうわけですか?

一同 ウン。ウン。

梅棹 では、この問題はもうこれでいいやろ。

加藤 という気がするな。

### 巨峯第二 登主義

平井 初登攀主義では早晩行き詰まると思ひます。いやもう今既に行き詰まっているのですが。そこで、これはやはり日本人の誰かがやらなければならぬと思ひますが、エヴェレストとしては第何登かになります。日本人としては初めてというのはどうですか。これからそういう行き方もあると思ひます。

梅棹 ぼくはしかし現実の問題として、それは非常に難かしかろうと思ひます。日本の場合やはり初登攀という行き方が社会的に一つの型になっている。ということは、初登攀主義であれば金を集めることができる。エヴェレストというものであれば、又扱ひようがあるかも知れないけれども、その他のところなら何かよほどの特別の理由を発見しないと、社会的な通念を打ち破ることが難かしく、無理じゃないんじゃないかな。もし一歩ずつ、そういうやり方でも、その成功率は大抵エヴェレストないしはせいぜいK2くらいでおしまいで、そのあとは遠征隊の成立そのものがむづかしいことになりはせぬかと思ひます。

さらにエヴェレストにしても、第三登ならいざしらず、たとえ日本人としては初めてでも、第四登・第五登となつたら、これはえらいことですよ。自分の金で行くならよいか。

加藤 エヴェレストに入つたら、キャンプの場所が決まつていて、便所はこちら、炊事場はこちらなどと富士登山をするようなものなだけ。ちょ

っと高いけれど。

林 今エヴェレストの話が出ましたけれど、まだネパールではギャチェンカン、カンパチェンが残っています。こうした目標も一部AACKに残しておいて、機会があればそういうものもやってもぼくは不思議じゃないと思う。

**AACKは二流たり得ない** 今西 それを言い出したら、南米に何か小さい未登峰が

残っていて、AACKが南米に行っても構わないということになりますけれど、なるだけなら、そんなまねはしたくないな。

梅棹 何かAACKの名門意識というようなものが非常にはっきりとある。それを崩したくないという、これも又ぼくはもっともなことだと思う。つまりよそとは違うので、なにもAACKがそういう小さい山に総力をあげてやらねばならぬことはあるまい、それは又よそのどこかの大学がやったらよい、こっちは行き方が違うという。やはり伝統の問題があってそれを無視することはできない。方向転換するといっても、AACKが二流山岳会になることはできないのでね。ここがやはりつらいところだな。

林 つらいところでしょうけれども、そういうことを言い出すと、チョゴリザでもサルトロでも似かよった山へ二回も行ったわけですから。

今西 そうだけれども、別に遠くにある中古車は気にしなくてもよいけれど、隣りに中古車の割合ましなものがあれば、ちょっと気になるというわけで、この点名門といってもまだ国内的な名門ということですね。

林 しつこいようだけれど、ぼくがさっき言ったような意味で、エヴェレストとかK2とかナンガとか、人は行っているけれども、日本人として新しい山というのは、まだある程度あると思いますね。そういうところに目をつけてもいい。

中尾 だけど、さすがはAACKだ、目のつけどころが違うといわれるようなものを作って欲しいわ。

加藤 チョゴリザにしるサルトロにしる、完全無欠の処女と違いますよ。だいぶんきずがついている。(笑)

中尾 その点ノジャックはよかったね。ピーク29とか、いくつかあり得るよ。

今西 ちょっと落として選んでいったら、ぜんぜんむしがついてない小娘がいっぱいいるよ。(笑)

梅棹 それをさがすか。

加藤 当分はそういう小娘主義だな。

梅棹 この辺のところは、ちょっと印刷にできないな。(笑)

中尾 しかし初登攀主義をつらぬくというのは、エヴェレストなんか見向きもしないという訳ですか。

今西 それは、どこかの山岳会がエヴェレストをやると言い出したら、それではおやりなさい、俺達はやらない、とこう出なければしょうがないじゃないか。

梅棹 それは非常にはっきりした一つの行き方だな。

中尾 だんだん大物がなくなって、低くなっても仕方がない、処女峯をねらうかぎり。

今西 それでいいのだと思うけどな。

梅棹 それはしようがない。どうでしょう。この問題は、これだという坦々たる道が前に開けたというわけではないけれど、このくらいにしておいては。

加藤 この問題は、まだもう少し考えてからやっていた方がいいので、結論はなかなか出ませんわ。

**アラスカ・アンデス** 中尾 ぼくはいつべん聞こうと思っていたのだけれど、アンデスとか

アラスカという話はないですか。

谷 アンデスはなかった。アラスカというのありました。

今西 アラスカはずっと前だけれど、伊藤洋平が言っておったことがある。十年も前のことだから、ヒマラヤにウジャウジャ山が残っていると、阿呆なことを言うなといっておいたけれども、今は情勢が少し変わって来ている。

中尾 アンデスも山はなかなか高いし、きれいだし……

今西 しかしアラスカとかアンデスといったら、早稲田とか一橋とか……

梅棹 関西学院とか……。しかしこれも個人では大いに行くべしだが、前にも触れたが、AACKが総力を挙げるというものではないな。

谷 そういう点で南極はどうですか。

**南極** 北村 南極の話が出ましたが、南極が他の地域と多少違う点は、遠征の目標が何かということです。地域探検の型の歴史の経過をみますと、だいたい四つの過程に分解できる。第一期は地理的探検。これは何かなんでも行けばよろしい。あるかないかがはっきりすればよろしい。第二期は第一期の探検を少し高度にして、又人文科学的な調査をも加え、いわゆる学術探検として成立する。第三期はこ

の学術探検の上に近代スポーツ・アルピニズムが加味され、両者の混然たる融合によって隊が成立する。AACKは最初のAがこれを示すように、まさにこの期の代表的なものであるわけです。第四期に入ると、これはもう学術探検そのものが成立しなくなって、つまりスイスのようにスポーツ・アルピニズムだけが生き残って横行する。もちろんこの四期はたがいに独立なものではなく、随時、程度の差こそあれたがいに結びつくものです。

ところでこれがもし南極にあてはまるものとする、南極は今正に第一期又は第二期にあるわけです。それがIGY(国際地球観測年)で更に地理的探検にしても学術探検にしてもその程度が引き上げられ、もうシプトンやワークマンの若い時代のようにはゆかなくなって来ました。地理的にみても、グラハムランド(南米の南)は山が多いけれどネパールのようにアチコチに人糞がころがっているというし、ロス海沿岸はいうに及ばず、ウイルス・ランド(日本・中国の南)はフランス・アメリカ・ソ連がウジャウジャ行きよったし、インドの南はオーストラリアが永久基地を持っているし、結局大西洋の南、昭和基地付近、それにちょっと東のエンダービーの奥地、これがまあ食指の動きそうなところ。しかしこれらの地域にしても、南極はすでに犬ゾリの時代は過ぎて今や重量戦車機械化部隊の時代ですから、スケールはうんと大きくなって来る。今いった昭和基地の奥、エンダービーの奥はヒマラヤでいえばエヴェレストでは勿論ないにしてもマナスル級です。これをやれば、世界の南極の地図に赤線が一本入ります。その奥地に、山岳地帯でも発見されれば更に大きな地形学的な業績があげられたことになります。

梅棹 それをやるうじゃないか。

北村 いやそれは、ただ行って来た、発見した、だけでは許されぬ時代にきているのです。話をそこまでもってゆかなくても、もし山も何もなければどうなりますか。むろん、「昭和基地から極までの間は山も何もない高原だ」でも一つの業績にはなりますが、京都大学、いやAACKがこれではあまりにもさみしいと思います。

やはり大陸の種々の科学調査、つまり探検という肉づけがあってこそ、はじめて遠征が成立つのだと思います。

つまりこの事を、先の「時代」的な方面からいいますと、南極にアルピニズムが浸透するにはもう少しの時間が必要だということになりま

す。この第二期の学術探検時代にある南極に、犬樞・歩兵・重戦車、更に航空機の援護をつけて駒を進めることは、ヒマラヤにくらべてスケールの大ききで問題になりません。それを京都大学が先に開拓してゆくことは、言うだけなら別にして、これは大問題です。

今西 まず山は成立たぬというわけだな。

梅棹 ぼくは南極のことはよく知らないけれどもかえってそれが成立つようになってきたのじゃないかという印象もあるのだな。ここで思いきって学術はやらぬのだ。わしらは南極の山へ登りにゆくのだということでやったら、可能性が出てくると思うのだ。

今西 南極を学術が占領している間、わしらは追い出されているというのは、非常に腹が立つね(笑)

梅棹 そうなるとちょっと面白い。ぼくら今までAACK内で学術派といわれていたかどうか知らんが、こうなると学術でなくて山でいこう。南極は処女峯がずらりと並んでおりますわ。なぜぼくがそう思うかという、これは逆説的な見方になるけれど、今の地球観測年がなかったらこの「山でいこう」は成り立たない。地球観測年で学術はちょっと満ちたところがある。数年間やって基礎ができた。

そうすると新しいページがめくれるかも知れない。

北村 なるほど。これはうまいことをいわれましたね。つまり先程の言葉でいうと、南極も今や第二期から、第三期の学術とアルピニズムの混合時代、更には第四期の純然たるスポーツ・アルピニズムの時代へ脱皮してもいいんじゃないか。いやAACKが南極にこのアルピニズムの杭を一本ガーンと打ち込んでよいんじゃないか。また犬樞の時代に戻ったってよいんじゃないか。俺達は観測なんかしない。こういうわけですか。

今西 山はまだ足で登っているのだから。(笑)

梅棹 山はないか。

北村 山はあります。

梅棹 山へ行こうというわけだ。

中尾 学術会議が、山登り隊を出せまいけれどもAACKが船にちょっと乗せてくれと申し込んであとはよろしくやるという手もあるわけだ。

**南極の最高峰?** 今西 南極には6,000mくらい

の山があるというのは本当か。

北村 6,100m というのがあります。但し地図上



ではこの標高には？がつけてあって、はたして6,000mをこえるかどうか公式の保証はありません。

今西 処女峰か。  
北村 その点はよく知りません。しかし5,000mをこえるのは、少なくとも四峰以上あって、これは登攀されたということは聞いていません。しかしその辺の上空は、マクマードから極点基地へゆく飛行機がブンブン飛んでいますよ。

今西 それは仕方がない。  
北村 それにそこへゆく途中には、人糞がゴロゴロしているほど多いということですよ。

今西 それで登っていないのか。  
北村 登る興味がないのです。学者だから。そこがつけ目だけだ。

梅棹 そうだ。そこがつけ目で、いま南極に行っている者は皆軍人か学者だから山には興味がない。それでこれはかなり開拓的な仕事ができると思う。はじめて山に興味のある者が乗りこんできたということで、これはちょっといいぞ。

今西 南極で5,000mというたら、ちょっと面白いな。

加藤 南極の5,000mというのは、空気が濃いだらう。

中尾 空気が濃いということが問題だ。(この意味不明、K氏は経済、N氏は農学部卒であることに関係があるかも知れない。編集者註)

北村 先程の6,100m峰(無名)はマリーバードランドの真中にあります。その付近(といっても500~600km離れたところ)にアメリカのバード基地があるので、これは可能性があるかも知れません。

梅棹 そうだ。外国、今の場合ならアメリカの登山家と語らうて、外国の基地へ登山家として入ってゆく。学術に関係ないということでやるわけだ。

北村 そうですね。これは非常に可能性がある。アメリカは南極へ行く人がなくて困っているという話も聞いていますが(但しこれは科学者の話)登山家として行けるかどうかには疑問があるので、とにかく三人程科学者のふりをしてめぐりこむ。科学者といっても一年中科学の鬼になっている必要はないので、夏にはちょっと夏休みをもらって、その6,100mの無名峰に登りにゆく。あわよくば、あちらさんの犬糧とか重戦車を拝借してゆけば、これは非常に安上りでゆけそうです。ポケットマネーでゆけるかも知れない。(笑)しかしこれはAACKの誰かがやらねばならぬにしても、AACKの仕事では

ないですね。

梅棹 ぼくはそうは必ずしも思わんがわ。  
北村 しかしむこうでは、高度を問題とするよりは、もちろん高度もあった方がよいが、むしろ水平的な未踏地域のほうが魅力があります。高さが5,000mというより、500km奥というほうが少なくともぼくには興味がありますけれど、そうなると又先程の航空機、重戦車部隊ということになる。

梅棹 重戦車一台チャーターしてもいいけれどね。  
今西 しかしその山をちょっと研究してみてくださいよ。山があつたらわれわれは登りたくなるからな。北村が行った所にそんな山がなかったといっても、山があれば、やはり登りたくなるよ。(笑)

梅棹 これはアジるようだけれど、ひとつ南極山岳研究会というようなものをつくって、南極の山の研究会くらいやったらどうか。これはカラコラムがしまいにいったら、ひとつ考えてよいのと違うかな。

加藤 南極では、氷とベンギンしかない。東京タワーにのぼるようなものじゃないかな。やはり人間がいてくれないと、おもしろくないな。南極はあまり好かぬ。(笑)

### 共産圏の山々

梅棹 それでは話題を変えて、最後に残った共産圏の山々について語ってもらいましょうか。

山口 現在の国際情勢から、中共やソ連を考えるのは現実的ではないかも知れませんが、やはり第一登主義、大きい山をねらうという点からすると、今のところだったらゴサインタンやナムチャ・パールワ、それに近いだけ直打は落ちると思いますがグルラ・マンダータ。先程加藤さんが言われたヤルカンド・ダリアの探検を別にすれば、そうしたところしかないと思います。そういうところをねらうのだったら、現在国際情勢から非常に無理であっても、やはり今からねらってとりかかっていると、どこかよそに先を越されることになると思うのです。

### ネファ、ベコマイはどうか

中尾 中共の山もあるけれど、まだヒマラヤのネファ(NEFA)地域のような……  
今西 しかしそうなると、やはりナムチャ・パールワになってくる。  
中尾 ナムチャ・パールワのもうちょっと下に、インド領との境に、7,500mのベコマイという山がある。

今西 そんなものがあるのか。えらいことになってきよる。

梅棹 それはちょっとしたものだ……

中尾 それを山の人がどうして目をつけないのかと思う。ところがネファの壁をどうして打ち破るかということになるのだけれど、ネファの壁が打ち破れなくて、どうして中共へゆけるか。

梅棹 そういった地域は未来の夢としてみなあると思う。何かチャンスがあればつかむだけの姿勢はできている。しかしその姿勢だけではAACKのような団体はもたへんのですわ。サルトロのようなものがある、それをやりながら、どこか一方に遠い夢があつてそれをつかむ。これはできる。しかし、可能性がひょっとしたらできるかもしれんという程度のものにすべてをかけるわけにはゆかない。現実性があつて、それに努力することによって一歩でもそこへ近づいていくということならよいけれども、そういう夢だけではちょっと……

今西 それを何かしないと、じっとしては道は開けない。たとえば河口慧海は変装してチベットへ入っていった。三人ぐらいが変装してナムチャ・パールワの下あたりまで偵察に入る。これは探検でなくて冒険かも知れないけれどもやってみることはないか。(笑)

林 つかまってしまう。

今西 化けこみは、つかまえられるらしまいとゆうことではない。又逃げたらしいのだから……(笑)

加藤 殺さないね。北京までつれて帰ってもらったら、えらいトクやぜ。(笑)

梅棹 いっしょうやるか。

中尾 しかし潜入は、こういう団体の企画では、ちょっとぐあいが悪いですな。

今西 昔の軍事探偵でも、つかまえられるても、陸軍から派遣されたということは、決して言わないぞ。(笑)

加藤 そそのかさはる。おもしろいじゃないか。

梅棹 そういうことをやってやるという者が出て来たら、運命が開けると思う。しかしこれは、どちらかという非常手段的なものだが、もっと他に方法はないものだろうか。

加藤 コーカサスだって行けると違うか。あそこの観光ルートにのってロシア人と仲よくなっていったら、共産圏は案外早く開けるかも知れないぞ。

岩坪 コーカサスでしたら、ぼくらノジャックで会ったポーランドの連中は、全部スイス、フランスとかイギリスなどから装備を買っている。

それをわれわれが持って行ってやると言ったら簡単にゆくかも知れない。

桑原 それはいい手だ。せっかくノジャックでポーランドと関係がついたのだから。ポーランドを使うというのは、これは盟邦だから割合よいアイデアだ。

梅棹 ポーランドの連中と、そういう目的をもたない文通をしょっちゅう続けてやっているか、切れているのか。

今西 まあ切れているだらう。

岩坪 こっちはよく出していますけど……

梅棹 むこうから来ないのか……

中尾 ポーランドとジョイントしてソ連に入るといったら、学内でもよろこぶ人は沢山あると思う。

梅棹 ソ連は可能性がある。中国は非常にむづかしいけれど。

桑原 中国は今高崎さんが行って大へん曙光が出て来ている。あれが進展すれば、可能性がないでもない。文化交流を大いにやりたいということ、はっきり言うておる。

梅棹 しかし山というものは、日本では何というか、メジャー・スポーツでしょう。しかしむこうでは、マイナーもマイナーほとんどるに足らぬようなものです。

林 中共・ソ連を真剣に考えて、ロシア語なんかを積極的に勉強するとか、そういうことはどうですか。

桑原 ロシア語とか中国語。とくにロシア語はここでやっておいて絶対損はないな。

梅棹 しかし現実的に考えて、たとえばロシア人といっしょにやるというときに、今度の隊員の英語の実力くらいまでロシア語が到達するとはぼくは信じないな。

桑原 そりゃそうだ。今かりにソ連とやるなら英語に限ります。むこうもマタイから、ちょうどマタマタ同士で。

梅棹 さて今までだいたいいろいろな地域が出てきました。カラコラム、アンデス、アラスカ、南極、そして共産圏の山々。あとニューギニアを残して世界の秘境が大体出尽くしたわけです。

地域に関する議論はこれぐらいにして、次はパーティ論というか、どういう方法の遠征が考えられかという問題に移りましょう。

高村 今まで新しい地域についての議論がずいぶんありましたが、そういうふう新しい地域を求めていくやり方と、もう一つは山との取組み方を変えていくという問題もあると思います。

たとえば合宿組織です。現にピアフォ氷河でやっているように、どこかの拠点にベースを構まえ、そこには氷河学者もいるし物理学者も越冬する。もろもろの混成部隊から成り、入れ替り立ち替り出はいりし、いろいろな毛色の変わったものを送り込む。そして山登りのシーズンには山登りばかりやる。植物のコレクションをやる時には植物学者がせせとコレクションしているし、春夏秋冬を通じて山をやるものもおれば気象学者もおるといような形で、生きのびるという手もあると思うのですが。

梅棹 タンガニーカの京大類人猿研究所みたいにならなくてもだれかがいる。

加藤 それは面白く思うね。カラコラムも折角開拓したフィールドだから、何らかの意味でこれは糸を切りたくない。これは実にいいゲレンデですよ。われらは二回も行かせてもらって今グッパが出ていられるけれど、未だ行ってない人もあるのだから、これから若い連中だけで、小さいパーティをどんどん出す。今までAAACKの遠征というと、ちょっと小むつかしくなったけれど、これからはもっとスポーツ的なものをどんどん出してゆく。場合によたら高村の言うように向こうにベースを作っておいて、入れ替り立ち替りあそこもここも、全部登ってしまう。

梅棹 それはひじょうによいですね。それくらいの力はありますよ。

林 AAACKのちょこちょこ行くのはなかなか隊が成立しない。こんどのインドラサンはまともになりましたけれども。そういう小さいものも気に入らぬと言わないで、ロートル連中の頭をもっと変えて欲しい。カラコラムの山はネパールにくらべると、アプローチがみな短い。そういう点では実によいフィールドです。それにジャングルがあるとか、深い峡谷があるとかいうことも、ひじょうに少ないですから。

加藤 何といたって健康地ですよ。

中尾 健康地です。

加藤 ほんとうに若い連中だけで。上にヒヒオヤジをつけないで。

梅棹 それでは時間もなくなりましたので、これで座談会を終ることにしたいと思います。長時間にわたり、熱心な討論を続けていただきました。どうもありがとうございました。

× × × ×

1962年10月、帰国したサルトロ・カンリ遠征隊員を迎え、AAACK会員、京大山岳部員の有志が集って、サルトロ・カンリ遠征をめぐる座談会をした。座談会の内容は、1.サルトロ・カンリ遠征を終って

2.合同遠征の是非、3.カラコラムの登山——比較地域論、4.AAACKの将来、の4部に分かれ、速記録は200字詰め原稿用紙520枚の大部のものとなった。この記録は、はじめ公式報告書に収録する目的で作製されたものであるが、報告書が別の形で編集、刊行されたので、会長の許可を得て、ここにその一部を発表した。第一部の「遠征の回顧」、第四部の「将来の展望」の速記録に若干手を加え、内容を圧縮した。編集責任者は、北村泰一、酒井敏明である。

## AAACKの30年 — その2 —

平井 一 正

### AAACK結成まで

AAACKの歴史を語るには、まず、その母体となった京大旅行部について語らなければならない。しかし残念ながら、大正時代の京大旅行部が、どのような性格であり、どのような活動をしていたかについては、くわしく調べる機会を持たなかった。ただ、当時の旅行部には四高系の人達を中心となり、遠足班というものもあって、性格はあいまいなものであったといわれている。

× × × ×

今西達の三高卒業までについては、時報第1号に北村が書いた。私は彼等が京大へ入学してからを書く。

今西等が京大に入ったときの旅行部も、部としてのはっきりとした性格はなく、彼らの登山思想を満足させてくれるような雰囲気ではなかった。そこで、彼らは新しく旅行部山岳班を結成した。これがやがてAAACKの母胎となるのである。

大正10年、榎有恒がアイガー東山稜を初登攀し、帰国して近代アルピニズムを伝えてから4年、ようやく日本の登山界が近代アルピニズムに脱皮しようとしていた時である。今西等は登山技術をヤングの「マウンテン・クラフト」で独学し、剣沢合宿でそれを実行に移した。今日源次郎尾根、チンネ、ハツ峰等々にわれわれはその記録をみる。彼らは山登りばかりに熱中したのではない。京大という大きい組織を利用して、三高山岳部ではできなかったことを、次々にやっていった。すなわち、山岳図書の蒐集、笹ヶ峯ヒュッテの建設、関西学生山岳連盟の結成等々である。

ヒマラヤの勉強、カナディアン・ロッキーの勉強をするには、どうしても、外国の山岳図書が必要であった。ちょうど西堀の兄が神戸で亜米三という貿易商

を営んでおり、ある外国人が彼の山岳蔵書を売りに出していることを知らせてくれた。この外国人の名はドント（英国人）で、六甲のドント岩にその名残りをとどめているように、よく六甲登山をした人であった。約150冊から200冊近くあったその蔵書にはたいにのめばしい本がそろっていた。費用は当時京大図書館館長の新村出さんの御好意で図書館の予算から出してもらった。これをライブラリーの種として、今西、桑原らは直接外国の古本屋からカタログをとりよせたり、丸善を通したりして着々と山岳図書を揃えていった。ヨーロッパの登山勃興期の古典をはじめ、アルパイン・ジャーナルの完全なセット、スイス山岳会発行のDie Alpenの完全なセットは、当時京大しか持っていないものであった。図書の中には図書館の費用で買ってもらったものもあったが、自費で買ったものも多い。昭和2年には1,000冊にもなっていたであろうか。ちょうどこの年、京大ヘラグビーの御親戦に御来学された秩父宮に、特に農学部の一室を借りて、この当時日本一といわれた蔵書を陳列してお目につけたこともある。今西、西堀、桑原の三人がモーニング姿で御説明申上げると同時に、笹ヶ峯ヒュッテの建設計画をご説明しご賛同を得た。そのおことは大いに利用した。（戦後のルームの火事で、その貴重な蔵書を失ったことは全く惜しみても余りあるものがある。）

ついで翌昭和3年には大正14年以来入っていた笹ヶ峯にヒュッテが建設された。当時大学山岳部でクラブヒュッテを持っていたのは北大唯一つであった。大学へ働きかけ、費用の足らぬ分は一般の寄附を仰ぎ、こうして建てられた笹ヶ峯ヒュッテは、内地では勿論はじめてのクラブヒュッテであった。（いまわれわれは笹ヶ峯という場所をえらんだ先輩諸氏の眼のたかさに敬服している次第である。）

今西、高橋らの功績としてもう一つあげるべきものは昭和4年の関西学生山岳連盟の結成である。今西はすでに卒業して兵隊に行っていたので、高橋らが主に中心となって進めた。そして関西岳連の機関紙を発行した。当時として横書きの機関紙も珍らしかったが、その1号、2号の記録にはみるべきものが多かった。

× × × ×

昭和3年今西、西堀らが、つづいて高橋健治らが卒業、現役の中心が甲南高校から来た伊藤慰に移った。

今西、西堀らから伝えられたパイオニア精神はようやく国内の山だけでは満足できぬようになり、眼は海外へ向けられるようになってきた。

まず、高橋、奥が昭和5年春ヨーロッパへ向かった。目的はヨーロッパの登山技術を仕入れ、氷河の経験をつみ、さらに登山装備を研究することにあつた。欧州アルプスの先駆者は松方三郎をはじめ先輩も多い。しかし、渡欧した三人の行き方はちがっていた。ガイド

なしで盛んにアルプスに登っていたスイスのチューリッヒ山岳会を手本にして、彼らもまたそれに同じた。

一方、内地で伊藤がカムチャッカ遠征を考えていたとき、1929年のドイツのパウアーを隊長とするカンチェンジュンガ遠征の報告書が届いた。登頂こそ成らなかったが、この隊の東北稜の登攀は多くの示唆すべき点をもっていた。ことにこの報告書の末尾の遠征費用の明細によるとパウアーは2万円でカンチをやっていた。“2万円あったらヒマラヤに行ける”ということは大きな刺戟であった。今西、伊藤らにとって今まで“高嶺の花”としか思えなかったヒマラヤ遠征が、たちまち現実性を帯びて現れたおおいであった。

パウアーの報告書について徹底的に研究し、目標をカブル（7,333m）においた。当時の旅行部々長郡場寛、名誉教授小川琢治がこの計画を支持してくれた。今西、西堀は小川琢治の紹介状を手に大阪の朝日新聞社の門を叩いた。編集局長上野精一はこの話に大いに乗り気になり、また資金の一部にインドとの取引の多かった岸本商店からの援助も得られた。さらに田中喜佐衛門は3,000円を当座の資金にと寄附してくれ、留守本部々長であった桑原がそれを住友銀行京都支店に預け入れた。隊長は郡場寛、時期は1932年と決定した。しかし、ヒマラヤに行くためにはもう一つ、主体をどこにおくかという問題があった。京大旅行部という現役団体では勿論ない。そこで今西、西堀、宮崎、伊藤らが考えてAAACKを結成し、そこに主体をもたせた。これがAAACKの創設の動機である。当初は会員数も二十数人だけで、今西、西堀、桑原、四手井らをはじめ、会員はその育成に努力した。昭和5年（1930年）も終りの頃であった。

AAACKは創立の目的からしてもヒマラヤを前提としたものである。学校出て海外遠征の志を失わぬためにと作った精神は30年たった今でも受けつがれている。今日までAAACK会員による外地遠征は戦前戦後を通じて30以上を数える。

しかし、このAAACK結成の動機となったカブル計画は翌年1931年の満州事変のため、ついに日の目をみるには至らなかった。ヨーロッパにいた高橋、奥らに云って、送ってもらったパウアーの装備一式も直接の役にはたたなかった。ただ、1931年の12月に出版されたパウアーの報告書の、伊藤による訳書、「ヒマラヤに挑戦して」がその名残りをとどめている。

### AAACK第2次ヒマラヤ計画まで

実現こそしなかったが、このカブル計画は、それ以後の遠征登山のきっかけを作った。国内の山行はすべてヒマラヤ遠征を前提としたものとなり、朝鮮、満州の山々で、遠征の経験を積み重ねていった。

大体、AAACKのその後の歩みの中心は、今西、西

AACK年表

年	号	AACKの活動	AACK関係者の登山遠征	備考	参考事項
1922	大正11		3月松方ら槍ヶ岳スキー登山 8月今西、西堀薬師沢金作谷、立山御前沢	今西ら三高入学	
1923	12				1月榎、三田、板倉松尾峠で遭難
1924	13		3月西堀、今西、高橋ら立山	今西ら京大入学	
1925	14		3月西堀ら仙丈、北岳 7月今西ら剣淵次郎尾根		7月榎、三木らアルバータ遠征
1926	15		4月今西、西堀ら黒部東沢 7月今西、高橋ら剣八ツ峯、源次郎尾根バリエーション		
1927	昭和2		7月三高酒戸ら奥又白から前穂 8月高橋ら三ノ窓、チンネ	高橋ら京大入学 山岳図書蒐集	
1923	3		10月高橋ら三ノ窓	今西ら京大卒業 笹ヶ峰ヒュッテ作る	大島亮吉死す
1929	4		7月高橋ら北岳パットレス第5尾根	関西岳連結成	パウアー、カンチに遠征
1930	5	今西らAACK結成 32のカプルーを目標	12月今西、伊藤、細野ら富士へ 5月高橋、奥、陸田ヨーロッパアルプスへ 12月今西ら極地法富士登山	遠征登山熱起る	東大剣沢遭難
1931	6		10月伊藤慰ら鹿島北壁	12月伊藤「ヒマラヤに挑戦して」を出版 伊藤卒業、朝日新聞入社	満州事変 上海事変
1932	7		1月学習院加藤泰安槍一西穂 3月高橋ら帰国 8月今西、高橋、四手井、西堀らカラフトへ	遠征登山のきっかけとなる。	京大滝川事件
1933	8		8月三高長谷川清三郎ら北千島へ		
1934	9		8月同志社児島勘次 白頭山(冬期の偵察)	三高、王滝、鹿島槍で遭難	
1935	10	1月今西ら15名白頭山遠征	3月浪高今西(寿)鹿島北壁		
1936	11		1月加藤、吉井ら中部大興安嶺へ(旅行部現役のみ7名) 3月今西東満州から北支にまわり北京にいた伊藤慰にヒマラヤ旗あげをブッシュする		
		4月'37のK2を企画、伊藤慰インドへ			9月立教ナンダゴット登頂
1937	12		加藤单身ホロンバイルから内モンゴリア	4月桑原ヨーロッパへ、14年2月まで	7月支那事変
1933	13		8月木原、今西ら13名内モンゴリア自動車旅行 ?月イランデマベンド学術および登山隊企画(以後AACKは不活動状態で戦後をむかえる)	7月鈴木信、今西(寿)ら内モンゴリア 8月川喜田、安江北硫黄島	3月加藤卒業、日本航空に就職
1939	14		今西、森下内モンゴリア 8月周布ら北部小興安嶺(旅行部)	1月京都探検地理学会誕生	第2次大戦はじまる

1940	昭和15		1月富士空地連絡 7月三高梅棹、藤田ら冠帽峯山脈、白頭山		旅行部解散命令をうける
1941	16		1月藤本武、今西寿、梅棹らカラフト犬ぞり、超短波無線機テスト(探検地理学会主催) 9月今西、梅棹らボナベ島(探検地理学会) 9月藤田、熱河からドロンへ		4月梅棹ら京大入学 12月太平洋戦争開始
1942	17		5月~7月今西ら13人北部大興安嶺探検(国防科学研究所後援)		
1943	18	8月最後のAACK総会?	8月市川、富川、ナフタルタイ山 10月森下、中尾・小興安嶺		ニューギニアプラン、ボルネオプラン探検地理学会でやる
1944	19		9月から翌年3月まで今西、梅棹、加藤・中尾、内蒙古(カルガン)		8月太平洋戦争終了
1945	20				
1946	21		5月今西帰国		
1947	22				
1948	23				
1949	24				
1950	25		伊藤洋平→今西 ヒマラヤをブッシュ		FF誕生 フランス隊アンナブルナI登頂
1951	26		木原、西堀インドへ、西堀はネパールへ		
1952	27		今西、中尾、林らマナスル偵察		
1953	28	10月今西寿雄らアンナブルナN峰遠征(AACK初のヒマラヤ遠征隊)	加藤、中尾、川喜田第1次マナスル隊参加		イギリス隊エベレスト登頂
1954	29				イタリア隊K2登頂
1955	30		4月~11月木原、今西らカラコラムヒンズークン探検		イギリス隊カンチ登頂
1956	31		4月藤田、本多ら東部ヒンズークン、西カラコラムへ 5月今西寿雄マナスル登頂 10月西堀、伊藤洋平、北村ら南極へ		
1957	32		4月松下、本多、岩坪らスワート、東ヒンズークン 10月吉井第2次南極隊へ参加 11月梅棹ら東南アジアへ		
1958	33	8月桑原らチョゴリザ登頂(AACK初のヒマラヤ初登頂)	5月川喜田、並河ら西北ネパール 5月中尾ブータン 2月~7月今西、伊谷アフリカ		
1959	34				
1950	35	8月酒戸らノシャック登頂			
1951	36	8月四手井、高村バキスタンへ、サルトロ・カンリ許可とりつける。			
1952	37	8月四手井らサルトロ・カンリ登頂	10月小野寺、酒井らインドラスタン登頂		

堀のコンビである。今西は探検への情熱、ねばり強い性格、企画力のある直観主義をもち、リーダー格、西堀は着実な実行力、器用さ、実証主義を備え、サブリーダー格。また、ヒマラヤ熱の火つけ役でもあり、極地法、ヒマラヤ全般についても熱心に研究をしていた伊藤が高級参謀格であった。伊藤の卒業ののちは加藤泰安がこれにかわった。話は少しさかのぼるが1929年、兵役から帰った今西は、細野、伊藤らとともに、ヒマラヤの氷は日本では富士山しかない、富士山で氷雪技術のトレーニングをおこなった。(そのとき一行に同行したドイツ人によってこの記録はDie Alpenに掲載された。)カブルー計画の出来た昭和5年12月から翌年の1月にかけて、その訓練の目的で、今西、西堀、酒戸、浅井、伊藤、工業らは、日本ではじめての極地法による登山を富士山で行った。この極地法という言葉は、伊藤が「アサヒスポーツ」に投稿した記事の中にはじめて、Polar methodを訳して使ったのである。極地法の実験、高山病の経験、高所での雪洞の研究など、日本で最初の試みが行われた。

昭和7年5月にはヨーロッパアルプスで技術をみかいた高橋らが帰国。第1次ヒマラヤ計画はつぶれたとはいえ、着々と研究はつんでいった。ヒマラヤ目ざして燃えたエネルギーは昭和9年の12月から翌年の1月にかけて行なった白頭山遠征で発散する。隊長今西以下、西堀、高橋、宮崎、奥、伊藤、旅行部の学生ら15名。日本内地にすでになくなった処女峰を外地に求め、高さこそ低いが、極地法を試みるのにかっこうの山である登山距離の実に長い、白頭山がえらばれたのである。彼らはここで、もし当時ヒマラヤ遠征が実現していたら実行したに違いないいろいろの試みをしている。ポーラテント、寝袋等の装備の研究、空地無線連絡、シェルバか日本のガイドかの比較等々である。

この朝鮮最高峰(2,744m)の白頭山冬季初登頂が日本登山史上に占める位置は非常に大きい。それはこの遠征を歴史の中においてみたときによくわかると思う。内においてはAACKにとって最初の海外遠征であり、京大旅行部や三高山岳部の学生を刺戟し、外においては海外遠征の流行するきっかけを作った。

その1つのあらわれが翌年の加藤泰安隊長の中部大興安嶺冬期遠征である。これは吉井ら旅行部現役7名からなり、冬の中部大興安嶺の最高峰(1,800m)に初登頂した。あくまでも現役のみで組織し、先輩から平吉功をリーダーに推せんしたが加藤がそれを断ったという話も伝わっている。

彼らは1月2日馬ぞり15台をつらねてハルピンをたったが、その後1週間、とんでもない誤報が内地の新聞、ニュースで伝えられた。全隊員がホロンバイルの草原で凍死したというのである。家族、大学の心労は

ひととおりでなく、ハイラルからは搜索自動車隊も出る始末。結局、誤報はモンゴル人の凍死体をまちがえたということがわかり、彼らは搜索隊に会ったがそのまま前進をつづけた。彼らはこの冬季登山で零下48度という寒さを体験し、貴重な経験を積んで帰った。

× × × ×

こうした度重なる遠征によって装備や食糧の研究もすすみ、機運は熟してきた。ヒマラヤ遠征はAACKの最初からの目標であった。

昭和11年3月、今西は東満州から北支へまわり、当時北京にいた伊藤に会い、ヒマラヤ遠征を打診、そのために彼に帰国を要請した。帰国した伊藤をむかえて4月、AACKの総会が京都平八茶屋で行われた。加藤泰安、兒島勘次らの推進によってAACK第2次ヒマラヤ遠征が企画された。目標は世界第2の高峯K2(8,611m)、時期は翌年の1937年、リーダー木原均スポンサー朝日新聞社と決定。当時K2は1909年イタリアのアブルッジ隊が試登してから30年近く、だれも近づこうとしなかった山である。意気はまことに壮んであった。

田中喜左衛門と奥貞雄の2人が費用を出して、伊藤は許可とりつけのためインドへ飛ぶ。交渉は成功し、伊藤はカラコラムに入る内諾を得、ヒマラヤンジャーナルにも日本隊カラコラムに来るとのニュースが掲載された。しかしどうしたかK2遠征の許可はハウストンのアメリカ隊においてしまった。たとえ許可が来ても戦局が遠征を許さなかったであろう。昭和12年には支那事変が始まった。

立教のナンダゴット隊は戦争の間隙をぬって成功した、日本の戦前での唯一のヒマラヤ遠征隊であった。この隊の成功がAACKの会員たちを切歯扼腕させたのは云うまでもない。しかし戦局は日に日に激しくなり、AACKのヒマラヤの夢は戦後まで持ちこされるのである。

カブルー計画のエネルギーが白頭山に向けられたように、第2次ヒマラヤ計画のエネルギーは大陸へ、そして中央アジアへとむけられていった。

#### それから敗戦まで

戦争はヒマラヤへの夢を破った。AACKはそのホコ先を大陸へ転じた。大陸からのヒマラヤ行きを考えていたのである。

昭和12年夏、加藤は単身ホロンバイルから内モンゴリアにはいった。あこがれの中央アジアの一角に立って、エーデルワイスの咲く土を握ってポロポロと涙をこぼしたという話はあまりにも有名である。ついで翌年木原均を隊長に今西、加藤、宮崎ら13人からなるAACK内モンゴリア学術調査隊は昭和13年8月から約1ヶ月間内モンゴリア一帯をトラックでまわった。鈴

木信を隊長とする旅行部現役からなる学生班も組織され、これは学術班よりも小範囲を回った。今西寿雄もこれに参加している。

AACKは、この内モンゴリア調査隊を最後に全くの不活動状態のまま終戦をむかえるのである。それは戦局が激化してきたためである。しかし、14年の1月に誕生した京都探検地理学会が、AACKにとってかわって大陸で活躍をはじめたのもAACKが衰えた1つの原因でもあろう。何故AACKが衰えて探検地理学会が生れたか、歴史の流れの中にこのことを分析すると話はおもしろくなるが又別の機会にゆずる。

昭和15年は東京オリンピックの年と決定されていた13年に卒業して当時日本航空の社員であった加藤泰安は中央アジアを横断して、すなわちシルクロードを通してオリンピックの聖火を運ぶという雄大な計画をたて、会社にたきつけた。計画はとり入れられ、ドイツ航空会社ルフトハンザとタイアップしてパミール高原から西を受け持つことになり、その予備調査までしたが、これも戦争のためにつぶれてしまった。

そのあとAACKとしてイランのデマベンド山(5,670m)の登山および学術探検を企画し、隊長は木原均に内定したが、計画だけで実現には至らなかった。

× × × ×

昭和15年ごろから三高の梅棹、川喜田、藤田等が活躍してくる。昭和16年(1941年)の1月、探検地理学会を主体として、藤本、今西(寿)、梅棹らが、カラフトに犬ぞりを走らせ、超短波無線機のテストを行なった。このとき、梅棹はまだ三高生である。9月、京大に入学した梅棹、藤田、川喜田らは、今西をたきつけ、ボナベ島へ出かけた。学生の海外渡航禁止令のである1年前、太平洋戦争のはじまるわずか3ヶ月前であった。このとき今西から直接、探検の手ほどきをうけたこの「今西親衛隊」が原動力となり、今西以下13人が昭和17年の5月から7月にかけて北部大興安嶺の探検を行なった。

ボナベ島は探検地理学会によるものであり、北部大興安嶺は国防科学研究所の後援により行なわれたものでいずれもAACKの遠征ではない。AACKは前にも述べたように開店休業の状態であった。

しかし店は休業でも店員は休んでいなかった。この大陸時代の遠征の積み重ねがあつてはじめて戦後の活躍ができるのである。探検地理学会は敗戦で解散したが、それは自然誌学会にうけつがれ、ついで生物誌研究会ができてAACKとも密接な関係をもつようになる。

戦後AACKの再建が行われる話はまた稿を改めて次号に書こう。

× × × ×

以上、AACK結成から敗戦までを簡単にふりかえ

った。実際にAACKとして遠征した記録は、戦前では1935年の白頭山と1933年の内モンゴリアしかない。ヒマラヤ遠征計画を具体化すること2回、ともに実現するには至らなかった。この記録はAACK30年史を書くときに少しさびしいような気もする。しかしAACKが日本における登山と探検の世界をリードしてきたことは、AACK会員の活動で知ることができる。その意味で別表に示したAACKとしての活動、会員の活動の闘を参考までにみていただきたい。

—その2終り—

(いまAACK会員の足跡をヒマラヤ、中央アジアを中心とした世界地図の上で明らかにしようとしています。この地図が完成すれば如何にAACK会員が日本、いや世界の探検、登山界に貢献しているかが明らかになると思います。できれば次号にこれを掲載したいと思いますので、会員諸氏の外地遠征の記録を地図とともに送り下されれば幸甚と存じます。御協力をお願い申しあげる次第です。)

## インドラサン遠征について

酒井 敏 明

京都大学山岳部は1962年秋、部創設以来はじめての海外遠征登山隊を送り、インドのパンジャブ・ヒマラヤのインドラサン峯(6,021m)初登頂に成功した。この遠征に参加した者の1人として、ここにその概要を報告することができるのは、私のもっとも喜びとするところである。ご後援を惜しまなかった会員各位に紙上を借りて深く感謝の意を表する。

計画が軌道にのるまで

京都大学山岳部が海外遠征したのは決して歴史の新しいことではないが、いずれも計画は具体化せず、ついにながく日の目を見ずに終っていた。4年間という大学の在籍期間が定まっておき、毎年新しい部員を迎え入れ、これをトレーニングしつつ活発な登山活動を行なう宿命にある以上、国内の山を立派に登ることが精いっぱいであり、力の揃った上級生だけで海外の山に向かう余裕がない。部として海外遠征をとりあげるべきではないという考えが支配的であった。ところがこの数年部員の数が急速に増し、意欲的な山行を数多く続けてきて、実力が蓄えられたと判断したのであろう。部全体として、海外に遠征登山隊を送るべきであ

という気運が高まってきた。

隊員4, 5名, アプローチが容易で, かつ登頂の見込みがある7,000m前後の山という条件で選ばれたのが, インドのパンジャブ州, ビル・パンジャール山群の6,500m級2座であり, 1962年1月にアプリケーションを提出した。4月になって許可できぬと回答があったため, インドラサンとデオ・ティバ(6,001m)の2座に変更, 7月になって許可を得た。

隊の構成については, 山岳部に腹案があり, 大先輩の方々にいろいろお骨折り願ったが, ちょうどサルトロ・カンリ隊と同時であったので, 難航したといえそうである。一時は私に責任が委ねられ, もちろん固辞したが, 周囲の状況が命ずるままに努力を重ねた。結局資金および渡航の2つの難関は突破することができず, ついにかぶとを脱いでしまう。今西会長, 桑原前会長, 多田山岳部長, 四手井前山岳部長のお骨折りがあり, 隊長は小野寺教授の出馬が決まり, 遠征計画は実現することができた。

隊員は山岳部が選考, 推薦した5名が決定され, 私はノジャック遠征の経験を買われてか, トランスポート・オフィサー役に参加することになる。

京都大学山岳部パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊(KUPE 1962)の構成は次の通り。

隊長	小野寺幸之進	51才	農学部教授
副隊長	酒井敏明	29才	大学院文学研究科博士課程1回生
隊員	大森義次	22才	文学部4回生
〃	田中二郎	21才	理学部4回生
〃	富田幸次郎	22才	工学部4回生
〃	宮木清雅	21才	法学部4回生
〃	岩瀬時郎	21才	経済学部3回生

経費は総額約340万円と見込まれた。山岳部OBやAACK会員有志に寄附をお願いし, 多額のご援助をいただくことができた。隊員負担金, 山岳部員のカンパそれに会社や個人からの援助を得て, 先発の4名が神戸を出発することができたのは, 1962年8月6日である。

#### ア プ ロ ー チ

宮木と私は8月13日横浜を出帆, 香港から空路カルカッタに向かい, 19日到着。船の大森, 田中, 富田, 岩瀬の4人は29日にカルカッタに入港, 船荷通関の都合で, 31日と9月2日の2隊に分かれ, 汽車でパタンコットに行く。パタンコットからは, ベアス川源流のクルー地方の主邑クルーまで, バスで12時間, 約100kgの荷物と共に後発が到着したのは9月7日である。

ダーズリンから呼んだシェルバのダワ・トンドゥップ, ラクパ・ツェリン, グンディンのシェルバ3人, それにクルーに着いてから備うことにしたラダキのワ

ムギャル, スパルグンの2人を加える。

インドラサンとデオ・ティバの両峯の間から流れだすマラナ氷河にとりつくため, マラナ谷をさかのぼる予定であった。クルーから7, 8マイル下流で, 東からベアス川の支流バルバティ川が合流している。ブントールという村があり, ベアス川沿いの草地にクルー飛行場がある。ブントールからバルバティ川左岸の道を11マイル行くと, 北からマラナ川が合流している。ジャリという村がある。

さてキャラバンだが, ブントールからジャリまではブントールのレインジ・オフィスの紹介でラバをやとうことにした。ジャリからマラナ氷河末端まで約40km, 途中にただ一つ, マラナ村という孤立的な山村があるが, バルバティ谷の村々との交際が少なく, その村人を備うにしてもだいぶ厄介らしい。

炎熱のインド平原からバスでクルーへやってきたところまでは調子が良かったが, 標高約1,200mのクルーから先は, モンスーン名残りの雨にふるえながら, 集まらぬポータに前途が思いやられた。隊長はデリーから空路到着する筈だったが雨で飛行機がキャンセルになったので, ブントールに田中とグンディンを残し大森と宮木はラダキを連れて9月8日ジャリへ先発, 富田, 岩瀬, 酒井はダワ, ラクパとともに, ラバ19頭のキャラバンを編成して, 10日, ブントールからジャリに進んだ。先発の2人が心もとないヒンディーで集めた情報では(英語のわかる村人はいない), われわれが必要とする40人ほどのポータは集まらず, 10~20人しかいないという。やむなく隊を分け, 手に入るかぎりのポータで進むことにする。谷のゴルジュの底につけられた悪路をたどってマラナ村へ着く。この村内だけに通用する言葉というのだから, 英語のあまりわからぬダワを仲介にしてのわれわれと村人との交渉はかなりに困難であったが, ともかく, この谷を上へのぼる以上マラナ村の人間をポータに使わないと駄目だという。賃金は1人1日7ルピー, 氷河の末端まで2日行程だと主張する。偵察のため登った日はあいにく降ったりやんだりの天気だ。約2,700mの村から上はかなりの開けた谷になっており, 牛や羊を放牧するアルプがあるためか, 踏みあとはずとついている。持参した地図は小縮尺なためくわしいところはわからないが, マラナ谷が大きく右へ曲がる付近, 約3,500mまで登った。マラナ氷河を見ることはできなかったが, 左岸の稜線の上には雪が残っているのがわかりさすがに山に近づいたと思う。マラナ村へ帰り, ジャリから荷物があがり次第, 村人を備って輸送を始めることにした。

9月14日, 大森, 岩瀬, ダワが16人のポータを率いてマラナ村を出発, 明るる15日, 富田, 宮木, ラクパは14人を連れてあとを追う。隊長は鉄道とバスに乗り

かえてクルーに着き, 田中, グンディンと合流してジャリへあがってきたので, 連絡のためおりの私も加わって, 6人のポータを連れてしんがりパーティは15日ジャリを出発, マラナ, マダギランの泊り場を経て, 17日にベース・キャンプに到着した。連日雨が降る。モミヤヒノキの林をくぐり, 高山植物のかわいい花を踏みながらも, 頭上を厚い雨雲におさえつけられ, 目指す山の姿を見ることもできぬ旅であった。

#### ア イ ス ・ フ ォ ー ル

ベース・キャンプはマラナ氷河の末端から約3km手前, 右岸の段丘の上, 草地に設けられた。高度約3,800m。氷河のツングはツルツルのゴルジュの間を割って流れ落ち, 下の川原から氷河にとりつくことはできぬ。比高300mほどの段丘上のキャンプから, 草つきの斜面をトラバース, 右岸のゴルジュの上でできたせまい岩棚をつたって行くと, 氷河の右岸のモレインの上に達することができる。そのすぐ前に, 左手はるか上方の山腹の岩壁の一部がくずれつつあるところがあって, ととき大音響とともに岩塊がなだれのように落ちてくる危険な箇所を, 横断せねばならない。

氷河は薄よごれた氷の層を見せ, 黒い粘板岩でできた岩屑が, 二筋のモレインをつくっている。ツングから東へ氷河を登って行くと, 約1kmほどで, 本流は左へ, すなわち北へ, ほぼ直角に折れている。右からは, アリ・ラトニ・ティバ峯(5,490m)の裏側から流れ出す枝氷河が流れこんでいる。T字型の交差点をなしているわけである。左へまがると, マラナ氷河の全貌が, 痛いほど視界の申にとびこんでくる。幅2kmほどの氷の帯が大小のクレバスを縦横にはりめぐらせながら, ほとんど勾配もなく北へのび, 約8kmほどでつきるあたりが, まっ白な屏風を立ちめぐらせたようになっている。アイス・フォールだ。比高約800mあることは後になってからわかった。はじめて見たときには, 遠くから眺めたことでもあり, せいぜい500mくらいかと思ってしまう。

マラナ氷河の右岸はおおまかな岩壁がつづいていてその上のネベ(雪原)からたれさがっているらしい氷の塊が, ところどころ, 岩壁が低くなっているところから, 舌のようにぶさがっている。左岸はどうかというと, マラナ・ナラの東側にはいりこんでいるトス・ナラ川の水源をなすトス・ナラ氷河との分水嶺山脈が, せまい, ギザギザした岩の稜線をつくって, 視界をかぎっている。アイス・フォールの右手には, やはり岩稜がおりてきて, この分水嶺につながっていると考えられるのだが, もっと接近して観察しないと, わからない。

ところで, インドラサンはどこにあるのか。アイス・フォールの上には, ととき晴れまのできるモン

ーンも終りに近い雲の間から, なにも見ることはできない。右手の岩稜の一部が突き出たこぶのように見えないではないが, なんぼなんでもあんな岩塔がインドラサンであるとは考えにくい。すこし情ないような気がする。あのアイス・フォールの奥にあって, この位置からでは見ることはできないのにちがいないが, 早くインドラサンの姿を見せてもらえないと, どうも頼りない。力のいれどころがわからないのだ。

けれども, それどころでないことが, すぐわかった。アイス・フォールの突破がたいへんな仕事なのであった。ヒマラヤン・ジャーナルの第21巻に写真がのっているインドラサンの上部を, 早くこの眼で見たいと思ったのだが, そして, 写真を見ただけで発見することができなかった頂上へのルートを, 氷と岩の急斜面に自分の眼で見出したいと思ったのだが, アイス・フォールに登路を求めることが簡単にゆかなかったのだ。私がこのアイス・フォールの前に立つ前に, すでに開始されていた偵察隊の活躍を, ここで述べておかねばならない。ベース・キャンプに一番乗りした大森と宮木は, 9月17日, 富田, 岩瀬, ダワ, ワムギャル, スパルグンの5人のサポートを受けて, マラナ氷河を登り, 約4,300mに仮キャンプをつくった。

次に2人はアイス・フォールのふもとに達し, 偵察した結果, 左岸寄りの第1キャンプ予定地からアイス・フォールを直登することは不可能であり, 右岸寄りにある台地状の雪原に到達したのち, そこからアイス・フォール中段にできている緩傾斜の雪面にとりつき今度は逆に, 右上へ斜めにあがって上端にとりつくというルートを, 有望な, 可能性あるものと考えていた。同じ日, ベースから隊員, シェルバ, ラダキなど9人で, 仮キャンプまで荷上げをし, 偵察隊の報告をもとに, 9月20日からの登高計画を定めた。

アイス・フォールに登路を発見し, その上端に第2キャンプの位置を決める。第3キャンプは上部雪原上インドラサン本峯のふもとに設ける予定で, 第2キャンプおよび第3キャンプ用の荷物を第2キャンプ予定地まで荷上げするのを, 第1段階とする。第2段階は第2キャンプおよび第3キャンプの建設と, インドラサン, デオ・ティバ両峯の攻撃である。第1キャンプ以上で行動するのは隊員6人とシェルバ2人, ラダキ2人で合計10人, 日数は約4週間を要するであろう。隊員は2人1組で行動し, 随時, シェルバとラダキをつけ加える。

隊長は登頂態勢ができるころに第1キャンプにあり, それまではクックのラクパ・ツェリンとともにベース・キャンプを固める。隊員とシェルバはあまり長いあいだ連続的に行動せぬようし, 交代でBCにくだって休養する。ざっとこういうあらっばい行動方針を立てた。

9月20日、酒井、大森、田中、富田の4人が第1キャンプ建設に向かう。宮木、岩瀬、ダワ、グンディン、ラムギャル、スパルグンというフル・メンバーがサポートする。途中から雪が降りだし、予定地までゆかないうちに、大クレバスに進路をはばまれ、大あわてでテントを張る。サポート隊も、湿雪でビショビショに濡れながら、急いでベース・キャンプへおいた。次の日も1日雪が降ったので行動停止。その次の日、昼から雪がやんだので、はじめの仮キャンプ(デポⅠ)のデポから、荷物の一部をあげる。23日、久しぶりに快晴になったので、3晩降りこめられた仮キャンプ(デポⅡ)を撤収し、新雪のラッセルに苦しめられながら、約1km上流、高度約4,500mに第1キャンプをつくる。ベース・キャンプからも6人があがってきた。大森と富田は朝からルート偵察に登ったが、ブレーカブル・クラストに体力の消耗はなはだしく、約4,800mの雪の台地までしかゆけなかった。新雪はおよそ1mほど積もったので、堅雪の上をスタスタと歩いて行けた第1回の偵察とは大ちがい、行程ははかどらぬ。このあと1週間ほどの間、アイス・フォールとの苦闘が続く。前半は天気が悪かったので、ルート開拓は遅々として進まなかった。大量の雪が降るということこそなかったが、晴れてアイス・フォールの全貌が見渡せるのは朝のうち半時間くらいだけ、午後はきまったように雪がちらつく。ときには雷鳴を聞く。こんな状態が続いては、偵察隊のトレースがのびず、能率が悪いので、プラトーに仮キャンプ(デポⅢ)をつくり、ここから道探しに出かけることにした。

9月29日、大森と私はアイス・フォールを登る。何日ぶりの快晴、プラトーのせまいキャンプを出発。アイス・フォールの中段にかかる緩傾斜面への登り口には、前に富田たちがつけたフィックス・ロープがある。このバンドを右上へあがって、アイス・フォールの中心部につく。はじめはあくまで右へバンドをつめて行き、右端近くで上に抜け出るルートを考えていたのだが、大きなセラックスが林立し、深さ10m以上のクレバスがずたずたに斜面を断ち切っている。このルートは駄目だ。まっすぐに上へ登る。アイス・フォールの上部には、巨大なブロックが目白押しに立ち並び、壮観をきわめている。三階建てのビルディングくらいあるブロックの側壁は、ツルツルの蒼氷になっており、今にも倒れかからんばかりに、裂け目のはいた不安定なやつが沢山ある。5m以上もあるツララがぶらさがっている。ヒドン・クレバスに用心しながら、アンザイレンでルートを探して進むうちに、次第に右へ、右へと行ってしまった。大きなビルディングの垂壁が二重、三重に押しかぶさるように並んでいて突破する口がなかなか見つからない。高さにして8割がた登ったが、時間切れで引き返す。マラナ氷河を

見おろすと、大きなしわが右からも左からも流れの中央へ寄せている。プラトーから右手の方を見ると、デオ・ティバからおりてくるウォーターシェッド・リッジの末端は、ほとんどそれと分からぬくらい目立たない稜線になって、広い雪原を抱えていることが知られる。センチネル・ピークという、デュハンガン・バスからイギリス隊が登った岩峯は、ちょうどベース・キャンプの背後の斜面にそそりたつ山のことであろうか。デポⅢを素通りして第1キャンプにおりてみると、ベース・キャンプからあがってきた連中も、到着したところであった。

つづく3日間、登路開拓と荷上げがおこなわれ、どうやら第2キャンプ予定地からインドラサンを観察することができた。大森、宮木たちがアイス・フォールの残された最後の部分を偵察した結果、氷壁を登り、クレバスを渡り、大きなアイス・ブロックのすそをまわりこむと、そこだけ1ヶ所、雪面が続いて上まで登りきるルートが見つかったのである。上部マラナ雪原のいちばん端っこ、前と後の大クレバスの間に細長く島のように残った雪面に登りつくと、正面にインドラサン、左手前にデオ・ティバの二峯が姿をあらわす。この第2キャンプ予定地からでは、すぐ前のクレバスの側壁がじゃまになって、インドラサン本峯の根元は見えないが、両肩をいからして立ちはだかる、その急な斜面はなかなか迫力をもってせまるものがある。登路があるかどうか、簡単にはわからない。ただ、あるとしても、それが容易なものでないことだけは、はっきりしていた。デオ・ティバの方はドーム状のなだらかな斜面が頂上まで続き、登頂はあまり困難ではないと思われた。

第2キャンプ予定地まで荷上げができたので、全員一度ベースキャンプまでおりて、休養をとる。

#### 困難な岩と氷の壁

10月6日、第2段階にはいる。サポート隊の6人が第1キャンプに進む。7日、富田、宮木、岩瀬、グンディンがアイス・フォールを登って、約5,300mに第2キャンプを建設した。インドラサンの本峯は上部マラナ雪原の北の端にそびえている。デオ・ティバとのコルから頂上へのびる、アレート状の匹稜、南から這い上る南稜、これは尾根というよりは、むしろ岩壁という名がふさわしい。この間の南西斜面に登路を求めなければならぬ。

10月8日、インドラサンの本峯のふもと、約5,500mに第3キャンプがつくられた。富田、宮木は登路偵察、約700mの比高をもつ本峯は、大部分が急峻な岩壁でまもられているが、部分部分にはりついている雪と氷の斜面をつたって行けば、どうやら頂上に達するルートは求められそうである。頂上のスノー・キャップ

のように見える部分から、急な雪面がたれさがっててちょうどじょうごのように、その下部が細くくびれている。そこから下は急な岩壁をなしてすっぱりと切れ落ちているのだが、途中にある高さ100mくらいの岩場を突破できるならば、右下から這いあがっている雪面を登って、上のじょうごの斜面にとりつけそうである。じょうごの雪面は、まん中が少しオーバーハング気味の氷壁をなしている。直登は不可能だが、右か左の、クローワール状の急斜面をただひたすらに登るならば、スノー・キャップの縁にたどりつくことができるだろう。そこから頂上までは、傾斜のゆるい雪稜がつづいているから問題はない。右下から斜めに這いあがる「下部雪面」と、じょうごの壁をなす「上部雪面」の間にある、くろぐろとした岩場、それはほとんど垂直に近いと思われる岩壁なのだが、ここになんとか道を切り開かなくてはならぬ。それ以外に、このマラナ雪原からインドラサン頂上に登るルートはない。

富田と宮木、宮木と岩瀬の2日間にわたる偵察とルート工作の苦闘をここに簡単にのべることはできないが、かれらの頑張りは、この5,800mの高度において困難な岩壁にルートを開拓することに成功した。特にてごわかった約10mの垂直のスラブをはじめ、必要な箇所にはザイルを固定し、上部雪面の末端までは、確実なルートが、確保されたのである。

ただちに第一回サミット・パーティの大森と田中は10月11日、第3キャンプを出発して頂上に向かった。私はダワを連れて昼すぎに第2キャンプに登ったが、そのころ、朝からの快晴はくずれ、小雪さえ舞ってくるという天気になっていた。ひどくアタック隊のことが心配になった。第3キャンプから帰ってきていた富田とグンディンの報告では、12時ごろ、上部雪面の、大きなツララが幾本もぶらさがった、例の氷壁の直下に、2つの黒点が見えたが、その後は雪雲におおわれて、アタック隊の様子は全然わからぬという。夕方になって、第3キャンプの宮木と岩瀬から、2人がまもなく帰ってくるとランシーバで連絡してきた。

結局、第一次アタックは失敗したのだが、次の日、第3キャンプに集って、アタック隊の報告をもとに相談し合った結果、つづいて第二次アタック隊を出すことにする。

失敗の原因を求めるならば、これは私の責任に帰するのだが、ルート選定が不適当であったことをあげねばなるまい。ツララの氷壁の下まで登ってから、かれらは左のクローワールを登ろうと思ひ、左へトラバースしかけたのだが、これがとんでもない悪い氷壁であって、ステップ・カッティングにひどく消耗させられたことと、アイス・ピントが不足したために、退却せざるを得なくなったのである。というのは、ツララの

氷壁の下から、左右2本のクローワールのうちどちらのルートが良いか偵察では判断できていなかった。その場で決めるつもりで出かけた。ところが、第3キャンプ付近から見れば明らかに危険のより大きい左へのトラバースが、いざ、その場に到着して見ると良いルートと思われた。氷壁にとりついて、その悪さがわかって、右のクローワールヘルートを変えようとしたときには、すでに疲労の極に達していたということである。

ただし、ツララの氷壁の下から右上へトラバースして、右のクローワールにとりつくといっても、誰もそれまでこの右のクローワールを見てはいないのだ。多分それはあるだろうと考えていただけで、C3付近から見あげるときには、その手前の岩塔(主稜線の左の側壁上の岩の突起で、将棋の駒の形をしている)の後にかくてれ見えないのである。ただ、この岩稜と、背後につきあげていてその上部を見ることができ氷壁の斜面の形および位置から考えて、その間にクローワールが這いのぼっているにちがいないと考えていたのである。これを実際に観察して登路に使えるものであるかどうかを確めるために、富田、宮木、グンディンの3人を第3キャンプに残し、他の5人でデオ・ティバとのコルまででかける。途中で将棋の駒の裏をよく眺められる場所から、双眼鏡で観察する。右のクローワールは、たしかにあった。傾斜はずいぶんけわしい。氷化してテラテラ光っていることがわかったが、確実にルートとして使えると考えられた。ただしこのクローワールの末端にとりつくためには、ツララの氷壁の下まで登ったのではかえってトラバースが困難になりそうだから、フィックス工作終了点から、ただちに右上へのびる細長い外傾した雪面を登って行き、この雪面が側壁に突き当たるころから、左上へトラバースして、クローワールの入口に達するべきであると思われる。この外傾した雪面の登高といい、突き当りの岩と氷のミックスしたところのトラバースといい、決して容易ではなからうが、頂上に達するルートはこれ以外にない。

ルートの見通しが得られたので、10月13日富田と宮木の2人は勇躍頂上に向かった。ピバークは必至と考えられたので、ツェルト、エア・マットレス、ラジウス、コッヒェルなどの露営用装備と2日分の食糧を詰めこんだザックは、ザイル2本、カラビナ6ヶ、アイス・ピストン10ヶ、ロック・ピトン7ヶなどの登山用装備とともに1人当たり約20kgの重量となった。4時20分出発、急傾斜の上部雪面、クローワールへの岩と氷のトラバース、クローワールのアイス・カッティング、いずれも重荷を負いながらの奮闘で、ずいぶん時間がかかったが、二人はよく頑張った。午後4時にスノー・キャップの下端に登りついた。そこに荷物を置

いて頂上に向かい、4時35分、最高点の雪の突起を踏むことができたのである。朝の快晴は昼ごろから雲にかくされ、頂上では一面のガス。写真を撮って20分後頂上をあとにし、デポの雪面をならしてビバーク。

12日の晩、第2キャンプで私は大森、田中と相談して、13日、インドラサンと同時に別パーティでデオ・ティバをアタックすることに決定した。13日6時に大森と田中は第2キャンプを出発。7時の交信でこのことを第3キャンプの岩瀬とグンディンに伝える。私がトランシーブで岩瀬に話しているうちに、すでに2人が第3キャンプへ近づいてくるのを見たのだから、岩瀬は慌てた。

ともかくこの4人は軽装でデオ・ティバに向かい、シュプールのつけてあったコルからデオ・ティバの東斜面をラッセルしながら登り、途中から右へ折れて北東稜に出た。頂上到着は12時。疲れも見せずに3時には第3キャンプに帰って来た。デオ・ティバは1952年の初登頂のあと、日本の婦人登山隊など、4、5回登頂されている山だ。われわれの第2キャンプまたは第3キャンプからさしたる困難なしに登れると思われたので、インドラサン登頂後片づける積もりであった。

ところが第1次アタックが失敗し、日が延びたためにこのあと天気が続くか危ぶまれたので、多少の無理を承知で同時アタックに踏みきったのである。

その日、岩瀬と私は第3キャンプに残り、大森、田中、ダワ、グンディンは第2キャンプに帰った。昼すぎからインドラサンはガスに包まれて、富田、宮木の2人の姿を望遠鏡で探すことはできなかったが、スノウ・キャップ付近でビバークしていることは疑わなかった。登頂したあとか、あすの登頂を控えてかはわからなかったが。

14日、朝テントをとびだして見ると、頂上付近は雲ひとつなく、最高点に続くスノウ・キャップの雪面にトレイスがついているのがはっきりとわかる。さっそくトランシーブで第2キャンプに連絡し、第1キャンプの隊長に報告してもらう。第2キャンプからあがって来た連中といっしょに見守るうちに、8時ころから動きだした富田と宮木がゆっくりとおりにくる。昼には着くかと思ったが、しんちょうに確保しながら、ときにはアップザイレンを使って下降するのにずいぶん時間がかかり、下部雪面のとりつき点まで迎えに行った3人と一っしょに第3キャンプに帰着したのは3時半である。

ひどいアルバイトだった。高距約700mに登り10時間15分、くだり7時間15分を要したことになる。ほんとうによく登ってくれた。岩壁といい、氷壁といい、どこといて気を許すことができない困難な登攀を、頑張ってくれようとおおせしてくれたものだ。これで目的を達することはできた。

10月15日第3、第2の両キャンプを撤収して第1キャンプへくだり、16日第1キャンプを撤収して、ベース・キャンプへおりました。マラナ村からポータを呼びあげるひまを利用して、祝いの宴を張り、また休養と荷物の整理をする。京都の留守本部やデリーの大使館に電報や通信を送る。

10月19日ベース・キャンプをあとにし、ジャリ、クルーを経由、10月30日、デリーで隊を解散した。ネパールや南インドに立ち寄るものもあり、11月から12月にかけて帰国した。

× × × ×

以上簡単にインドラサン遠征について、個人的な覚え書きを記した。すでに別の形で報告書が出版されているし、京大山岳部の「報告」にも詳細な記録が発表されている。参照していただければ幸いである。

幸いにしてインドラサンの初登頂に成功することができ、この幸運な遠征に参加できたことがなにより喜ばしい。京大山岳部ではすでに第2の遠征計画を進めているようであるが、将来の活動のためのスプリング・ボードになり得るとすれば、困難な登攀にファイトを燃やした若い隊員たちの労苦は最大の酬いをうけたことになるであろう。それにしても、留守本部をはじめ準備に奔走してくれたすべての山岳部員に対しては別の機会にゆずるが、後輩のために有形、無形の援助を与えられた会員各位にお礼を申しあげなくては、本稿の意味はなくなるのである。とくに工楽英司、松田寿郎の両氏には対官庁接渉に関して強力なご援助をいただき、加藤泰安、今西寿雄の両氏からは登山の戦略戦術に関する貴重なアドバイスを頂戴。四手井綱英、吉井良三、鈴木信、中尾佐助、川喜田二郎、近藤良夫、山口克の各氏およびサルトロ・カンリ遠征隊員の皆様からは募金から準備万端にわたるお世話を受けた。感謝をもってここに記すことをお許しいただきたい。

## 木曜講座 —その3—

### カラコラムに残された問題

上尾庄一郎 羽根田博正 安原啓示

この講座は毎週木曜日夜AACKルームに集まる若手の木曜会で行われた講義に若干手を加えたものである。

#### K-12

サルトロカンリに続く1964年度AACKの海外遠征の対象の山としてK-12（不許可の場合はガッシュブルムⅢ）が選ばれ、多田政忠教授を隊長、舟橋明賢氏を副隊長とする遠征計画が具体化し、活動を始めた事はすでに昨年春の1962年度AACK事業報告にてお知らせしたが、残念ながら昨年の暮もおしつまってから、パキスタン外務省より日本外務省を通じ1964年度にはK-12・ガッシュブルムⅢいずれの山にも許可不可能の旨通知が入った。それ故本年度は我々はカラコラム遠征をあきらめなければならなくなった。

種々の情報によればガッシュブルムⅢは中共、パキスタンの国境協定により、ここ1、2年はいかなる国の遠征隊も近づけないとのことで、この山は今しばらくは未登のままで残るのであるが、K-12は我々以外のどこかの隊に許可されるらしいとの事である。（K-12にはAACK以外ドイツのパバリア隊、英国隊東京隊が申請しているという）しかしその隊が本年度登頂をくわだてたとしても必ず登れるとはかぎらないから、1965年度にはAACKの遠征の対象として振り返りかもしれない。

K-12の概念

サルトロカンリの南東方約15kmにあり、シアチェン氷河とピラフォンド氷河にはさまれる流域の最高峯である。

標高24,503feet (7,428m) 又は7,463m

北緯35°18' 東経77°1'

そのドッシリと重量感にあふれる巨大な山容は、今や残り少いカラコラムの未登峯のうちでも上位にランクされる立派なものである。又6月の終りになればBCにも草花が咲き、BCから一日行程で緑の牧場（ギャリ）に出られ2、3時間で野生のネギや薪のとれる所に行けるというのも、カラコラムの山ではめずらし

いことといえよう。

K-12周辺の地形は未だ未調査の部分が多く、特に南部はクォーター・インチ・マップにも空白のままに残されている。又東部の氷河の様子も地図と実際とは大きな相異がある事は、すでに1957年のシプトン隊により指摘されている。1960年のスティーヴンソン隊はK-12登山の外にK-12周辺の地理学的調査も相当行ったようであり、ヒマラヤン・ジャーナルVol.23 (1961)に発表されたK-12周辺概念図がこのあたりの正しい地形を示す唯一のものである。これを見るとクォーター・インチ・マップでは記入されていないK-12東面からシアチェン氷河に直接流れ込む二つの大きな氷河（K-12氷河とその下流の無名氷河）が記されており、このあたりではクォーター・インチ・マップがいかに不正確かがわかる。

文献上に発表されているK-12の写真としては、東北方面から見たものとしてはワークマン夫妻の“Two summers in the ice wilds of the eastern Karakoram.”あるいはジェオグラフィカル・ジャーナルVol.43 (1914) 276-7.にあるジャンクシオン・ピーク（シアチェン氷河とテラムシェール氷河出合左岸の小ピーク）頂上からのパノラマ写真。

西北方向からはAACKの“サルトロカンリ”写真ページ42、46、69。西方からはヒマラヤン・ジャーナルのVol.23 (1961) 72-79がある。

登山小史

この山を対象にした登山隊は今迄に二隊ある。1つは先にも述べた1957年シプトンの率いるインペリアル・カレッジ隊で、初めサルトロカンリを目標としていたがスエズ動乱で入山が遅れ、やむなくサルトロカンリは放棄し、代りに彼らがK-12東部に発見し命名したK-12氷河の調査を行っている。この時K-12氷河の源頭のK-12の北側に通過可能な峠を発見しインペリアル・コルと命名した。又帰途、ピラフォンド氷河の支流ロホモルンバ氷河（Rachmo Lungba）から

の調査も少し行って、この氷河から先のインベリアル・コルに到達可能な事を指摘した。しかしK12に登ろうとこみ余る余裕はなく、周辺の調査だけにとどまったが、インベリアル・コルの発見はK-12登山にとっては重要な発見であった。(本隊のK-12関係以外の行動については、時報1号の酒井敏明、サルトロ・カンリ小史を参照されたい。)

次いで1930年、オーストラリア人スティーヴンソンを隊長とするオーストラリア、アメリカ、イギリス混成の小パーティが西側のロホホルン氷河からK-12に登頂をくわだてた。本隊は隊員4名、リエゾンオフィサー1名計5名からなり先のシプトン隊に参加したK・J・ミラーも参加している。

5月21日スカルド出発。(ジープは使用せず)

6月1日ロホホルン氷河上15,000feet(4,570m)にBC建設。ただしここからはK-12は見えない。同氷河上にC1(16,500feet, 5,000m), C2(18,000feet, 5,500m)を順次作り、峠(インベリアル・コル)直下のアイスフォールとクレパスに苦労したが、6月24日峠にC3(19,500feet, 6,000m)を建設。K-12氷河側に入って同氷河の偵察を行い、一たんBCに下った。ふたたび登山を開始して7月7日北稜上にC4(20,500feet, 6,200m)を作る。同夜はスティーヴンソンとクーリーのチヨがとまり、次の日登山を

続け、午後3時、標高23,000feet(7,000m)を最高到達点として引返している。スティーヴンソンによれば、それより上部には何ら困難な箇所は認められなかったとの事である。事実サルトロカンリから見た様子でも、上部のルートに関しては問題があるとは思われなかった。

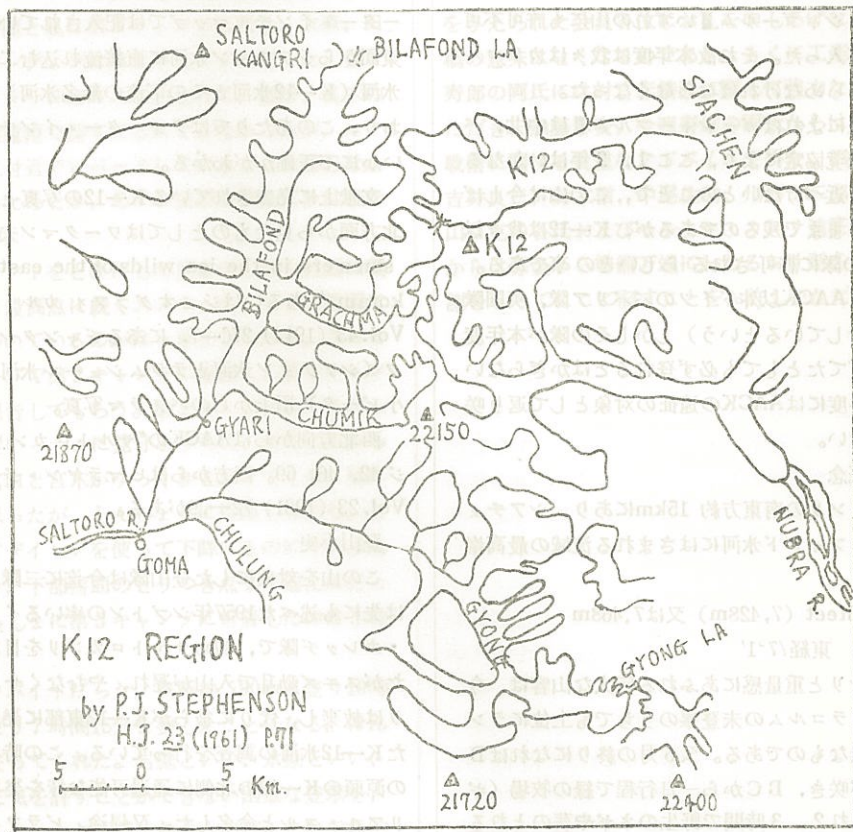
この隊の失敗の原因としては好天にめぐまれなかった事の他に、隊員の事故のため数少ない隊員がさらに減り、又後の調査のための物資の調達のため下ったために最後には隊員2人だけで登山に当らねばならなかった事を挙げる事が出来よう。

登頂計画

1964年に遠征隊を出すとの予定で立案された登頂計画の概要を紹介し、会員諸氏の御批判をあおぐとものに今後の参考としたい。

先ずBCまでのアプローチであるが、これはサルトロ隊と全く同じである。即ちスカルドとカペルの間はジープ。カペルでザークを使いショークを渡って、対岸のサリンでキャラバン編成。これより実動6日でBCに着く。ただし隊のスケールがずっと小さくなった場合は、サルトロ川左岸の道を通って更に一日短縮できるが、道は良くない。

BC(4,500m)から峠(6,000m)までの間、荷揚げの期間にはキャンプを2つ作り、峠にC3を作る。



登頂の期間に入ると、このC1, C2を間引いてキャンプを1つにする。C3から上にはキャンプ2つを作る。C4(6,500m) C5(7,000m)の予定である。

ハイ・ポーターをC4まで使い、他にスペシャル・クーリーをC2まで使って、隊員は下ではできるだけ荷物を背負わなくてもよいようにする。

C1建設から登頂まで約20日という計画である。

隊員8名(うち登攀隊員7名)ハイ・ポーター5名スペシャル・クーリー6名としたときのくわしい行動表、荷揚げ表、荷揚げ品リストの試案も完成しているが、ここでは省略する。(上尾庄一郎)

バルトロ氷河地域

世界第二の高度をもってその偉容を誇るK2が君臨するこのバルトロ氷河地域に最初に踏み込んだのは、コンウェイの率いる探検隊(1892年)である。彼らはバルトロ氷河の源頭を発見し、周辺の地図を作り、世界の目をこのバルトロ地域に向けさせた。しかも、バルトロカンリ山群の第2峰たるパイオニア・ピーク(6,970m)に初登して当時における人類到達の最高点をマークした。バルトロ氷河を取り巻き、上から見下ろす如く、7,000m以上の山々が立ち並ぶ。これらの処女峰を征服せんものと、今日まで幾多の登山隊が送り出され、未登の山は残り少なくなった。以下簡単にバルトロの登山史をふりかえり、ガッシャーブルム山群の未登峯GⅢに触れたいと思う。

K2(8,611m)は、1902年初めてO.エッケンスタインにより攻撃された。この隊は、イギリス人、オーストラリア人、スイス人から構成された強力な隊であったが、その目標を達する事は出来なかった。1909年、イタリアのアブルッジ公隊が登山と探検を旗印に立ててやって来た。アブルッジ公は南東稜(後のアブルッジ稜)沿いに高度約6,000mの地点まで登り、引き返した。K2登頂に失敗したとはいえ、アブルッジ隊は地図の製作、写真撮影等のすぐれた探検成果を残す。1933年より三度アメリカ隊がK2に挑戦した。1938年のチャールズ・ハウストン隊は、5人という少数パーティで7,390mまで迫った。その次の年フリッツ・ビスナー隊はやはり隊員5人でK2攻撃にやって来た。ビスナーはシュルバのバサン・ダワ・ラマと2人でやっと8,350mの地点にたどり着いたが、時間切れで8,000mの地点に設けた第9キャンプに引き返し、一日の休養の後再度アタックしたが、体力の消耗と時間切れの為、退却を強いられた。2人が下のキャンプへ下った時、キャンプはいずれも放棄されていた。次の頂上攻撃の為第7キャンプに登って来ていたウォルフは、一人ぼっち第7キャンプで謎の死をとげた。ビスナー隊は傷心のうちに下山を続けねばならなかった。翌年

世界大戦が始まり、ヒマラヤへの挑戦は中断される。第二次大戦が終ると、まず1953年チャールズ・ハウストンの率いるアメリカ隊がK2攻略にやって来た。だが彼等は悪天候、隊員の不幸な死の為に、攻撃のチャンスを失ってしまう。1954年、アルディト・デジオ指揮のイタリア隊が、1955年に備えているアメリカ人を尻目に、マリオ・ブショーズの死、悪天候等にも負けず、頂上征服を勝ち取った。

ブロード・ピーク(8,047m)の試登は、まず1954年、ヘルリヒコフナー隊(ドイツ)により行われたが、ポスト・モンスーンの極寒が7,200mの所で彼等を追い返した。1957年、マルクス・シュムック、フリッツ・ヴィンタシュテラ、ヘルマン・ブール、クルト・ディームベルガーの4人から成るライト・エクスペディションがやって来た。コンコルディアから奥は、ハイ・ポーターを使用せず、4人だけで登高を行なった。卓抜した彼らは、ブロード・ピークの急峻な西斜面に3つのキャンプをつくり、2度目の攻撃において全員登頂という輝かしい成果を収めた。

バルトロ氷河に入るとまず目に付くのが、奇怪な形をしたムズダグ・タワー(7,273m)である。この山は、それまで人間にとって最後まで未登で残る山の一つと考えられていた。しかし1953年、時を同じくしてイギリス隊は北西稜より、フランス隊は南東稜より、この峰を足下に収めた。

バルトロ氷河の奥深く座するのはガッシャーブルム山群である。ガッシャーブルム山群は、いずれも7,000mを越える6つの峻峰を持つ。ガッシャーブルム山群が最初に登山家の攻撃を受けたのは1934年である。G・O・ディーレンフルト国際遠征隊は、シア・カンリ(7,422m)とバルトロ・カンリ(7,260m)に登攀した後、ガッシャーブルムI(8,063m)の南西斜面を6,300mまで登り得た。2年後の1935年にはフランスのドゥ・セゴニエ隊がガッシャーブルムIへの直登を試みたが、6,800mの地点で退却した。ガッシャーブルムIは戦後の1953年アメリカ隊によって登られた。ガッシャーブルム山群の中で、ピラミッド型をした最も美しい山の1つであるGⅡ(8,035m)は、1956年モラヴェク隊(オーストリア)によって、このグループの内最初に征服された。この強力なオーストリア隊は、登攀隊員6名を有し、5月29日、アブルッジ氷河上の高度5,150mにベース・キャンプを設けた。6月18日、キャンプ1(6,000m)への荷上げは悪天候の為中断され7月1日隊員3名とポーターが上り、雪崩がキャンプ1を全く埋めているのを見つける。食糧装備を失った彼らは、すぐに電撃作戦に切り換えた。ベース・キャンプからテントをキャンプ1まで上げ、そこをベースとした。7月3日にはキャンプ2(6,700m)設営、7月5日にはキャンプ3(7,150m)設営と



彼等はGⅡの雪稜を猛進した。7月6日午後、モラヴェク、ラルヒ、ウィレンパートの3人は、キャンプ3から約1,000mの斜面をラッシュする事にした。キャンプ3から上は、スリップの危険が大で、互いに結び合っていたザイルを解かねばならぬ程であった。午後8時半3人は、7,500mの地点でビバークした。翌7日、ミルクとクラッカーだけで出発した彼らは、大奮闘の後、午後1時30分頂上に達した。

1953年、全くバルトロは、大賑いであった。まずAAACKがあゝのヘルマン・プールの犠牲としたチョゴリザ(7,654m)初登頂に成功した。又先に述べたようにアメリカ隊がガッシャーブルムⅠを陥落させた。又同時にリカルド・カッシンの率いるイタリア隊がGNの岩峰を見事にこなし、7,980mの頂上に達した。

未踏の山GⅢ(7,952m)はGⅡの西に位置する山である。これに至るルートとしては1956年のオーストリア隊のとったルートを使って7,500mの地点に第4キャンプを置き、GⅡとGⅢとのコルに最終キャンプを置き、アタックをする方法が考えられる。このルートで問題になるのは、GⅡのピラミッドの南面(雪面)を如何にトラバースするか、及び高度7,500m以上で、人間が長日時にわたって、行動が出来るかどうかである。又次のルートも可能性もあるかも知れない。それは、GNとGⅢの間のコル、即ち北東コルから登るのである。北東コルの高度は7,200mであるから約700mの高距を岩稜づたいに登らねばならぬ。このルートが日本人にとってこなせるものかどうかを試すのも一つの意味をもつであろう。北東コルに達するには1958年のイタリア隊が使ったルートをとれば良いだろう。(羽根田博正)

〔参考文献〕

Moravec, F., The Austrian Karakoram Expedition, Himal. Jour., 1957.  
 デジオ K2 登頂 朋文堂  
 ディーレンフルト 第3の極地 朋文堂  
 京大学士山岳会 チョゴリザ 朝日新聞社  
 Schmuck, M., Broad Peak, Austria, 1958  
 マライーニ G4 理論社

コンウェイ・サドル

1892年コンウェイを隊長とする4名の探検隊は4月半ばより9月半ばまで西カラコラムからバルトロ氷河上流にいたる広範な探検を行なった。彼らはラカボン、エメラルド・ピーク周辺を探検した後、ヒスパー氷河からピアフォ氷河へ抜けてバルトロ氷河に入った。バルトロ氷河ではバルトロカンリ山群中の一支峯パイ

オニア・ピークに登頂、この行程でバルトロ氷河が上っているコルを発見し、これがバルトロ・コンダス氷河を結びうるものと思ひ、Probable Saddleと命名した。

この後1929年にスポレト公を隊長とし、デジオ教授を含む12名のイタリア遠征隊がバルトロ氷河に入る。彼らはK2の偵察が主目的であったが、デモルド河からノブンディ・ソブンディ氷河へ入ったり、ムズターグ・バスからサルボラッゴ氷河をへてジャクスガム流域を探検したり、又K2を南北両面から偵察した。この間、5月27日にデジオ教授とクルーはコンウェイ・サドルの途中まで登っているが、さらに押し進めて7月9日スポレト公、クルー、ポンティの3名はクーリー6人をつれてコンコルディアを出発、11日サドルのふもとに着いた。翌12日午前4時に出発し、かなり上部の傾斜のゆるくなったあたりからスキーを使用し正午過ぎに峠の頂上に到着した。ここで彼らは南側に見下している氷河がコンダス氷河であることを確認、またサドルについては通過不可能であると報告している。もっともこの観察は少時間のものに終わらしい彼らは翌日引き返している。この報告で彼はこのプロバブル・サドルをコンウェイ・サドルと命名することを提案している。

この後サドルを訪れたものは、1934年のディーレンフルトが指揮する国際遠征隊である。この時にはエルトルとロッシュが6月27日、28日を使ってC5(南ガッシャーブルム氷河の出合、5300m)から当サドルまでルート工作をした。そして29日エルトルとヘクトはクーリー9人を連れて当サドル上にC6(6250m)を設営している。彼らはここを基点としてシア・カンリ全峰とバルトロ・カンリの南東峰に初登頂している。クロッシングに関しては、当サドルから直接コンダス氷河に入るのは可能だが、バルトロ氷河からシアチェン氷河には可能なルートが一つ考えられると報告している。即ちシア・カンリの南面にはアイステラスが広がっていて、そこから氷河が南東方に流れ出しシアチェン氷河の西の源流へと通じている。この氷河の傾斜は適度のものであり、クレバスはかなりあるが、スキーでも通れそうである。彼らはシア・カンリ攻撃の際当サドルに設営したC6から上述のアイステラス上にC7を設営し、そこから登頂に成功している。C7の高度は約6800mである。

次にこの地を訪れたのは1936年ド・セゴニーのひきいるフランス隊である。彼らはヒドン・ピークの登頂を試み、6月19日6800mの高度まで達したが引き返している。この際にアルロー、イジャック、ストリートフィールド(連絡将校)の3名はスキーを使って当サドルまで登ったと報告されているが、それ以上のことは私の読んだ範囲では報告されていない。

バルトロ氷河から当サドルを訪れたものは戦前では上記の4隊であろうと思われるが、やはり戦前1911年から1912年にかけてワークマン夫妻がシアチェン氷河からシア・ラを越えてコンダス氷河へ入っている。この時隊の測量士ピーターキンがシアチェン氷河をシア・カンリへ向かってつめ上り、一つのコルに達している。そのコルからは彼はバルトロ・カンリのスノーリッジ(バルトロ氷河側であろうとワークマンは述べている。)を見ており、また眼下の氷河がコンダス氷河の源頭であることをワークマンの観察も加えて確認したと報告にある。おそらくそのコルはシア・カンリ付近とシア・ラを結ぶ稜線上のものであろう。そのコルのコンダス氷河側は切れ落ちており、これも通過不可能と報告されている。

さて戦後では、1957年シプトンを隊長とするインベリアル・カレッジ遠征隊がシアチェン氷河に入っている。彼らの最初の計画はシアチェン氷河源流からシア・ラをへてコンダス氷河へ、コンウェイ・サドルをへてバルトロ氷河へ、インディラ・コルあるいはトルキスタン・ラをへてウルドック氷河への各クロッシングを骨子として、バルトロ・カンリ試登、テラム・シェール氷河の探検と実に広範囲のものであったが、船荷の遅延、天候の悪化などのため、シアチェン氷河上流での計画を断念、K12氷河へ入ったことと、テラム・シェール氷河の探検のみで終わっている。

次に1960年ヨーロッパの国際隊がコンダス氷河に入り、隊員のエルンスト・センとミッシェル・アンデルは8月13日デバック(7150m)に初登頂している。この山はゲントから北へのびている稜線上に位置するまたセンはシルバー・スローン(6,900m)にも登頂しているが、その期間に彼が描いたスケッチマップは翌年のゲント隊に用いられたようである。

翌1961年ヴァジャックを隊長とするオーストリア遠征隊はコンダス氷河からシア・ラを越えてゲントに初登頂している。昨年我々はクロッシングに関する情報を依頼したが、この方がよくわかるだろうと云って、数枚の写真を提供してくれた。これらの写真はシア・ラ付近からコンウェイ・サドルをのぞむものでワークマンの撮ったものと大差ない。ただこの隊の報告で注目すべきは彼らが作ったスケッチマップである。従来我々が知っていた範囲では、コンウェイ・サドルに直接続いている氷河はコンダス氷河であって、シア・ラから北へのびている岩稜はシア・カンリへ直接、または少しコンウェイ・サドルより接続していると考えられた。ところがゲント隊のスケッチマップでは、コンウェイ・サドルへはシアチェン氷河からアイスフォールが続いており、シア・ラからの岩稜はコンウェイ・サドル自体に続いている。もっともスケッチマップではそう受けとれるが、説明の文ではその箇所はあい

まいである。写真等から判断するとこの部分の報告には誤りがあるのではないかと思う。クロッシングのみならず諸々の点で重要な場所ゆえ明確にしておく必要がある。

また1963年には東大隊がコンウェイ・サドルからバルトロ・カンリ主峯に初登頂しているが、クロッシングの可能性についてはまだ詳しいことはきいてない。他にもコンウェイ・サドルに接近または登ったものがあるかもしれないが、現在私の知る範囲では上記の通りである。

上述した諸隊の報告と写真によってクロッシングの可能性を検討してみた結果は、まずバルトロ氷河とコンダス氷河を当サドルによって直接結ぶのは不可能に近いと考えられる。たとえそうでないとしても大きな危険と困難が予想される。バルトロ氷河とシアチェン氷河を結ぶには前述したようにディーレンフルトが指示しているルートをとるのがもっとも可能性が高いと考えられる。他にもシア・カンリとウルドック・ピークⅡの間へつめあがるという方法も考えられようが、現在の私の知識では想像さえしがたい状態である。いざれにしても、この箇所を通過するには多人数でやっさもっさという方法は不利であろうと思われる。

(安原啓示)

〔参考文献〕

Conway, W. M., Climbing in the Karakoram, Alp. Jour. Vol. 16, 1892.  
 Bonney, T. G., Conway著. "Climbing and Exploration in the Karakoram Himalaya." の紹介, Alp. Jour., Vol. 17.  
 Spoleto, Duke of., The Italian Expedition to the Karakoram in 1929. G. J. Vol. 75  
 Dhyrenfurth, G. O., Baltoro, Ein Himalaya Buch. 1934.  
 Streatfield, N. R., The French Karakoram Expedition, 1936. Himal. Jour., Vol. 9,  
 Workman, F. B., Two Summers in the Ice-wilds of Eastern Karakoram. London, 1917.  
 Shipton, E. E., The Imperial College Karakoram Expedition, 1957. Alp. Jour. Vol. 63.  
 Washak, Erich., The Austrian Karakoram Expedition, 1961. Himal. Jour. Vol. 23.

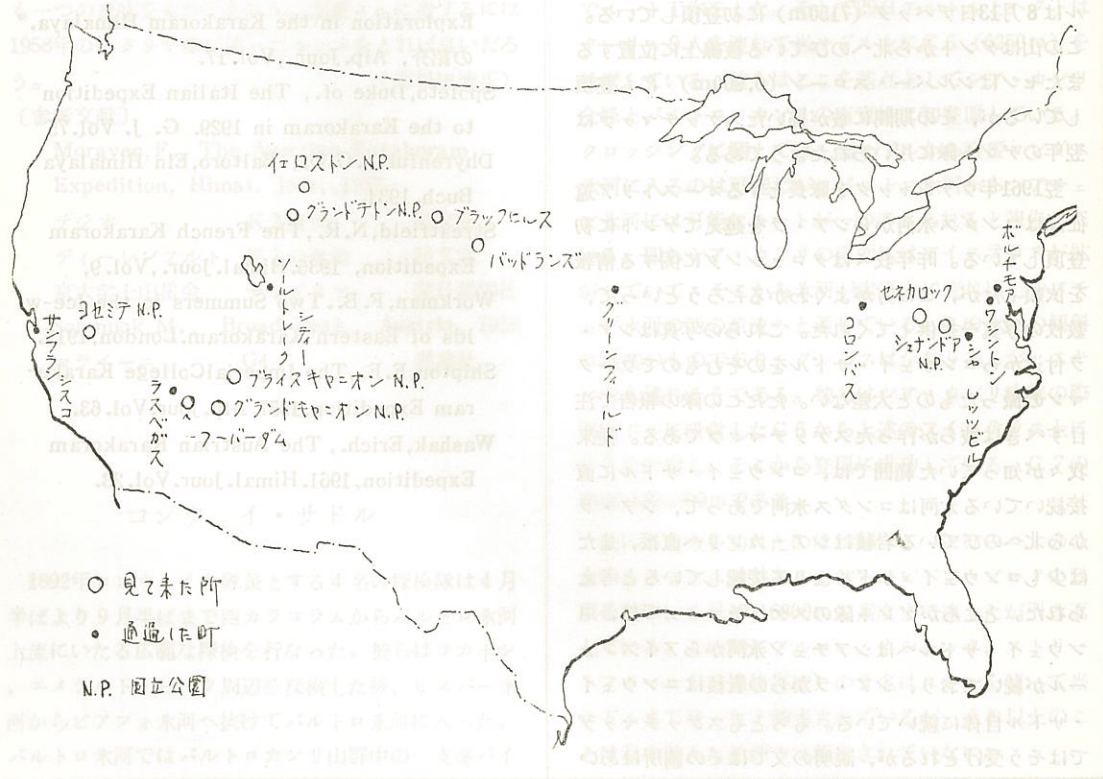
# アメリカ大陸横断自動車旅行

中 島 道 郎

## 1. 出発。Shenandoah 国立公園

バージニア大学における、二年間の留学を終え、帰国するに当って、自動車でサンフランシスコまで出ることを計画した。夏の盛りに、二ヶ月に達したばかりの長男淳を連れて？ということには最後までこだわったが、知っている限りの、横断自動車旅行体験者に尋ね廻ったところ、誰も、二ヶ月の赤ん坊が自動車旅行には一番連れて行き易いんだと答えてくれ、最も親切な一人は、赤ん坊用のカー・ベッドを、お古ながら、譲ってくれたりした。それに、ワイフの妹が、淳の生れる丁度一週間前に日本からやって来てくれて、来て二週間目にはもうこちらの運転免許もとってしまったので、三人交替でハンドルをとることが出来る。ためしに、引上げ荷物の発送を、ボルチモアの運送店に頼むべく、片道約 300キロの小旅行をやってみた。淳は、車が走ってさえおれば、眠ってばかりいて、何の世話もなかった。これで決まった。蒸し暑い、昭和33年8月23日の午後1時、懐しいバージニア州、シャーロットビル市をあとにした。車は57年型フォード。前年 900ドルで買ったもの、まだ立派なものだ。車体の点検も、この二年間に親しくなったある修理工が、特に念を入れてやってくれたばかりだ。

これで走ってさえおればサンフランシスコに着くさなどと軽口きいて、走り始めて30分、どうも車の振動がおかしい。エンジンではなさそうだ。もう一べん出直して、よく見てもらおうと、帰りにかけたところへパンとパンク。タイヤがおかしかったのだ。これから6,000キロもの旅行をしようとしているのに、たった30キロ目で早くもこのさまは、行手を望んでしばし暗胆たる気持。汗をふきふきスベアタイヤととりかえる。再び前進。車はやがて山路へさしかかる。これがシェナンドア国立公園だ。丁度比良山脈のような一本筋の1,000m級の山脈で、アパラチアン山系の一番東側を形作っている。その昔、バージニアの海岸に上陸した最初の移民達が、西へ進んで最初に見出した、地平線の彼方に青く霞んだ山なみ、名づけて「ブルーリッジ・マウンテンズ」(青い山脈)、これが国立公園。山の北端、フロントロイヤルから南へ約160キロ、ウエンスポーロという所までの間、一本のドライブウェイが貫いており、スカイライン・ドライブという名がついているが、この道を中心に、ホテルや、展望台やキャンプ場や、いろんな設備がある。景色は勿論言うまでもない。この道路は、山頂を結んで南下しているが、公園を出ても更に600キロも南下を続け、ノース



カロライナ州とテネシー州にまたがる、グレート・スモーク国立公園へと連なっている。東京から岡山あたりまで、峯から峯へと続くドライブウェイというのを御想像あれ。春は花、秋は紅葉の山頂、所々に、展望台、人工湖、開拓者時代の家や水車小屋、牧場や露岩や、日本庭園のような所もあり、実に変化に富んでいる。このドライブウェイとは別に、平行して、歩道もある。我々が南アルプスあたりに見るような実に自然の香り高い山道である。南はミシシッピ州から北はメイン州に連なる、Aparachian Trailの一部をなしている。自動車道路の発達した現在でも、この山道を歩く人は少くない。別の日、私はテントを担いで歩いているボーイスカウトの団に出会ったことがある。単独行の青年を見たこともある。Trailを全長踏破した人もあるそうだ。稚内から鹿児島に匹敵する道のりだから、閑人もあるものだと思うが、又こんな人達を対象にした新聞も出ていて、このTrailのどの部分がどうなっているてな報告ものせられている。この公園はシャーロットビルから近かったので、私は実に何度も足を運んだ。労せずして山の気分が味わえる。ロッジに夕食だけ食べて登ったことも数度ある。留学先がこんなに自然に恵まれていたことを感謝した。

## 2 Seneka Rock

今日はただ、車はこの青い山脈を横切って前進するのみ。山を越えると、そこは史書にかなしきシェナンドア・バレー。シェナンドアは美しいインディアン酋長の娘の名。南北戦争の古戦場 etc. というわけ。バレーといっても、巾は広い所で30キロもある。更に山を三つ、四つ越えて行くと、ウエストバージニア州に入る。そしてそこに有名なセネカ・ロックがある。昨年さそわれてここに岩登りに行った。そこにはシカゴやワシントンから来たパーティーがあった。ケーブカナベラルの技師が休暇をもらって来ていた。その日はあいにく雨で、岩へは登れず、ケーブ(鐘乳洞)へもぐった。連中はちゃんとプラスチックのヘルメットにアセチレン灯のついたのを、それ用に用意していた。私も彼等から一つ借りて、一緒にもぐった。ザイルを用いて、相当なテクニックを必要とするものである。鐘乳洞めぐりは又大変面白い遊びであることを知った。アメリカ東部諸州は石灰岩質で鐘乳洞が多く、穴もぐり遊びが盛んである。大学にもちゃんと、Caving-Clubなる同好会がある。そういう思い出にひたりながら、車はここも過ぎ、母の日発祥の地として有名なグラフトンの郊外に泊った。

## 3 中西部の大平原

アパラチアン山系を越えて、オハイオ河を渡ると、オハイオ州に入るが、ここから西は行けども行けどもの平原である。オハイオ州、インディアナ州、イリノイ州、アイオワ州と、車は平均時速 120キロでひた走り

道は広く、人家もまばらなので、さ程上等の道路でなくてもスピード感は湧かない。主としてトウモロコシ畑が続く。もっと西へ行って、サウス・ダコタとかワイオミング州に入ると牧場や荒野が多くなる。オハイオ州のコロンバスは、映画「バイバイ・バーディー」のロケのあった所で、町中が花に溢れたようなきれいな市である。土地が広いので、いずれの町もぜいたくな土地の使い方をしている。オハイオ州の、グリーン・フィールドという小さな町に知人があったので訪ねたが、農村でありながら、家々には広い芝生があり、エルの植樹が美事で、町ごと森に埋められたようだ。こういった所の農家は、一軒で10キロ四方の耕地を持っているそうで、桁違いの豊かさというものを肌で感じられる。

満州や蒙古の広さというものを私は知らないのだがサウス・ダコタ州やワイオミング州の平原の感じは丁度それではないかと感じられる。パキスタンの平原の感じとは大分異っている。土地に起伏があり、上ったり下ったりしながら、道は真直ぐ西へ走っている。地平線の彼方を黒雲が湧いたとみるや、車は既にその雲の真下につっこみ、土砂降りの中を走っているうちに地平線の彼方に青空が見えて来、いつしか、振り返っても黒雲は後方遙かに没し去っている。これで思ったのは、見はるかす地平線の彼方、なんて云っても実は随分と近いもんだなということであった。

## 4 Badlands と Black Hills

サウス・ダコタで見るべきものの一つはこのバッドランズである。これは平原の一方だけが地殻変動で持ち上ったため、その境目が大きな断層となり、急激な浸蝕のために、目もくらむような崖を形成した所である。崖には地層が露呈し、色や層の構成に変化があり、いろんな層から、珍しい古生物の化石が発見されるという。地質学的にも、古生物学的にも大変意義があるというので、巾6キロ、長さ60キロにわたってそっくり天然記念物となっている。何を食べて生きているのか、草も生えない裸の崖に、シマリスが沢山いて南京豆をさし出すと、人の手からそれを取って巣へ運んで行く。まさか観光客に乞食しているのでもあるまいに、大変可憐である。

更に 100キロ程進むと、ブラックヒルズというリゾート・エリアがある。中心はラッシュモア山といって、花崗岩の露岩に、ワシントン、ジェファソン、リンカーン、ルーズベルトの四人の大統領の顔が彫ってある。顔の大きさはざっと20m位。ダイナマイトのみで14年かかって彫り上げた。この像を正面に望む所まで自動車で登れるが、引返して、国道を更に前進すると道は林を縫っての快適なドライブウェイとなり、岩をくりぬいたトンネルの、丁度真正面の彼方に、この像がくっきりと見えるようになっていたりして、この道

の設計は心憎いばかりである。山を越えると、高原となり、カスター州立公園と呼ばれ、バイソン（野牛）の保護地となっている。約30匹位の群が草を食んでいるのが見える。車を停めて200ミリ望遠レンズでカメラにおさめた。

### 5 Yellowstone 国立公園

山を降りるとワイオミング州に入る。地図には茶色に塗られ、山また山の州に見られるけれども、実際は大部分は平原である。この州は人口僅かに33万、面積は日本の6割。何にも利用されていない土地が続く。標高は高いので、知らない間に海拔4000mの峠にさしかかっていた。車はアクセル一杯踏みこんでも加速せず、氣息エンエンとして進むので、こんな山中で車が故障したのかと、びっくりさせられたが、あとでこれが高度影響だとわかり、ホッとした。これがこの旅行中の最高点であった。

イエロストーン国立公園には、コデイという町から、ジョンソン河に沿って入る道をとった。奇岩怪石がそそり立つ峡谷を通りぬけると、急に人工湖、バッファロービル湖がひらけ、もうこのあたりから嬉しくなってくる。いよいよ公園に入る。それまでは草原であったのに、山にさしかかると急に松や楓が生い繁り、岩清水が道傍を流れるようになる。公園に入って、峠を一つ越えると、目の前にイエロストーン湖がひらけてくる。ハイウエーの真中を、ノッソ、ノッソと黒熊が歩いてくる。車を停めると、かけ寄って来て、窓に手をかける。窓を開けると、首をつっこんで来た。キャラメルをやると、喜んでむしゃぶりついて来た。後でパンフレットを読んだら、危険だから熊に物をやるとはいけない。熊は窓を閉めたまま見物すること、と書いてあった。知らぬが仏、冒険をしたもんだ。この公園は東西南北、およそ100キロ四方、面積にして兵庫県位に匹敵するが、その中に、公園従業員の家族村が一つあるだけで、あとは全く原始の姿のままに保存されている。そして、黒熊（日本と同じく月の輪が胸にある）、ムース鹿、エルク鹿、ミュール鹿、コヨーテ、バイソン等の大きな動物が野生している。ハイウエーに沿って、これらを車の中から眺めることが出来る。さながら自然動物園である。公園の最大の呼び物は、高さ100mにも垂んとする巨大な間歇泉群をはじめ、総数3,000にも及ぶ温泉の群である。1959年の大地震以来、これらの活動が又盛んになったようだ。私が見ているときに、一日一度吹き上げる、オールド・フェイスフル間歇泉の吹き上げに出遭った。何とも見事なものだ。70m位は上ったであろうか。3,000の温泉の中には、ドラゴンズマウス（竜の口）と呼ばれる、咆哮あげて湧き立っている湯の口を見ているものや、別府の坊主地獄そっくりのや、モーニング・グ

ローリー（朝顔）という名の、まっ青に透明な、朝顔型をした湧きのものや、ミナーバ・テレスと呼ばれるのは、湯の花が段々の壇をなしたもので、何とも美事なものであるが、ま、この様に千変万化の像を示している。しかも、この湯はことごとく流れ去るにまかされて、人は完全にこれを利用しようとしていない。徹底した自然保存である。温泉の他にも、この広大な公園の中には、峡谷あり、瀑布あり、高層湿原あり、大小様々な湖あり、なかなか面白い。足許に乱れ咲く、イエロストーン・リンドウの美しさも忘れ難いものであった。数日をここで過したいところであったが、先を急ぐ旅にしあれば如何せん、涙をのんで、次なるグランド・テトンに向かった。

### 6 Grand Teton 国立公園

山に詳しいAACKの皆さんの中でも、グランドテントの名を御存じの方は少いだろう。しかし、映画シェーンや、スペンサーの山の舞台といえは思い出される方が多いと思う。イエロストーンに続くすぐ南の山々だが、イエロストーンが女性的なのに対して、これは男性的な岩山である。穂高や剣級の威容を以って、ジャクソン湖の上に君臨する姿は見事である。4,600mのグランドテトンを盟主に、ティウィノット、モラン、セントジョン、ビバーク・ピーク、イーグル・レスト・ピークなど、いずれも4,000級の山々が、一つ一つ独立して、鋸の歯の様に立ち並んでいる様は壯観というよりほかはない。それをただ、車の窓から見上げて通り過ぎるだけという、この旅行の情なさ。どんな山でも、それが単に行きずりの見物にしかすぎぬ場合は、何とも空虚なものである。若し一人でポカラへ行って、アンナプルナを見上げたとなると、丁度こんな具合のものかも知れない。

山群の麓の、ジャクソン・ホールという平原に立って、シェーンと呼ばれた渡り鳥が一人馬に乗ってここを歩いていったか……と想像を巡らせて、一寸感傷にひたるだけで、ここはもう終り。山を二つ越えて、ソールト・レイク・シティに出た。モルモン教の本山のある有名な町。山と湖の間であって、美しい。この山なみは断層形成であることは、断層三角面という地形で察せられる。この断層で出来た谷を一路南下する。

### 7 Bryce Canyon 国立公園

又、そんな名の公園は聞いたことないぞとおっしゃる人も多いであろう。映画、荒野の三軍曹（よう西部劇見とるなあ）の舞台になった、赤い砂岩の柱の並び立っている谷である。少々寄道ではあったが、好奇心を出して行って見た。教訓、およそ国立公園と名づけられたる所、夢見ずべからず。大変珍しい景色であった。日中は黄色いが、朝、夕はこれが真赤に映えるとか、この一日の色の変化が見物だという。又、この奇岩群を巡る小径があり、楽しさはその径にあるとも

云われているが、何としても、時間のないのがうらめしかった。

### 8 Grand Canyon 国立公園

アメリカにあって、ほかにない景色の最たるものはこのグランドキャニオンであろう。コロラド河が、ここで東から西へ流れ、約1,600mもの深さの谷を形作っている。従ってこの峡谷は北岸と南岸の両方から眺められる。兩岸の距離はおよそ16キロ、比叡山と愛宕山位だ。先づ北岸に行ってみた。こちら側には緑が多い。エンゼルポイント展望台に行ってみると、もう9月なので、ホテルは店仕舞いしていた。北岸は南岸より少し（300m位）高く、足許からストンと崖が落ちこんでいるのですさまじく、思わず足がすくむように感じる。南岸にはこんな感じはない。

北岸から南岸に行くには、一旦谷に下って、向う岸に登るという手がある。ロバに乗って二日かかり、一人35ドルを要する。一寸高価だ。自動車で行くとすれば、約500キロの大迂廻を要する。ざっと、東京—京都間か。一生懸命飛ばして約6時間。途中、インディアン部落を通った。ナバジョー—インディアンという部族である。水もなさそうな、砂漠の谷合いに、土の家を建てて住んでいる。家は土造りだが、その陰にフォードのトラックがあるところがアメリカだ。しかし中には文明をかたくなに拒絶し、全く原始のままに暮らしている連中もあると聞く。

南岸は北と打って違って緑も少く、ものすごく賑やかだ。ホテルは一杯の人で泊めてもらえず、キャフェテリアでは行列だ。公園事務所に行って、やっと、寝台だけの粗末なキャビンに泊めてもらった。シャワーも、便所も、別棟で共同だ。しかし、日本の共同便所に載べたらお話にならぬ位美しい。ホテルのすぐ下に駐車場があり、汽笛を鳴らし、日本の観光地そのもののやかましさを。南岸からの眺めは、北よりもひらけていて、パノラミックである。たいいてい旅行者は南岸をみただけで帰って行く。しかし私は、北岸のあの静寂をこの上なく好ましいと思う。まるで感じが違うのだ。若し時間があるならば、北岸に数日を過ごし、ロバの背にゆられて、谷底まで下りて行ってみたいものだ、と念じたことである。

グランドキャニオンを辞して、西へ走ってフーパー・ダムを渡る。このあたりは暑い暑い砂漠である。行き違う車の多くは、布袋に水を入れて、それを車の真前にぶら下げて走っている。ラジエーター冷却水の予備である。フーパー・ダムは、コロラド河を堰止めたもので、出来た人工湖はミード湖と呼ばれる。湖は国立レクリエーション地域に指定されており、従って、このダムは内務省レクリエーション局の管轄下にある。しかしダムそのものは発電、灌漑などの産業的な用途に用いられるものであり、なかなか面白いことになっ

ている。ダムは世界一大きいのだそうである。ラスベガスはこの近くにある。オアシスの町だ。“フラワードラムソング”というミュージカルをやっているホテルに泊った。ロミ山田という日本人歌手がいい役で出ていた。パチンコみたいな機械で、5セントづつ入れてやっているうちに、とうとう4ドルすってしまふ。ギャンブルは性に合わない。ルーレットやトランプで数百ドルのやりとりを見ているだけでも、気分が悪くなってくる。そのくせ結局この夜は二時まで遊んだ。

### 9 Yosemite 国立公園。終着

ラスベガスから北西に進路をとり、原爆実験場の横を通って行く。砂漠だ。道路以外には何も無い。砂漠の植物がポツンポツンと辛うじて生きているといった感じ。細い道を通って山を越え、カリフォルニア州に入る。この道、アメリカ中で最悪であった。舗装もなく、曲りくねって、日本の道路と一緒。そしてオーエンス・バレーに入る。これはキングス・キャニオン国立公園の裏手なのだが、これには、こちら側から登れない。北上してモノ湖に出た。ロマンチックな湖である。

モノ湖からヨセミテへの山道をとる。これは夏期だけ通行可能である。これもアメリカらしくない狭い道で、すれ違いのたびに、一方は停車せねばならず、何度も肝を冷やした。海拔3,300mのチョガ・パスを越えるといよいよ公園に入る。峠の左手に聳えるのが、4,300mのダンナ山（Mt. Dana）。車は東へ進むにつれて、氷河にけずられて出来た、丸い背の岩山（ドーム）を巡りながら、湖や湿原や谷を渡って、次第に高度を下げて行く。公園の中心は、ヨセミテ・ヴァレジで、U字谷の底にあり、マーセッド川が流れている。谷の両側には、エルカピタンとか、センチネル・ロック、カソードラル・ロックなどの垂直の壁が、約1,500mの高さに聳え、その奥にはハーフドームと呼ばれる、球を真二つに切ったような岩峯がひかえている。見上げる岩壁に牛の小便みたいな滝がかかっている。名前を尋ねたら、レンジャー君、苦笑しながら、あれがナイアガラの九倍の高さを誇るヨセミテ瀑布だと答えてくれた。今渇水期で水が無いのだそうだ。センチネル・ロックの頂上は、グレーシャー・ポイントと呼ばれる展望台で、ここまで自動車で登られる。岩は殆ど垂直な壁で、その一部に登路もあるそうだが、女子供連れはまずは無難なルートを。頂上は海拔3,000mそこそこだが、ここからヨセミテ公園の殆ど全域が望まれる。公園は滋賀県位の広さだが、さながら氷河地形の模型である。ここではじめて私はアメリカで山らしい山の頂上に立ったと感じた。それも自動車でお恥かしい話である。一目散に山を下って、翌日サンフランシスコに着いた時には、正直、クタクタであった。今になっても、当分また旅行したいとは思わない。

繊維の高所劣化に関する報告

安田 武・平井正一

1 はじめに

1953年のAAACK アンナプルナ隊がテントを破られた苦い経験から、われわれはヒマラヤで使用するテントやロープなど登山装備の材料である化学繊維の、高所における劣化については以前から深い関心をもち研究をすすめてきた。

1953年のチョゴリザ遠征にあたっては、アンナプルナのものより2~4倍程度の強度をもつテント地を試作し、高所での劣化がどの程度かを遠征前後の同一試料について測定した。その結果、とうてい低地では信じられないくらい大きな劣化が起ることが明らかになり、各関係方面に異常な反響をよんだ。わずか1ヶ月半の日数で、テント地の引裂強度が50%も減っているということは、高所における紫外線の量の異常な大きさを物語るものであり、このような場所で長期間の曝露テストができるのは、ヒマラヤをおいてほかに見当らぬ。AAACKのヒマラヤ遠征隊の装備係はこの命題にとりくむことを、うれしい義務だと考えている。

それはこの問題が、今後のヒマラヤ遠征のみならず高々度飛行や、宇宙旅行の材料に有機高分子材料が使用される場合に、重要な課題となる可能性があるからである。ロケットや気球による高々度の研究は、短時間の観測可能な現象について極めて適当な手段であるが、長時間の曝露の影響をしらべる事は困難である。高山医学が航空医学を経て宇宙医学に発展したようにヒマラヤにおける繊維の研究が、今後の宇宙探検に貴重な資料を提供するのではないだろうか。

しかし、この問題は、世界でもAAACKしか研究していない非常にユニークなものである。今後も発展させてゆきたいと考えている。

2 測定結果

持ち帰ったテント生地と、使用していないテント生地について、引張強度、伸度、引裂強度、通気度の各々について測定した結果を第1表に示す。引裂強度の異常劣化が注意される。しかしこれらのデータは、テントが晴天換算日数にして何日間曝露されていたかのデータと比較研究しなければならない。これは第3表に示してある。

今回の試みとして、各種繊維の短冊型の小片を縫い合わせた吹き流しとフライシートを作った。これは各繊維を同一条件で曝露するために作ったもので、その測定結果を第2表に示す。

第4表はザイルの強伸度である。ヒマラヤで使ったザイルを日本の岩場で使用することはもってのほかということがわかると思う。

第4表 登山用ロープの強伸度

Nylon 6-210d/57×4×8 φ11mmコード

テスト	引張強度, 乾, kg	伸 度
使用前	1196	104%
使用后	633	74%
残留値%	57	71%

註) 使用日数 約30日, 1日平均6時間使用  
これらの測定結果をみると、比較的短時間の曝露によっていちぢるしい劣化がみとめられる。

今回の遠征に際しては、自記積算紫外線計等の機器を持参したが、機器が不調のため測定できなかったことは残念である。しかしチョゴリザのときの結果と併せて、さらに詳細な考察を行って、ヒマラヤの高所における劣化に関する一応の結論を得たいと考えている。なお、本報告の測定に使用した同一太さの糸を用いた同一規格の織物は、東洋紡績KK, 紡織技術研究所の好意によるものであり、またテント生地の試作にあたっては、鐘紡総合研究所, テイジンKK, 倉敷レーヨンKKの協力を得た。さらに物理試験については、日本化学検査協会中央検査所の援助を得た。以上の御好意、御援助に対し厚く御礼申しあげる。

文献 1) 安田; ヒマラヤ高山中における合成繊維の異常劣化について, 織学誌, 17,702, '61

サルトロ・カンリ遠征で撮影した心電図に関する報告

齊藤 惇生

われわれのチョゴリザ, ノジャック, そして今度のサルトロ・カンリ遠征で、いつも何人かに起った高所浮腫についての報告や記述は、まだ他には現われていないようである。それで、この高所浮腫という言葉自体も適当かどうか分らないのだが、一応こう呼んでも差支えないと思う。

北海道大学のチャムラン, 東京大学のバルトロ・カンリの遠征隊の人の経験を聞くと、やはり高所で浮腫が発生した隊員があるとのことである。その他の日本隊のことは知らないが、恐らく発生したのではないかと考えられる。

全身的な浮腫は、心不全, 腎不全, 肝硬変, 脚気, 栄養失調などに起るのが普通である。このように全身的な浮腫が発生するときは、原因がなにであるにしろ身体に重大な病氣, 欠陥があるときである。これまでの遠征で、危険な事態になったことは、さいわいないが一步間違えば重大なことになる症状なのである。この

第1表 テント生地の強伸度と通気度

テント No.	生地	組 織		重量 g/cm <sup>2</sup>	テスト	引張強度 乾, 縦, kg	伸 度 乾, 縦, %	引裂強度 乾, 縦, kg	通 気 度 cc/cm <sup>2</sup> *s
		縦	横						
33	テトロンツイル 2/2	テトロン 150d 200T/ms 103本/in	同 左 105本/in	149	使用前	131.8	26.0	20.6	3.5
					使用后	96.1	14.6	4.10	2.7
					残留値%	72.9	56.2	19.9	77.1
31	同 上	同 上	同 上	同 上	前	131.8	26.0	20.6	3.5
					後	87.7	13.9	4.88	3.2
					%	65.5	53.5	23.8	91.5
34	テトロンツイル 2/1	テトロン 100d 82本/cm	テトロン 150d 33本/cm	135	前	127.3	31.9	24.6	28.7
					後	99.0	21.4	8.84	26.4
					%	77.8	67.1	35.9	92.0
303	テトロン T3500	テトロン 100d 103本/in	テトロン 125d ハイテナンティ 80本/in	122	前	106.5	32.4	12.8	4.4
					後	72.5	19.9	4.11	1.6
					%	68.0	61.5	32.1	36.3
341	ビニロン 長繊維ツイル 3/2	ビニロン 70d 280T/m 118本/in	同 左 102本/in	145	前	150.8	22.3	16.0	17.3
					後	123.0	25.0	10.33	16.4
					%	81.7	112.1	64.6	94.8
45	同 上	同 上	同 上	同 上	前	150.8	22.3	16.0	17.3
					後	105.8	23.5	8.37	16.0
					%	70.2	105.4	52.3	92.5
62	ビニロンポプリン #8100	ビニロン 60双 124本/in	同 左 78本/in	177	前	98.0	30.6	14.9	0.8
					後	69.7	32.0	8.89	0.7
					%	71.2	104.5	59.6	87.5
15	エクスラン ポプリン	エクスラン 60双 103本/in	同 左 78本/in	153	前	67.8	26.5	6.9	12.0
					後	58.8	25.8	6.23	10.4
					%	86.7	97.3	90.4	86.6
63	同 上	同 上	同 上	同 上	前	67.8	26.5	6.9	12.2
					後	64.3	26.4	6.72	13.9
					%	95.0	99.6	97.4	115.8

註) テトロンツイルの引裂強度の劣化がいちぢるしいが、この原因については繊維の特性の他に、1959年の暮れに生地を試織してのち、実際に使用したのは3年後であり、その間の経年変化、また染料の関係も考慮する必要がある。

第2表 吹流しとフライシートの強伸度と通気度

種類	生地	テスト	引張強力	伸度	引裂強力	通気度
			乾, kg	縦, kg	乾, kg	cc/cm <sup>2</sup> ・s
吹流し	ウール	使用前	25.9	43.9	6.30	45.1
		使用后	21.3	27.2	4.44	46.5
		残留値	82.3	62.0	70.5	103.2
	テトロン	前	84.5	46.5	17.00	51.3
		後	59.8	33.0	12.00	67.1
		%	70.9	81.8	70.6	130.5
	ビニロン	前	77.2	27.6	8.42	63.4
		後	66.7	34.9	8.59	40.3
		%	86.5	126.5	102.0	63.8
	エクスラン	前	65.5	47.4	13.89	45.7
		後	61.3	45.2	11.31	42.9
		%	93.5	96.0	81.6	93.7
ポリプロピレン	前	71.5	33.1	12.16	79.9	
	後	56.5	31.7	7.81	81.5	
	%	79.0	83.0	64.2	102.0	
シート	ウール	前	25.9	43.9	6.30	45.1
		後	20.0	26.7	3.63	53.6
		%	77.2	60.8	57.6	111.9
	テトロン	前	84.5	46.5	17.00	51.3
		後	52.2	35.1	8.36	72.6
		%	61.6	75.5	49.2	141.0
	ビニロン	前	77.2	27.6	8.42	63.4
		後	48.2	29.4	5.73	34.9
		%	62.5	106.0	68.0	55.0
	エクスラン	前	65.5	47.4	13.89	45.7
		後	49.2	33.9	10.34	47.7
		%	75.0	77.9	74.5	104.0
ポリプロピレン	前	71.5	33.1	12.16	79.9	
	後	47.2	26.9	4.10	95.5	
	%	66.0	70.5	33.7	119.5	

註) 各生地は同じ太さの紡績糸を使用した同一規格の布である。

試験方法 (第1表, 第2表とも)

引張強力 JIS L1005-1959  
 伸度 JIS L1005-1959  
 引裂強力 インストロン引張試験機を使用, CCC-T-1916 5136法  
 通気度 JIS L1005-1959 5.20ブラジール型法

第3表 テント使用中の高度, 天候

テント No.	場所 (高度m)	日数				晴天換算日数(日)	備考
		晴	曇	曇のち雪	雪		
33	Siachen Camp (4800)	3	1	1		15.8	ポータ用
	C2 (5500)	4		1	4		
	C3 (6000)	4	2		2		
31	A. B. C. (5000)	3		1		16.7	
	C2 (5500)	6		3	4		
	C3 (6000)		2	2	1		
	C4 (6400)	2					
34	Siachen Camp (4800)	3	1	1		15.2	( ) はフライシート付この日数は考慮しない
	A. B. C. (5000)	(11)					
	C3 (6000)	7	2		3		
303	A. B. C. (5000)	5	1			22.2	ポータ用
	C2 (5500)	12	2	2	7		
341	C1 (5200)	6	2			24.05	ポータ用
	C2 (5500)	12		4	7		
45	C1 (5200)	19	5	2	6	24.5	
62	Saling (3000)	6	3			48.6	Saling~B.C. 間 (キャラバン中) は1日の日照時間を12時間として、のべて計算した
	Saling~B.C	6	1				
	B.C. (4800)	5	1	4			
	A. B. C. (5000)	22	5		7		
15	Saling~B.C. (4800)	6	1			13.3	
	B.C.	5		4			
63	Skardu (2500)	6	3			11.5	Saling~B.C. 間はカラコラム・クラブが使用したので日数は推定である
	Saling~B.C.	2					
	B.C.~Saling	2					
吹流し	B.C. (4800)	3		3		27.65	
	A. B. C. (5000)	18	5		7		
試験用フライシート	B.C. (4800)	3		4		28.1	
	A. B. C. (5000)	18	5		7		

註) 晴天換算日数は次のように計算した。いま晴天を 100とした場合の曇天の際の紫外線の透過量の%は、下に示す通りである。この表にもとづいてわれわれの場合平均して晴天に対し曇の日を50%, 曇のち雪の日を45, 雪の日を雪による吸収を考慮して40%とした。これらを使って晴天換算日数を算出した。ただし高度の影響は無視した。

雲量	0/10	2/10	4/10	6/10	8/10	10/10
紫外線透過率	100	90	75	65	55	45

(Compendium of Meteorology, American Meteorological Society, 1951. p.1119による)

原因は追究され、明らかにされるべきである。

サルトロ・カンリでは高所浮腫の発生原因を研究する手始めとして、心電計を持って行き、高度の影響で心電図にどんな変化が起るか調べてみた。

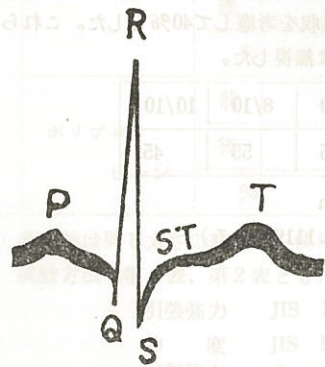
対策としては、バランスのとれた完全な栄養摂取、特に今まであまり問題にされなかった必須脂酸(E.F.A.)の摂取を考え、食糧を準備した。これはかなりの効果があったと思う。この点については、報告書「サルトロ・カンリ」の食糧の項目で若干意見を述べておいた。

経験的に見ると、高度順応(ACCLIMATISATION)がスムーズに獲得されて、順応以上の労働をしないときは、浮腫は発生しないようである。この高度順応については、これまでもヒマラヤ登山者や高所住民などを対象として、臨牀的、実験的研究がされており、又人工的実験室を使う研究もある。そして血液、循環器系、呼吸器系などの生理学的、病理学的変化について、既に古典的な知見が得られている。

心電図の高度による変化の研究も、高所住民(アンデスのモロコチャ、4,540mなど)で行なわれている。一般に心電図に現われる高度影響の所見は肺性心(CORPULMONALE)とされている。

註 肺性心:急性と慢性があるが、この場合は慢性をさす。肺循環の抵抗が増す疾患に見られ、心臓の右室の負荷が増大する。肺気腫、気管支喘息、珪肺などの肺疾患に起る。心電図では、右室負荷増大の所見を示す。即ち、右位型、右室肥大型を示し、肺性P(Ⅱ、Ⅲ誘導のPが増高する。)をみることが多い。

註 心電図:生体の組織器官が興奮、活動するといわゆる電気を発生する。電位差、即ち起電力(ACTION POTENTIAL)が生ずる。心臓も各搏動ごとに起電力を生じ、それにより身体内に電流が流れ、電位の分布が発生する。この電位変化を身体表面の2点間の電位差として、或いは近似的方法により身体表面の1点の電位変化として、時間的に追求めて、オシログラフを用いて撮影したもの。



心電図の基本型は第1図のようである。心臓の興奮は静脈洞→心房→房室結節→心室と伝わる。

Pは心房の興奮過程  
Q.R.S.は心室の興奮過程 } の表現とされている。  
Tは興奮よりさめる過程

心電計はフクダのトランジスター直記式の器械を貸して貰い、電源はガンソリン発電機を使用した。この発電機は報告書にも述べたように3,200mのゴマでは調子良く動いたが、5,000mのアドヴァンス・ベース・キャンプ(A.B.C.)では発火せず苦勞した。酸素を吸気孔に吸わせてやっと動いた。心電計は小型軽量で非常に調子良く故障しなかった。

心電図は出発前京都で、それに山では、ゴマ村(3,200m)A.B.C.(5,000m)で撮影した。

Ⅰ) 出発前の心電図について

1) 9例(四手井, 加藤, 林, 齊藤, 平井, 谷, 岩坪, 高村, 上尾)について著明な異常は認めない。

2) 軽度の異常が認められるもの。

谷, P~Q間隔延長(0.28秒)。

岩坪, Q.R.S.高電位(RⅢ2.8mV)。

その他, 林, 高村がP~Qが0.2秒(正常値は0.12秒~0.2秒)。

3) 運動負荷試験は全例陰性である。

4) 垂直位を認める。

Ⅱ) 高所の心電図について

a) 3,300mの心電図

1) 既に軽度の変化が認められる。(上尾, 岩坪, 高村, 四手井)

2) A.B.C.におけると同傾向の変化が認められる例がある。

b) 5,000mの心電図

1) 3,300mに較べて変化は明らかである。

2) 病的といえる程度の変化には到っていない。

3) 撮影した6例(林, 谷, 上尾, 岩坪, 高村, 平井)全部に肺性心の傾向を認める。即ち、時計針方向の心臓の回転, Tの低下, 逆転をV<sub>1</sub>~V<sub>4</sub>誘導で認めQRSの増高がある。

4) P Q間隔の短縮, 特に延長の消失を認める。

Ⅲ) 心電図において高度順応が不十分と考えられる(MISACCLIMATISATION)例の考察, 第2図, 平井例, 第3図, 上尾例,

1) 平井例(5,000mにおいて)

P:殆ど変化なし。

Q:殆ど変化なし。

R: aV<sub>R</sub>とV<sub>1</sub>, V<sub>5</sub>で軽度の増高。

S: Ⅱ, Ⅲ, aV<sub>F</sub>, V<sub>2</sub>~V<sub>5</sub>で明らかに増。

T: 殆ど変化なし。

T: V<sub>1</sub>~V<sub>4</sub>で低下もしくは逆転。

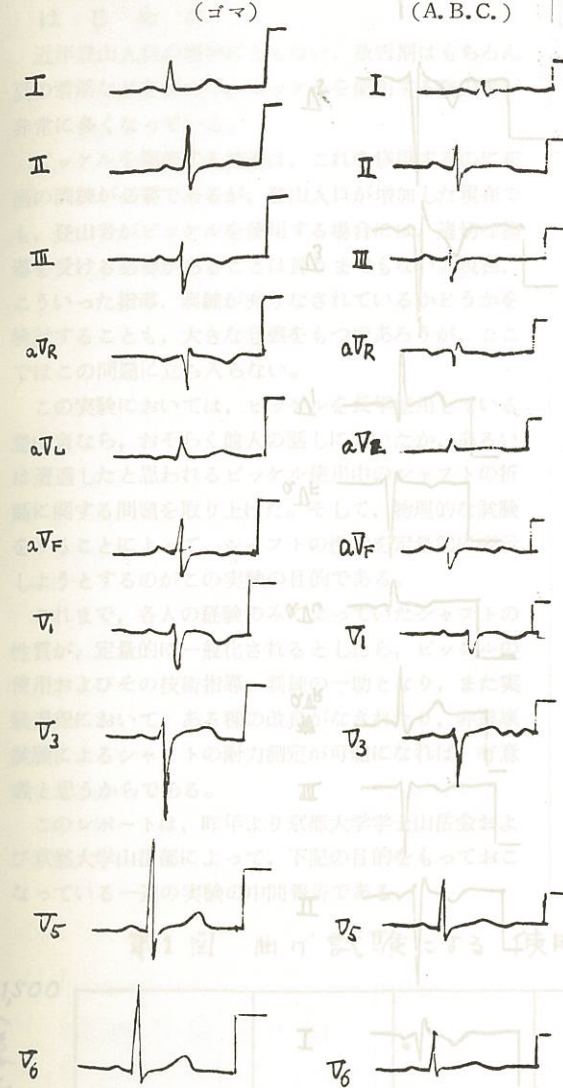
U: V<sub>1</sub>~V<sub>4</sub>で明らかになっている。

即ち、時計針方向の回転と、T低下、などが特徴である。

2) 上尾例(5,000mにおいて)

肺性心の傾向を認める。しかし、右室肥大とは明らかにいえない。

Ⅳ) 平井例の考察



平井は、今度の遠征ではっきりと高所浮腫を起した唯一例である。ピラフォン峠越えの偵察後、顔が腫れ、尿量が一日に200ccにも減少した。ゴマの心電図は浮腫の発生前、A.B.C.のは浮腫が発生して回復した後の心電図になる。浮腫が発生している時に撮影したら、又違った変化が見られたと思うのだが、峠越え前のベース・キャンプでは、発電機を調整し、動かすことのできる状態ではなかった。

彼の浮腫回復後、峠越えの輸送に活躍してから心電図を前述の分析に基いて考えてみると、

1) 右室負担の増大は認められる。

2) しかし、これは全例に同様の傾向が認められ、

それに較べて特に著明な変化とは云いにくい。

3) 又、一般的にもこの程度のE.K.G.所見をもって、右室不全と断定できない。

だから、これだけからは、彼の浮腫が、心臓が原因とはいえない。浮腫の原因をはっきりさせる手がかりを掴むためには、浮腫発生時の臨床症状をE.K.G.だけでなく、もっとくわしく、正確にとらえる必要があるようだ。

Ⅴ) ハイ・ポーターの心電図について

彼等はわれわれよりは高所に住むというものゝたいした高度ではない。彼等のゴマ村で撮影した心電図では、特に著明な傾向は認められない。ただ、RaV<sub>R</sub>が若干高く、SISISⅢの著明な例が半数程度認められた。

Ⅵ) 結論

京都、ゴマ、A.B.C.と撮影した、心電図から結論としては以下のことがいえるだろう。

1) スポーツ心臓の特徴を示す例があった。

2) 最初から肺性心の傾向が疑われる例がある(上尾, 岩坪)。

3) 5,000mにおいては、全員に肺性心、乃至は右室負荷増大の傾向を認めるが、はっきりしたパターンを示すまでには到っていない。

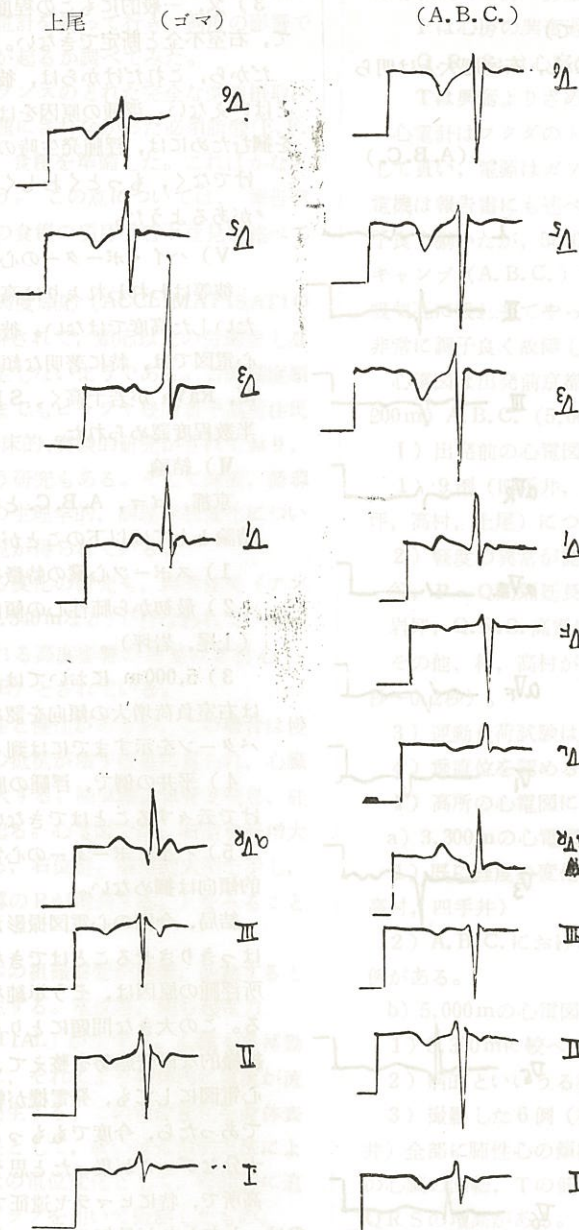
4) 平井の例で、浮腫の原因をE.K.G.からだけで云々することはできない。

5) ハイ・ポーターの心電図より、彼等の特徴的傾向は掴めない。

結局、今回の心電図撮影だけから浮腫の原因をはっきりさせることはできないことが分った。高所浮腫の原因は、そう単純なものではないのである。この大きな問題にとりくむためには、もっと組織的な研究態勢を整えて、出かける必要がある。心電図にしても、発電機が軽量で性能のよいものであったら、今度でもっと気軽に撮影できて、十分なデータが集ったと思う。ただ、5,000mの高所で、特にヒマラヤ遠征で、心電図を撮影したのは、われわれが最初のものである。これを、いとぐちとして、高所浮腫の解明に今後努力を重ねてゆきたい。終りに心電図の分析をしていただいた、南病院の森孝雄博士(京大内科第三講座)に心からお礼を申しあげたい。

参考データとして、出発前京都で測定した隊員の肺活量は下のとおりである。

四手井綱彦	3,300cc	谷 泰	4,600cc
加藤 泰安	4,800cc	岩坪 五郎	3,600cc
林 一彦	4,100cc	上尾庄一郎	4,700cc
平井 一正	3,300cc	齊藤 惇生	3,800cc
高村 泰雄	4,700cc		



### ピッケルシャフトの材料力学的 強度に関する実験および考察 その1

富田 幸次郎・西山 孝

はじめに  
近年登山人口の増加にともない、積雪期はもちろん夏の雪渓などを含めて、ピッケルを使用する登山者が非常に多くなっている。

ピッケルを駆使用する技術は、これを修得するのに相当の訓練が必要であるが、登山人口が増加した現在でも、登山者がピッケルを使用する場合には、適切な指導を受ける必要があることは言うまでもない。現在、こういった指導、訓練が充分なされているかどうかを検討することも、大きな意義をもつであろうが、ここではこの問題に立ち入らない。

この実験においては、ピッケルを長年使用している登山者なら、おそらく他人の話しに聞いたか、あるいは遭遇したと思われるピッケル使用中のシャフトの折断に関する問題を取り上げた。そして、物理的な試験をすることによって、シャフトの性状を定量的に表示しようとするのがこの実験の目的である。

これまで、各人の経験のみによっていたシャフトの性質が、定量的に一般化されるとしたら、ピッケルの使用およびその技術指導、訓練の一助となり、また実験過程において、ある種の改良がなされたり、非破壊試験によるシャフトの耐力測定が可能になれば、有意義と思うからである。

このレポートは、昨年より京都大学学士山岳会および京都大学山岳部によって、下記の目的をもっておこなっている一連の実験の中間報告である。

1. ピッケルのシャフトの平均強度について。
2. ピッケルのシャフトの使用年数と耐力低下について。
3. ピッケルのシャフトの非破壊試験による耐力測定方法について。
4. ピッケルのシャフトの改良について。

#### 試験概要

##### 1 供試体

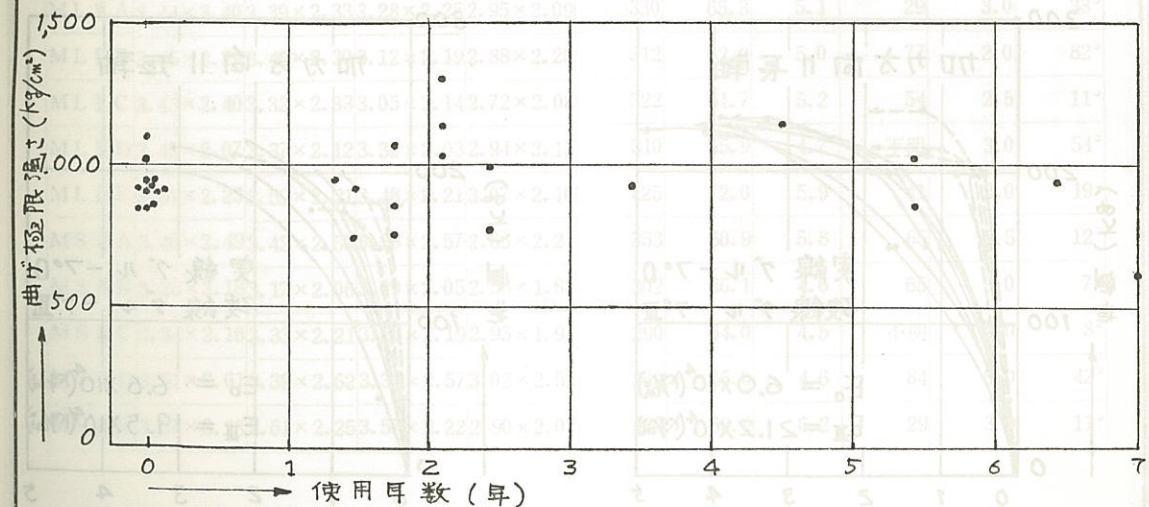
現在市販されているピッケル（主に国産、小数の外国産）のシャフトをフィンガー部分から切断して実物試験を行なった。材種は、いずれも Fraxinus 属のアオダモあるいはヤチダモである。

供試体は使用年数によって3グループに分けた。すなわち、グループO(MLOA~F, MSOA~F)は新品、グループII(MLIIA~E, MSIIA~E)は使用年数2年前後、グループIII(MLIIIA~E, MSIIIA~E)は使用年数三年以上である。ここで、供試体の材令は立木からシャフトとして加工された時からの年数を考慮するのが妥当であるが、現在使用中のピッケルについて、これを調べることは不可能であるしシャフトの需用の多い現在、シャフト購入時と加工時の差は大きいものではないから、この間の材の変化は無視し、材令として使用年数を用いた。

供試体に用いたシャフトは、殆んど京大山岳部部員のものであり、年間の使用回数は70日前後である。

なお、シャフトはすべて変断面であるので、主要な

第1図 曲げ試験による使用年数一 曲げ極限強度



4点A,B,C,Dにおいて(Aはフィンガーから10cm Bは25cm, Cは40cmの部分, Dは石突のすぐ上)長軸方向と短軸方向の径を測り, 中間は直線的に変化するものとした。その他, 重量(スピッツェ, ハーネスを含む), 長さ, 秋材率, 含水率などをあらかじめ測定して, 強度との関係を考慮した。

2 試験方法

ピッケルのシャフトの破壊のモードとしては, 衝撃による破壊と曲げによる破壊が一般的であると考えられるので, 各供試体について, 曲げ試験と, 衝撃曲げ試験を行った。すなわち, 各供試体についてまず, 一点載荷, 単純支持による静的曲げ試験を行い, つぎにこの破片(フィンガー側とハーネス側に区別する)をもちいて, 容量10kg-mの衝撃試験機によって, 衝撃曲げ試験を行った。なお, 曲げ試験では, 加力方向が断面の長軸と平行な場合と, 短軸と平行な場合の二種類の試験を行った。供試体記号中MLは前者, MSは後者を示すものである。

また, ハーネス側の衝撃曲げ試験では, 衝撃ハンマーが金属部分と木部の継目を衝撃するようにして, 継手部分の耐力を測定した。

これらの試験はいずれも, JIS規格による試験方法に従うようにした。使用した試験機は, 東京衡機製作所のアムスラー式万能型木材強度試験機である。

3 実験結果および考察

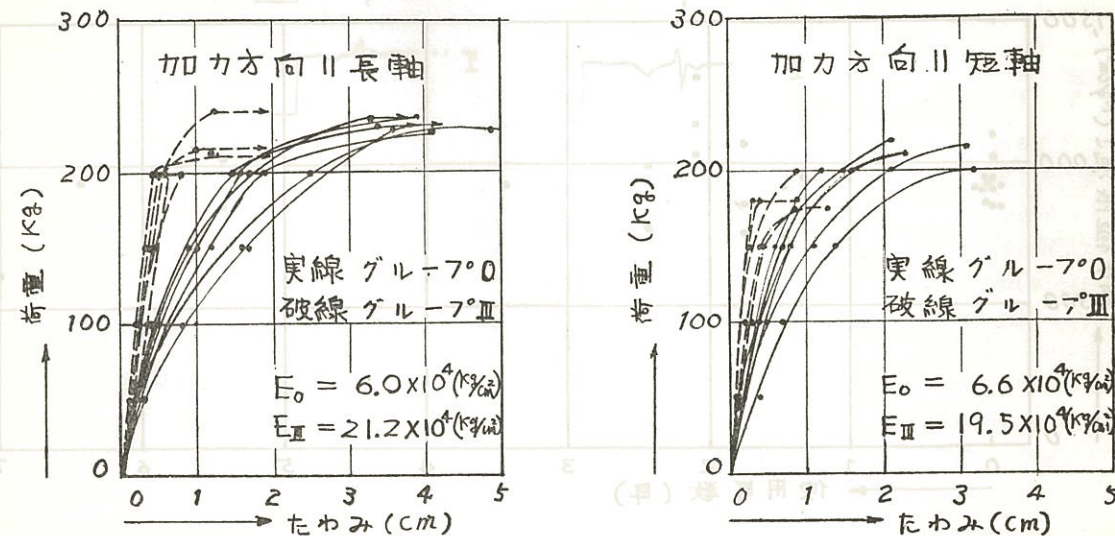
(1)曲げ試験 曲げ試験により得られた実験結果は, 第2表に掲げている。破壊断面の断面二次モーメントおよび断面係数は, 断面を楕円に近似して求めたものである。

この結果を理解しやすくまとめたものが, 第1図および第2図である。第1図からも明らかなように, 曲

げ極限強さ( $\sigma_B$ )は700~1,300kg/cm<sup>2</sup>で, この強さは使用年数によって大差はなく, 既に報告されているヤチダモ, アオダモの $\sigma_B$ のうち, ヤチダモに相当している。しかし, 使用年数が経つにしたがって, 材に靱性が失われ破壊時のたわみの減少が目立ち, 2~3年以上使用したピッケルのシャフトでは破壊も脆性破壊をする。この傾向を示したものが, 図2の荷重-たわみ曲線で, グループO(使用年数0)とグループIII(使用年数3年以上)では靱性に大きな変化があることは, この図からも明らかであろう。終極荷重の%の荷重に対するたわみから求めた弾性係数は, 平均値でグループOでは $E_0=6.3 \times 10^4$ (kg/cm<sup>2</sup>), グループIIIで $E_{III}=20.4 \times 10^4$ (kg/cm<sup>2</sup>)で, 後者は前者のほぼ3倍となっている。このように材が使用年数とともに脆くなり, 破壊時のたわみすなわち, 終極ひずみが減少するという現象は, 次に述べる破壊時の吸収エネルギーに大きな影響を与えるものである。

(2)曲げ衝撃試験 実験結果は第3表に掲げている。この実験では, グループOのシャフトは容量10kg-mの試験機では, フィンガー側シャフト部分1個, ハーネス継手部分3個が破壊しただけで, 他は破壊に至らなかった。このうち, ハーネス継手部分の破壊時吸収エネルギーの特に小さいMSOA, MSOC, MSOFは継手部分の加工の劣るものと言える。これらは継手における木材の断面欠損が著しく, しかもハーネス端部が滑らかでないため, 衝撃を受けたさい応力集中が起り, ちょうどハーネス端部が刃物のような作用をしたものと思われる。木部と金属部の継手の加工に際しては, 木部と金属部の接触面が滑らかになるよう考慮されることが望まれる。ハーネス継手部分については, これら特異なものを除けば, グループOの破壊時

第2図 荷重-たわみ 曲線



第1表 供試体

供試体記号	寸法 (cm)				重量 (gm)	長さ (cm)	重量/長さ (gm/cm)	材使用月数	秋材率	秋の材方率
	A 長軸×短軸	B 長軸×短軸	C 長軸×短軸	D 長軸×短軸						
MLOA	3.65×2.65	3.56×2.56	3.34×2.46	3.01×2.22	460	84.2	5.47	0	3.0	
MLOB	3.63×2.51	3.50×2.48	3.43×2.44	3.14×2.22	440	81.0	5.44	0	1.5	
MLOC	3.56×2.44	3.44×2.33	3.34×2.34	3.09×2.27	430	83.1	5.17	0	3.0	
MLOD	3.47×2.55	3.40×2.44	3.34×2.39	2.99×2.24	450	83.6	5.33	0	3.0	
MLOE	3.69×2.53	3.54×2.43	3.44×2.34	3.02×2.23	470	82.9	5.79	0	1.5	
MLOF	3.53×2.55	3.51×2.50	3.43×2.39	3.18×2.22	450	82.2	5.47	0	2.5	
MSOA	3.55×2.50	3.45×2.46	3.35×2.39	3.03×2.28	430	83.3	5.16	0	3.5	
MSOB	3.53×2.49	3.48×2.46	3.33×2.47	3.01×2.20	470	83.5	5.63	0	2.0	
MSOC	3.69×2.50	3.49×2.42	3.34×2.43	3.10×2.24	430	82.8	5.19	0	2.5	
MSOD	3.56×2.48	3.50×2.48	3.40×2.48	3.03×2.20	440	83.7	5.26	0	2.5	
MSOE	3.66×2.50	3.53×2.49	3.40×2.45	3.14×2.30	420	83.9	5.01	0	3.0	
MSOF	3.60×2.52	3.50×2.43	3.33×2.33	3.07×2.28	470	83.7	5.62	0	1.5	
MLIA	3.43×2.33	3.28×2.33	3.18×2.23	2.80×2.10	370	63.5	4.88	25	2.5	81°
MLIB	3.43×2.28	3.33×2.18	3.73×2.03	—	320	61.3	5.22	25	2.5	73°
MLIC	3.33×2.18	3.28×2.13	3.70×2.13	3.13×2.17	325	62.7	5.18	25	3.0	70°
MLIID	3.58×2.54	3.48×2.48	3.34×2.38	2.92×2.18	335	61.7	5.43	29	2.0	65°
MLIE	3.43×2.27	3.48×2.23	3.46×2.78	3.13×2.07	340	69.7	4.88	21	3.5	52°
MSIA	3.33×2.23	3.20×2.20	3.12×2.70	2.99×2.12	300	63.5	4.72	17	2.0	13°
MSIB	3.33×2.36	3.18×2.18	3.03×2.08	2.72×2.03	270	60.4	4.47	21	2.5	11°
MSIC	3.40×2.39	3.28×2.41	3.03×2.28	—	290	64.5	4.49	17	3.0	10°
MSID	3.23×2.34	3.23×2.33	3.12×2.22	2.81×2.05	300	63.0	4.76	16	1.0	2°
MSIE	3.38×2.16	3.36×2.16	3.37×2.70	2.90×2.05	350	67.2	5.21	22	6.0	43°
MLIIIA	2.44×3.40	3.39×2.33	3.23×2.25	2.95×2.09	330	65.3	5.1	29	3.0	33°
MLIIB	3.45×2.29	3.45×2.30	3.12×2.19	2.83×2.20	312	62.0	5.0	77	2.0	82°
MLIIC	3.43×2.40	3.32×2.33	3.05×2.14	2.72×2.08	322	61.7	5.2	54	2.5	11°
MLIID	3.45×2.07	3.37×2.12	3.32×2.03	2.94×2.11	310	65.9	4.7	不明	3.0	54°
MLIIE	3.61×2.23	3.59×2.21	3.48×2.21	3.07×2.10	425	72.0	5.9	41	2.0	19°
MSIIIA	3.40×2.49	3.42×2.50	3.23×2.57	2.66×2.21	353	60.9	5.8	65	5.5	12°
MSIIB	3.25×2.18	3.17×2.06	3.09×2.05	2.58×1.83	302	66.1	4.6	65	3.0	7°
MSIIC	3.34×2.16	3.33×2.21	3.24×2.19	2.95×1.91	290	64.0	4.5	不明	2.0	8°
MSIID	3.51×2.61	3.39×2.62	3.33×2.57	3.02×2.52	300	65.0	4.6	84	5.0	42°
MSIIE	3.57×2.23	3.61×2.25	3.57×2.22	2.90×2.07	435	69.9	6.2	29	3.0	11°

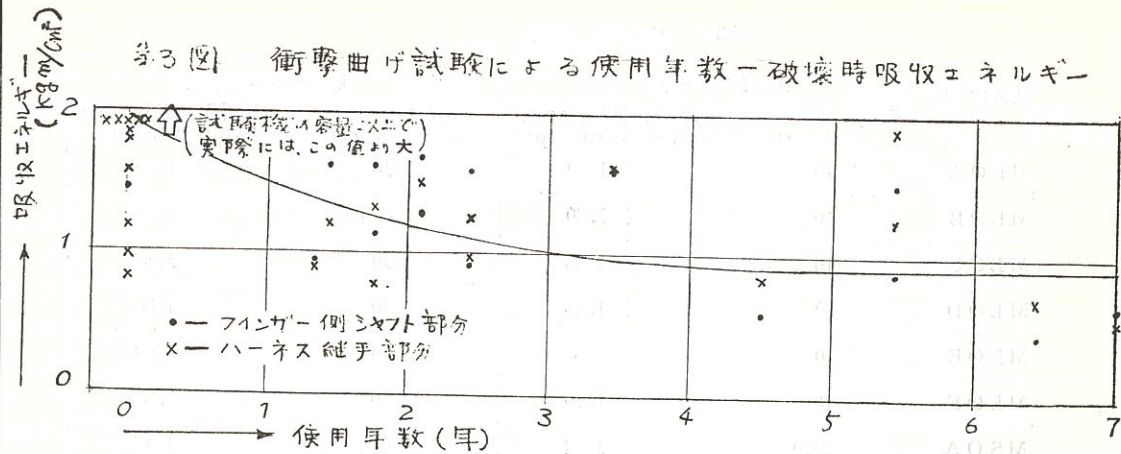


第2表 実験結果(曲げ)

供試体 記号	スパン (cm)	破壊時に おける荷 重 (kg)	破壊箇所 (支点か らの距離 (cm))	破壊断面		含水率 (%)	撓み(cm)					破壊点の 曲げモー メント (kg·cm)	曲げ応力 度 (kg/cm <sup>2</sup> )	破壊状況 及び備考
				断面二次 モーメント (cm <sup>4</sup> )	断面係数 (cm <sup>3</sup> )		kg	み						
								50	100	150	200			
MLOA	43	226	24	5.71	3.20	1.45				2.5	4.9	2712	847	
MLOB	43	235	24	5.25	2.99	16.7	0.2	0.5	0.9	1.7	3.3	2320	943	
MLOC	43	255以上	24	4.79	2.73	15.3	0.3	0.8	1.7		3.6	3760以上	1101以上	
MLOD	43	235	24	4.72	2.73	17.5	0.1	0.5	1.0	1.6	3.9	2820	1014	
MLOE	43	225	24	5.62	3.17	17.0	0.3	0.5	1.2	1.9	4.1	2700	852	
MLOF	43	230	24	5.30	3.02	16.5	0.2	0.4	0.9	1.6	3.4	2760	914	
平均	43	234	24	5.23	2.99	16.3						2812	945	
MSOA	36	210	18	2.52	2.05	17.2	0.1	0.4	0.8	1.6	2.3	1890	922	
MSOE	33	215以上	18	2.54	2.06	15.5	0.2	0.5	1.1	2.1	3.1	1935	939	
MSOC	36	213	18	2.52	2.07	17.0	0.2	0.5	0.8	1.6	2.3	1913	924	
MSOD	35	200	18	2.62	2.12	16.2	0.2	0.4	0.6	1.2		1800	847	
MSEOE	36	220	18	2.63	2.15	15.5	0.1	0.4	0.7	1.5	2.1	1930	921	
MSOF	33	210	18	2.50	2.05	15.5	0.4	0.7	1.4	3.2		9390	922	
平均	33	211	18	2.56	2.03	16.2						1901	913	
MLIA	43	230	25.0	3.90	2.36	12.0						2670	1130	
MLIB	43	265	23.5	3.93	2.39	14.0					1.5	3125	1310	
MLIC	43	200	25.0	3.60	2.23	12.5				3.5		2300	1030	脆性破壊
MLID	43	200	21.5	4.99	2.87	13.5				1.5		2150	764	同上
MLIE	43	235	20.0	4.75	2.72	12.0					1.5	2350	864	
平均	43	226	23.0	4.25	2.51	12.8						2519	1020	
MSIA	36	160	17.0	1.67	1.52	14.5			2.0			1360	895	
MSIB	36	170	18.5	1.59	1.45	14.5			2.0			1570	1030	
MSIC	36	170	16.5	2.28	1.89	14.0			1.0			1400	740	
MSID	36	180	18.0	1.98	1.72	14.5				2.0		1620	940	
MSIE	36	300	19.5	1.63	1.51	12.0					1.5	2470	1640	
平均	36	196	18.0	1.83	1.62	13.9						1684	1059	脆性破壊
MLIIIA	48	216	24	4.33	2.59	12.5	0.1	0.2	0.4	0.5	1.0	2580	998	同上
MLIIB	48	212	24	4.69	2.71	14.5		0.21		0.46	1.2	2540	933	同上
MLIIC	48	240	24	4.17	2.51	13.4	0.1	0.25	0.45	0.55	1.25	2880	1146	同上
MLIID	48	200	24	4.02	2.39	11.5		0.2	0.35	0.8	1.9	2400	1004	同上
MLIIE	48	200	24	5.02	2.79	14.2	0.2	0.35	0.45	0.6	1.5	2420	928	
平均	48	214	24	4.45	2.60	13.2						2560	1003	脆性破壊
MSIIIA	36	200	18	2.56	2.09	14.3	0.1	0.2	0.25	0.9	1.3	1800	862	同上
MSIIB	36	150	18	1.36	1.32	14.4	0.2	0.3	0.4	1.3		1350	1024	同上
MSIIC	36	150	18	1.78	1.61	15.3	0.2	0.35	0.45	0.8		1350	833	同上
MSIID	36	156	18	2.99	2.28	13.0	0.1	0.2	0.25	0.3		1400	614	移動リング
MSIIE	36	156	18	2.15	1.80	13.5	0.1	0.2	0.3	0.9		1400	778	同上
平均	36	163	18		1.82	14.1						1460	814	

第3表 実験結果(衝撃)

供試体 記号	I フィンガー側		II ハーネス継手側	
	吸収エネルギー (kg·m)	単位断面積当りエネ ルギー(kg·m/cm <sup>2</sup> )	吸収エネルギー (kg·m)	単位断面積当りエネ ルギー(kg·m/cm <sup>2</sup> )
MLOA	>10	>1.40	>10	>1.90
MLOB	>10	>1.40	8.6	1.57
MLOC	>10	>1.45	>10	>1.82
MLOD	>10	>1.45	>10	>1.90
MLOE	>10	>1.37	>10	>1.90
MLOF	>10	>1.40	>10	>1.80
MSOA	10.0	1.44	6.4	1.17
MSOB	>10	>1.45	>10	>1.92
MSOC	>10	>1.33	5.3	0.972
MSOD	>10	>1.44	>10	>1.91
MSEOE	>10	>1.40	>10	>1.76
MSOF	>10	>1.40	4.4	0.801
平均		>1.43		>1.62
MLIC	9.6	1.68	8.1	1.52
MLIF	7.0	1.13	3.9	0.77
MSIA	9.8	1.62	6.0	1.20
MSIB	10.0	1.62	5.7	1.32
MSID	5.7	0.96	4.0	0.89
MSIE	7.4	1.29	—	—
平均		1.39		1.14
MLIIIA	6.1	0.92	6.1	1.26
MLIIB	2.7	0.43	3.5	0.70
MLIIC	3.8	0.59	3.7	0.83
MLIID	8.3	1.48	7.6	1.61
MLIIE	10.0	1.58	8.2	1.62
MSIIIA	10.0	1.50	8.9	1.89
MSIIB	4.9	0.88	4.6	1.25
MSIIC	3.3	0.58	4.0	0.90
MSIID	4.6	0.64	3.3	0.55
MSIIE	>10.0	1.59	4.6	0.97
平均		1.02		1.16



吸収エネルギーの平均は 1.9kgm/cm<sup>2</sup> 以上となる。フィンガー側シャフト部分は、殆んどすべて実測できなかったが、加工による影響がないので、ハーネス部と同じ、もしくはそれ以上の耐力を得るものと考えられる。

使用年数に対する破壊時吸収エネルギーの変化に注目すると、グループOの上記の値に対して、グループⅡでは、ハーネス継手部分で40%、フィンガー側シャフト部分で21%、グループⅢでは、それぞれ40%、46%減少している。しかも、グループⅡ、Ⅲでは、供試体の半数が、グループOの推定破壊時吸収エネルギー(1.9kg-m/cm<sup>2</sup>)の1/2以上の減少がある。

この現象は、曲げ試験において得られた“使用年数によって弾性係数が変化し、終極ひずみが減少する”という傾向ともよく一致している。使用年数と破壊時吸収エネルギーの低下の関係を示したものが第3図である。この図および、木材の耐朽性に関して行われた戸外試験によれば、ヤチダモの屋外放置耐用年限が5~6年であるとの報告(木構造計算規準同解説P.205~206)などを参考にし、さらに登山用具としての特殊性を考慮すれば、シャフトは2~3年毎に新しいものと取りかえることが望ましい。

むすび

現在使用されているシャフトは、いくらの曲げモーメントを受ければ破壊するか、いくらの衝撃を受ければ破壊するかは、以上の結果から容易に推定できる。ビッケル使用中に起こる載荷状態を仮定して、以上の結果を適用すれば、破壊耐力について興味ある結論が得られる。しかし、実際に起こる載荷状態(特に支持条件)は毎回異なるものであるから、ここである載荷状態を仮定して結論を出すことは、シャフトの強度について誤解を招く恐れが多分にあるので差し控えた。載荷状態を仮定すれば、簡単な計算によって耐力が求められるから、読者諸兄に考えていただくことにした。秋材率や目切れと強度との関係は、今回の実験では顕著な結果が得られなかったため、今後の報告にゆずることにする。

本実験にかんして、京都大学農学部森林利用教室(中戸教授)には、試験機を使わせていただき、同教室の高橋徹氏には、木材の力学的性質その他について資料をお貸しいただくなど、ひとかたならぬご援助をいただきました。ここに深く感謝する次第であります。

大阪 AACK 会員の動き

大阪在住のAACK会員が定期的集っている山の話をしたのは1年余り前からですが、その後メンバーもしいに増え現在15名でいどの会員が動いています。昨年度の会員の主な山行はつぎのとおりですが、今年度も大いに行くつもりですので御参加下さい。

- 33.5 東北朝日岳、滝谷。
- 33.9 雪彦山岩のぼり。
- 33.10 美濃冠山。
- 33.12 南アルプス鋸岳。
- 39.1 氷の山スキーツアー。

(連絡先) 谷口 朗 丸紅飯田木材部 (271)-2231  
潮崎安弘 関西電力近畿支社電力課 (441)-3861

会 員 紹 介

工 楽 英 司 氏

工楽さんは、私よりもあとから三高に入ってきて、私がゆっくりしているあいだに、さきに卒業してしまいました。私は、昭和6年の卒業です。

小柄で活動的で、すこしそういう人物でした。そして、マメなひとです。理路整然たる説得ではありませんが、かれはひとつの主張について全く根気よく騒音を発し、こちらはもう閉口してしまっているうちに自然に動き出す、と云ったマネージメント、組織化の才能がありました。大学の教職員組合でも論客(『工楽さんはよう発言しやるわ』当時のある助手の言)だったときいていますし、そのあと国会に入られたのも、そうした論客的・情報収集的・組織的才能の継続だったのですが、NHKとも科学番組の専門委員として関係があり、『近頃のNHKの科学番組ですがね——』などと、私もたびたび忠告・示唆を受けていました。

一緒に山へのぼったことはあまりないのです。『ノ



ートランプ』と云うトランプのゲームに熱中して、下宿とか山小屋とかスキー合宿とかの工楽さんはすこぶる戦斗的であり、敵にまわすと全くしゃくにさわる相手でした。配られたトランプをおもむろにとりあげ、『強いて云えばですな、相応ずるの手ですか』などと、腹の立つことを云い、かれが加わっておれば勝負はたいへん白熱化した。塩見君や遠山君とではまるで世捨人とトランプしているみたいでした。

かれも古きよき時代のひとです。新鮮な放浪の精神だけに生きる前「科学的」、非「近代的」な山登りの仲間です。ごみだらけで西日のカンカンさしこむ三高山岳部ルームで、山で死ぬことの意味をディスカッションしたりしましたが、遭難に伴う巨額の経費などは一向われわれの念頭にはありませんでした。

かれはしかし、何回目かのAACK海外遠征隊長になるでしょう。たしかにその適格者だと私は思います。 本野 亨一

小 野 寺 幸 之 進 氏

私が三高へ入った時、小野寺氏はたしか最上級生であった。当時のルームの壁には部員の登山日数グラフがはってあって、年間の延登山日数が一目で分かるようになっていた。何日だったか忘れたが、一定の日数を越えると必ず落第する限度があった。それだけ授業をさぼるからである。小野寺氏は何年間かそのトップを飾っていたのではなかったかと思う。多分150日を越えていたのではないか。

今でこそ、ロマンスグレーの紳士——特にアメリカから帰ってから紳士ぶりが板についたようだ——であるが、当時は目ばかりギョロつかせ、年中顔色のあせない、一見スゴミのある山男、それが彼の印象であった。同輩は幸之進と呼んでいた。今時にちょっとめづらしい武士らしい名だったからだろう。スキーを教えてもらった記憶があるが、上手だったという記憶はない。今西インナーリーン、西堀ショートスキー、高



橋アールベルグが出るまでは、コールフィールドの本で直滑降しかやらしてもらえなかった。それしかやれなかったのかもしれない。遭難があいついで起こり、小野寺氏も大分ソーサク隊に加わった。彼は片貝川で死んだ上村等と同級だった。先輩連が心配してリーダーの認定をやり、リーダー章を作ったのもこの頃である。

京大へ入った後の彼の最大の活躍は北千島遠征であろう。これは小遠征の皮切りで白頭山、興安嶺はその後のことである。卒業後はあまり活躍していない。なにしろ彼の講座の教授は学生部長とか教養部長だとかになりつつけて、暇があたえられなかったからだと思う。彼のために弁護しておく。一昨年山岳部のインドラン遠征が決り、隊長について相談をうけた時、彼を推したのは私であるが、これでみごと復活して、現在山岳部長を努めている。

四手井 綱 英

AAACK 蔵書目録 (その1)

- Huxley, A. Standard Encyclopedia of the World's Mountains  
Weldenfeld & Nicolson, (Netherland) 1962, P. 383
- Kohli, S. M. Last of Annapurnas  
Publications Division, (Delhi) 1961, P. 143
- Captain Grant, R. H. Annapurna II  
William Kimber, (London) 1962, P. 192
- Banks, M. Rakaposhi  
Secker & Warburg, (London) 1959, P. 238
- Pillerwizer, W. Zwischen Wüste und Gletschereis  
Hermann Haack Gotha, (Germany) 1960, P. 209
- Schmuck, M. Broad Peak  
Das Bergland Buch, (Austria) 1958, P. 260
- Vergheze, B. G. Himalayan Endeavour  
George Allen & Unwin, (London) 1962, P. 154
- Eggler, A. The Everest-Lhotse Adventure  
George Allen & Unwin, (London) 1957, P. 222
- Barler, R. The Last Blue Mountain  
Chatto & Windus, (London) 1959, P. 210
- Franco, U. Makalu  
Jonathan Cape, (London) 1955, P. 253
- Lenser, G. Pumo Ri  
Orell Fössli Verlag, (Switzerland) 1962, P. 196
- Tilman, H. W. Ascent of Nanda Devi  
Cambridge Univ. Press, (Cambridge) 1937, P. 235
- Noyce, W. Climbing the Fish Tail  
Heinemann, (London) 1958, P. 150
- Clark, J. Hunza  
Hutchinson & Co., (London) 1957, P. 262
- Steinmetz, H. Vier im Himalaya  
Chr. Belser Verlag, (Deutschland) 1955, P. 207

編集後記

前号をうけてサルトロ・カンリ遠征について、座談会と学術的報告二篇をのせた。座談会の記録はもっとたくさんあるけれど、スペースの許す範囲にとどめざるを得なかった。

「AAACKの30年」は会結成前後から敗戦までを取り扱う第2部を収めた。記録者は資料を集めて正確を期しているが、まだ誤りや脱落があるかと恐れている。お気づきの点はどしどしお知らせいただくよう希望する。

木曜講座は「カラコラムに残された問題」を特集した他にネパールその他のレクチュアが数多く行われたが、次号以下に譲る。

第4号には西イリアン遠征隊の特別寄稿をお願いする予定であるが、会員各位は紀行、随想、研究などなんで

作品をお寄せいただきたいと思う。せめて年二回刊行せぬと記事の新鮮さが保てず、刊行の意義が薄れるかと思うが、そのためにも多くの原稿を用意しなくてはならない。

本号の場合、原稿の大部分は2月はじめに集まっていたのだが、編集者の怠慢から、3月末の刊行予定が2ヶ月以上おくれってしまった。投稿お願いするとともに、ここにお詫びする。(酒井敏明)

昭和39年5月30日 発行

発行所 京都市左京区吉田本町 京都大学内

社団法人 京都大学学士山岳会

代表者 会長 今 西 錦 司

印刷所 粟 津 一 印 刷 所

